昭和61年４月１日号（毎月２回１日、15日発行）第29巻・第７号　通巻652号　昭和54年６月２日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1986
7
4.1.

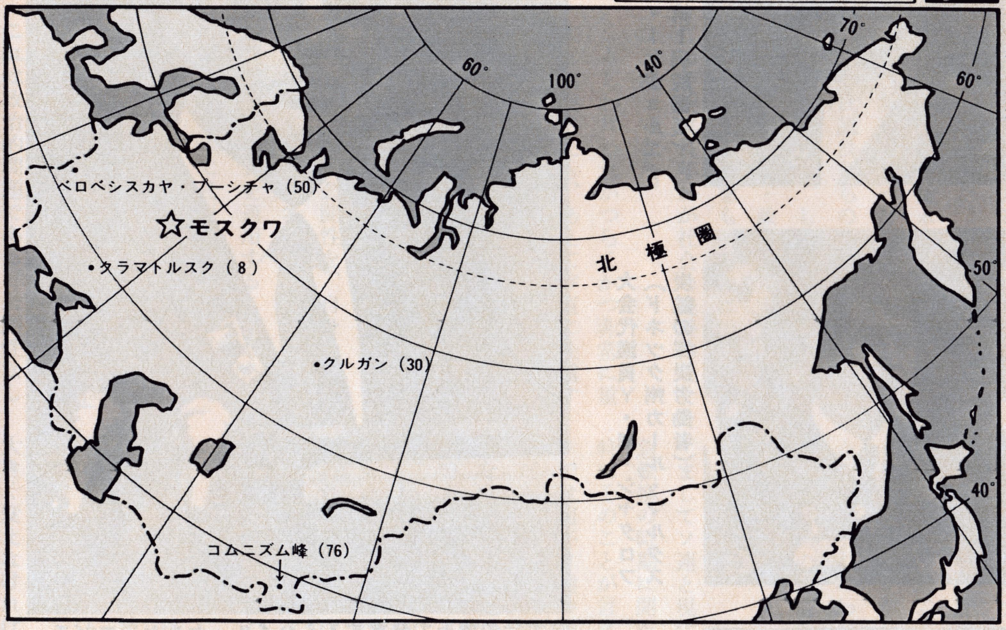


ソ連共産党第27回大会閉幕

第7号　1986年4月1日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦



★数字は関連記事のページ

表紙　ソ連共産党第27回大会の代議員ジナイダ・コンドラショワ（8ページ参照）
カメラ　V・ビャトキン

編集　在日ソ連大使館広報部　電話03(447)3536(代表)
〒141 東京都品川区東五反田3―9―13
振替口座　東京9―122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　(株)新時代社　電話03(293)4881
〒101 東京都千代田区神田神保町1―44
振替口座　東京0―13581（加入者名＝新時代社）

本誌の定期購読をご希望の方は、1部半年1800円、1年3000円、2年5000円の誌代（送料込み）を添えて、上記のいずれかにお申し込み下さい。多部数の場合の誌代は、お問い合わせを。

ソ連共産党第27回大会を振り返って

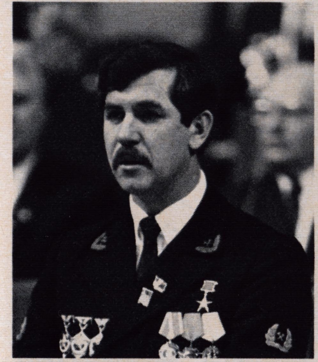
本誌評論員　パーベル・アントノフ



党大会の壇上で発言するミハイル・セルゲーエビチ・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委員会書記長・ソ連最高会議幹部会員



大会代議員M・I・ジェルニナ（プスコフ州第1病院部長）



大会代議員Y・M・シャタロフ（ドネツク州カール・マルクス炭鉱の採炭労働者）



大会代議員G・I・ウスマノフ（党タタール州委員会第一書記）



大会代議員N・V・ゲレルト（カザフ共和国ツェリノグラード州アマンゲルドイ・コルホーズのトラクター運転手）



大会代議員Y・I・ロボフ（ウドムルト自治共和国イジマシ生産合同の党委員会書記）

2月25日から3月6日までソ連共産党第27回大会が開かれ、一九〇〇万人の党員から選出された五〇〇〇人の代議員が出席した。また出席した来賓の数もこれまでのどの党大会よりも多かった。大会第1日目には一一三ヵ国の共産党、労働者党その他の進歩的諸政党の一五二の代表団が出席した。

今大会は特に強い関心が寄せられた。これほど熱い視線を浴びた党大会はいまだかつてなかった。大会のプレスセンターに登録された取材記者の数は約三〇〇〇人にのぼり、そのうち一〇〇〇人余りが外人記者であった。

第27回党大会では経済的プロセスと経済実験の性格と奥行き、それらのテンポと方向が審議された。意見は実にさまざまで、こんどの変革を資本主義への復帰に近いものと見て真っ向うから変革を否定する者から、現在の経済システムをすぐに根底から再編するよう訴えるナイーブで熱狂的な支持者にいたるまで、いろいろな顔ぶれの人々が登壇した。

これらの討論は、ソ連の国民経済がぶつかった客観的諸矛盾を精神的に濃縮したものであり、生産関係と経営方法、党・国家的指導のスタイルの本格的再編の必要を訴えたよりすぐりの声の集まりであった。それらのねらいは、計画化と管理の抜本的改善、科学技術進歩の加速であった。

大会代議員たちの発言は、社会主義的理想の内容と、しばしばその理想とはほど遠い社会・政治的現実との間の他の数々の矛盾をも明るみに出した。この矛盾は長年わが社会の発展の足をひっぱってきた。

「もしわれわれがつらくかつ非常に重大な真実さえも、あえて率直に吐露する勇気があれば、われわれはありとあらゆる困難に打ち勝つすべを、必ず無条件に学びとるであろう」――党の中央機関紙プラウダに引用されたレーニンのこの言葉は、第27回大会と共鳴した。レーニンは公開性を、自分の傷を自分でいやす剣と名付けた。社会主義の建設とは批判を適用することである。なぜなら批判こそ社会的進歩の主要な要素の一つであるからだ。

党中央委員会政治報告の中でミハイル・ゴルバチョフは「公開性の拡大はわれわれにとって原則的な問題である。これは政治的問題である。公開性なしには、民主主義、大衆の政治的創造、管理への大衆の参加もあり得ない」と述べた。

レーニンの定義によると、党大会は最高の機関であり、大会では何事もやむやにしてはならず、なんでも率直に語られねばならない。大会だけが「正確さ、完全さ、全面性、確実性の点でただ一つのわが党の実情、見解、気分、計画の実情を」示すことができるというのが、レーニンの基本的立場であった。

ましてソ連と現代世界全体の生活の急転換の時期に開かれた党大会の場合、特にそのことが言える。

では何がソ連の国内生活の転換の本質だろうか？　まず経済の発展で外延的な成長の可能性が汲み尽くされたことである。社会をさらに進歩させるには、経済運営を集約的形態へ移行（しかも速く）させねばならない。いまわれわれに必要なのは、いまわれわれが持っているものをより多くではなく、持っているものをよりよくすることである。

集約的な発展へ移行し、質的指標を重視するには、経済や社会生活全体の現在の管理システムなり、この管理のメカニズム、手段、方法、形態なりを大きく変えなければならない。

いま挙げたことを実現する（しかも速く、エネルギッシュに）ためには、人々の心理を根底から変える必要がある。またこれまでの習慣や思考様式を



ソ連共産党第27回大会の開会宣言に拍手で応える代議員たち（1986年2月25日、モスクワ、クレムリン大会宮殿の会場で）

変え、社会生活のさまざまな面や民主主義の諸問題への型にはまった取り組みを一掃する必要がある。

もちろん、この25年間に非常に多くの実績があがり、われわれは国全体を事実上新しく建設した。ある人にとってはそれがはっきり見えないかもしれないが、われわれ自身はこれがとてもよく見える。しかしわれわれの活動がもっとよい成果をあげえたことは確かである。すべてが思いどおりにいったわけでなく、こうなった主な原因はわれわれ自身にあり、われわれは誰も非難するつもりはない。われわれはしばしば正しいことを言ってきた。しかし折角のよい言葉もつねに行動の裏付けがあったわけではない。それが政治報告のなかで述べられたわれわれの発展の重大な教訓の一つである。

その教訓の第一は真実の教訓と言われている。つまり「責任をもって過去を分析すれば、未来への道がはき清められるが、いい加減な態度はおずおずと肝心の問題を避けて通り、現実の政策づくりを妨げ、われわれの前進を阻む」のである。

ソビエト社会はいま、社会主義的経済メカニズムの極めて重大な改編に直面している。ごく近い将来の戦略目標は、社会的・経済的発展の加速である。

▼休憩時間のクレムリン大会宮殿ロビー



若い代議員たちに囲まれた一九一二年以来の古参党員マルタ・クルスティンソン



加速とは経済力を増強し、同時に経済力を質的に更新することであり、経済の構造的改編、投資政策の変更である。加速とは企業の自主性を高め、企業を自己融資や完全な独立採算制に移すことである。

第12次5カ年計画（一九八六―一九九〇）は、今後の効果的な前進のための力とエネルギーを与える可能性をもっている。再編は科学技術革命の強固な土台に立って行われよう。

加速とは、また一人ひとりの大臣から平の労働者に至るすべての者がその労働を強化することである。われわれがよりよい生活を営みたいなら、――われわれはそれを希望しているし、われわれの生活はよくなるであろうが――それ以外の道は社会主義の下ではありえないのである。

最後に、加速とは社会主義的民主主義をさらに発展させることである。これなくしては社会主義社会は機能しないのである。

決定の作成に積極的に影響力を及ぼし、その決定の遂行を検証し、官公庁の活動に関する必要な情報を受けとる現実的な可能性を一人ひとりの市民に与えるすべての手段が、作動しはじめるであろう。

加速戦略の最重要な観点は、社会的な観点である。この問題はわれわれにとって別に新しいものではない。一九一七年の革命が実行されたのも、いろいろな社会問題を解決するためであった。だが今日、われわれは果たして、ソ連の人々の物質的、精神的欲求を完全に満足させるために万全を尽くしたと、言えるだろうか？「その通り、尽くした」と答えるような「大胆な人」は多分いないだろう。それどころか、この分野で見逃された失敗と過ちは一つにはとどまらないと、われわれは見ている。この点についてはこの大会で、歯に衣を着せず大胆率直に言及されたのであった。

いま、こう問いかける者が少なくない――一体なぜ、われわれはこれほど痛烈な批判をするのか、なぜこんなに根掘り葉掘り過去のことを分析するのかと。それは、われわれがまず第一に、よりよくなりたいからであり、よりよい生活を営みたいからであり、第二には、われわれは自分の力を信じているからである。

われわれはなんぴとの名誉をも汚そうなどとは思わない。だれもが自分の技量と能力と欲求に従って働いたのである。われわれが望んでいるのは、前進することである。そして、前進するためには、どこで、いつ、どんな過ちを犯したのか、何をそのまま残しておかねばならないのか、何を、硬直化した不要物として、前進の邪魔物となったものとして捨てなければならないのかを、知らずにはすませられないのである。



休憩時間に他の代議員と歓談する有名な織工で社会主義労働英雄2回のV・ゴルベワ（中央）

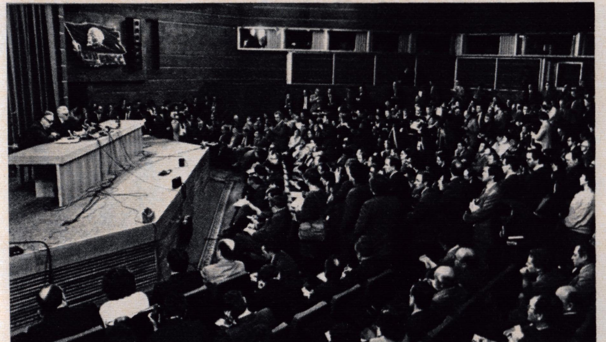
党大会では、国際問題に多くの注意が向けられた。いろいろな国際事件についてわれわれが行った分析に必ずしもすべての者が賛同した訳ではないようだが、この分析を理解しようとする試みは余計なことではないかもしれな





大会宮殿で休憩時間にソ連のテレビのインタビューに応じるフィデル・カストロ・ルス・キューバ共産党第一書記・キューバ共和国国家評議会議長・閣僚会議議長

上左　代議員たちのサインの求めに応じる社会主義労働英雄2回、全ソ農学アカデミー名誉会員のテレンチー・マリツェフ



◀ソ連共産党第27回大会プレスセンターで行われた内外記者団のための記者会見（1986年2月24日）

い。

いまや、われわれは危険な境界線に近づいた。ほぼ3/4世紀前、オーストリア・ハンガリー帝国のフェルジナンド皇太子を撃った男は、それで第一次世界大戦が始まるとは考えもしなかった。

いま、あのときの大学生の役割にあたるのはコンピューターかもしれない。コンピューターはなおさらのこと、自分が最初の核戦争、人類史上最後の戦争を始めるなどとは考えもしないのである。人類の運命をコンピューターの手中――もしくはコンピューターが所有しているもの――に委ねてはならない。人類の運命に責任をもつ者は理性でなければならない。

いまや資本主義と社会主義の歴史的抗争はもっぱら平和的な競争という形でしか行われえないという客観的な条件ができた、と本大会で述べられた。ここから、人間のものの考え方もこういった新しい客観的情況と完全に照応してつくり替えられなければならないという結論が生まれてくるのである。

だが、マルクス主義的分析が証明しているように、人間の意識は客観的現実より立ち後れるものであり、客観的現実には追いつかないものである。そこでいま、問題なのは、われわれはみなこの客観的現実に追いつかなければならないということ、客観的現実と意識の立ち後れとのギャップの中で全人類の文明を滅亡させてはならないということにある。

いよいよ、最後の点に触れよう。この社会があらゆる矛盾対立、不安と心配、ドラマと悲劇から解放された状態にあることは決してないのである。そうだとしたら、社会は退歩し、その生命力、創造力を失うことを免れなくなるだろう。ところが、そういうことは起こらないだろう。われわれを取り巻く世界は無限だ。そして、われわれよりはるか未来の子孫といえども「われわれは全知全能だ。われわれはすべてのものを支配する力を持っている」などとは言えないであろう。

真理と迷妄との間の、進歩と知的保守主義、ひとりよがりとの間の闘いや、性格と意見の衝突の、劇的なあつれきこそ、われわれの実生活のダイナミズムと張りつめたリズムの特徴をなすものであり、このことをソ連共産党第27回大会はもう一度あらためて強調したのである。

ソ連共産党第27回大会での日本共産党中央委員会書記局長金子満広同志のあいさつ

（一九八六年3月4日）



ソ連共産党大会であいさつする金子満広・日本共産党中央委員会書記局長

親愛な同志のみなさん

私は、日本共産党中央委員会を代表して、ソ連共産党第二十七回大会の代議員と全党員ならびにソ連人民に、祝賀と連帯のあいさつをおくります。

私たちは、あなたがたの党大会が、核戦争阻止と核兵器廃絶、世界平和のための重要な国際的諸課題を推進するうえでも、社会的、経済的発展を加速化し、国民生活をいっそう向上させるうえでも、大きな成功をおさめることを希望するものです。

第二次世界戦争後の核軍拡競争によって核戦争の危険がかつてなく増大し、人類の生存そのものが脅かされている今日の状況のもとで、核戦争阻止、核兵器廃絶の課題ほど差し迫った世界政治と世界の人民の運動の課題はありません。この点で、一九八四年十二月、日本共産党とソ連共産党との首脳会談で合意された共同声明は、きわめて重要な意義をもっています。この共同声明は、この課題を「人類にとって死活的に重要な緊急の課題、反核・平和運動、世界政治全体における中心課題」と明確に位置づけ、「国際政治の場でも、国際連合でも、二国間交渉やその他の国際的会議でも、……第一義的に提起し、その実現のため一貫して奮闘すること」を両党の重要な合意点として強調しました。

わが党は、核兵器廃絶をアメリカおよび他の核保有諸国に提案したゴルバチョフ・ソ連共産党書記長の声明にたいし、歓迎を表明しました。もちろん、核兵器廃絶の達成期限を十五年間としたことについては、国際的な世論の発展と諸国間の政治的合意の推進によってこの期限を早めることは可能であるし、またこの声明で提起されている核兵器廃絶にいたるまでの具体的プログラムそのものについては、さまざまな見解がありますが、ゴルバチョフ声明が、核兵器廃絶の課題を核保有諸国間の交渉の課題として提起し世界政治の具体的日程にのぼせたことは、まさに画期的意義をもつものであり、その点で、この提案は日ソ両党共同声明の精神の発揮であると私たちは評価しています。わが党の宮本顕治中央委員会議長は、一月二十八日、レーガン米大統領に書簡を送り、同大統領がゴルバチョフ声明を「歓迎」したこと、これまでにも核兵器廃絶への意志や期待を一度ならず表明していることを指摘し、その絶好の機会が生まれているいまこ

そ、こうした言明を実行に移すべきだと呼びかけました。ところが、レーガン大統領は、二月二十四日の声明のなかで、核兵器廃絶を言いながら、さまざまな「前提条件」をもちこみ、事実上、この課題を無限のかなたに追いやっています。わが党は、この立場をきびしく批判しました。

私たちは、今日の新しい情勢のもとで、核保有諸国間、なかんずく米ソ両国間で核兵器全面禁止・廃絶のための具体的な政治合意が達成されることが、きわめて重要だと考えます。この合意の実現が早ければ早いほど、核兵器廃絶の達成期限をそれだけ短縮することができるし、また宇宙の軍事化阻止を含む重要課題にかんする積極的合意への新しいアプローチも可能になるでしょう。核兵器廃絶の課題の実現を促進する決定的な力は、世界の人民の運動と世論の動員です。昨年発表された、核戦争阻止、核兵器廃絶のための「ヒロシマ・ナガサキからのアピール」に賛同・署名した人は、すでに百四十五カ国、百をこす国際組織に広がり、国内では千七百四十万をこえました。

日本共産党は、世界唯一の被爆国の党として、核戦争阻止、あらゆる核兵器の廃絶を願う全世界のすべての人びと、組織、政党をもっとも広範な反核国際統一戦線に結集し、核兵器にしがみつく勢力を孤立させるために、ひきつづき全力をつくすものです。

わが党は、また、民族自決権の擁護を、国際連帯の中心任務の一つ、世界平和の大前提として位置づけ重視しています。わが党は、いかなる口実や勢力によるものであれ、民族自決権のどのような侵害もけっして容認しない原則的立場を堅持しています。（中略）

親愛な同志のみなさん

わが党は、自主、同権、相互内部問題不干渉の原則に立脚して、日本共産党とソ連共産党との関係がひきつづき発展すること、とりわけ、日ソ両党共同声明にもとづき、核戦争阻止、核兵器廃絶のための闘争での共同が前進することを、大いに願っています。



議事の休憩時間に他の代議員たちと語るジナイダ・コンドラショワ

ソ連共産党第27回大会代議員

ウクライナの女性旋盤工

本号の表紙に登場した女性——ジナイダ・コンドラショワは、ウクライナ共和国ドネツク州クラマトルスク市にあるノボクラマトルスク機械工場の旋盤工。この工場のことは前号でも紹介したが、ここでは自走式掘削機、鉱石破砕ミル、圧延機などの製鉄所用大型機械を作っている。彼女は最高ランクの旋盤工としてもう23年も工場の生産に貢献してきた。

コンドラショワはソ連共産党第27回大会の代議員が宿泊しているモスクワのロシア・ホテルで、次のように語った——「私は中学生時代から金属工作に興味を持ちはじめ、学校を卒業するとすぐに今の工場に入りました。以来ずっとそこで働いていますが、技師をしている夫とは隣の職場で知り合いました」

コンドラショワには子どもが２人おり、家族は仲むつまじく、全員がスポーツ好き。彼女自身若いころ陸上の近代五種をやっていたし、今ではスキーと自転車に熱中している。息子さんは母親につづいてやはり旋盤工になることを希望し、工場付属の機械工業中等専門学校の３学年で学んでいる。娘さんは普通学校の８年生で、まだ進路は決めてない。

ドネツク州の党員たちは腕のいい尊敬すべき生産者のひとりとしてコンドラショワを第27回党大会の代議員に選出した。彼女は第11次５カ年計画の課題を３年２カ月で遂行し、1984年にソ連最高の栄誉である社会主義労働英雄の称号を受けた（ウクライナの女性旋盤工でこの称号を受けたのは彼女が初めて）。

「もし私のことが『今日のソ連邦』誌に出るのでしたら、私は日本が非常に好きだとお伝え下さい。1982年に観光客として日本へ行きましたが、もういちど日本を訪れて、日本の仲間の仕事ぶりを見るというのが私の夢です」とコンドラショワは語った。



ソ連共産党第27回大会に参加した日本社会党の代表団は２月26日、モスクワのリハチョフ記念自動車工場を視察。写真は工場の集会であいさつする武藤山治代表団長・同党中央執行副委員長。

リハチョフ記念自動車工場での日本社会党中央執行副委員長武藤山治同志のあいさつ

（一九八六年２月26日）

親愛なるソ連共産党の友人の皆さん、

ここで働く労働者の皆さん。

私は、日本社会党中央執行委員会を代表して、今回の貴党の27回大会への御招待に感謝し、一言ごあいさつをさせて戴きたいと存じます。

私は、まず始めに、貴党ならび貴国人民が今日まで多くの問題に直面しながらも社会主義建設を促進し、現在さらにその経済を加速的に発展させるために、経済改革に積極的にとり組んでおられることにたいし敬意を表するものであります。

国際情勢は、核軍拡競争が際限なく続いているため、核戦争の恐怖がわれわれの前に迫ってきています。世界の各地域における紛争も激化し、拡大しており、平和を極めて不安定なものにしております。

こうした状況のなかで、昨年十一月ジュネーブで米ソ首脳会談が開催され、両国関係の改善と軍縮促進について一定の合意が生まれたことはまことに歓迎すべきことであります。

また、本年一月に、ゴルバチョフ書記長が提唱された「三段階の軍縮提案」は極めて画期的かつ現実的提案であり、日本社会党はこの提案を高く評価するとともに、米国政府がこの提案にたいして積極的な対応を早急に行うよう強く希望するものであります。

私たちは、昨年九月、石橋委員長を団長とする党代表団を貴国に派遣し、ゴルバチョフ書記長をはじめとする貴党の幹部の皆様と会談し大きな成果をあげることができました。

日本社会党代表団の帰国後、シェワルナゼ外相の日本訪問も実現し、日ソ両国関係もこれまでの冷却した関係を転換して関係改善の道を歩み始めました。私たち、日本社会党はこうした動きを歓迎するとともに、日ソ両国人民間の友好協力が発展するなかで文化と経済の交流協定を強く望んでおります。

日本社会党は本年一月に開催された第五〇回続開大会において「新宣言」を採択し、新しいスタートを切りました。

私たちは、（中略）、非核三原則を堅持して日本とアジア・太平洋地域の平和を守るための反核・軍縮運動を強力に推進する決意であります。

私たちは、隣国である日ソ両国の関係改善とアジアと世界人類の平和のために、ソ連共産党との友好関係を一層発展させる決意です。

今回の貴党大会の御成功を心より祈念しながら私のごあいさつを終わります。

一九八六―一九九〇年度および二〇〇〇年までの期間のソ連の経済・社会発展の基本方向について

―ルイシコフ・ソ連閣僚会議議長の報告要旨（一九八六年3月3日）



「1986―1990年度および2000年までの期間のソ連の経済・社会発展の基本方向」草案について報告するN・I・ルイシコフ・ソ連共産党中央委員会政治局員・ソ連閣僚会議議長（1986年3月3日）

「一九八六―一九九〇年度および二〇〇〇年までの期間のソ連の経済・社会発展の基本方向」草案は、重要な政治上、国民経済上の文書で、その中軸にあるのは、わが国の経済発展の加速という一九八五年のソ連共産党中央委4月総会で打ち出された構想である。基本方向に関する文書は、ソ連人の切実な利益、その将来への期待に完全に合致する。約一億一〇〇〇万人が参加したこの文書の全国民的審議の結果が、これを示した。

この5年間（一九八一―八五年）に、ソ連国民の労働によってわが国の経済力は大幅に強化された。とは言え、ソ連共産党第26回大会で定められた課題の遂行は、複雑な状況の中で進められてきた。七〇年代にソ連の経済発展に現れた好ましくない傾向が、八〇年代の初めに強まった。第11次5カ年計画の最初の2年間に、経済成長率が低下した。経済運営の質的指標が悪化した。一九八二年の工業生産成長率はそれに先立つ5カ年の平均値の$\frac{2}{3}$であった。

一連のファクターがこれに影響を与えた。しかし欠陥の根本原因は、外延的成長の可能性が汲み尽くされたことに関連する経済情勢の変化が実際活動

で適時に考慮されず、科学技術進歩の成果の利用や、時代の要請に応じた国民経済と管理の再編成においてしかるべき粘り強さが発揮されなかったところにある。それに加えて、中央でも地方でも多くの指導者が時代遅れになった方法で行動し続けてきた。規律と秩序が許しがたいほど弱まり、要求と責任が低下し、計画課題を修正する、すなわち引き下げるという間違った慣行が広まった。

こういう事態を批判的に評価して、党は必要な措置をとった。これらの措置はわれわれの前進に一定の刺激を与えた。その結果、一九八三年以降、国民経済に一定の前向きの変化が生じ、これが一九八一―八五年度の5カ年計画の遂行状況を若干改善した。この期間に国民所得は17%、工業生産は20%の伸びを示した。

困難にもかかわらず党は国民の福祉増進計画の実現に最大限の努力を払ったことを強調しなければならない。5年間に賃金が引き上げられ、社会的消費基金が増額された。ソ連ではこの基金によって無料の医療サービス、あらゆる種類の教育、社会保障等々がまかなわれている。

一九八一―八五年に少なからぬ成果があがったとはいえ、5カ年計画の課題の水準に完全に到達することはできなかった。国は計画されていた多くの生産物を入手できなかったし、農業に投入された資源もしかるべき効果をもたらさなかった。欠陥を正すためには根本的な改革、奥深い再編成が必要であった。

これらすべてを見込んだ提案が、本大会に提出された党の文書の草案に含まれている。これは二〇〇〇年までの時期にわたるものである。15年先の目標を設定したのは、何よりもまず、わが国が直面する課題の規模と複雑さが大きくなって、その解決が一回や二回の5カ年計画の枠をはみ出るものとなっているからである。

15年間に国民所得と工業生産を倍増させることになっている。その結果、ソビエト政権樹立以来これまでの全期間に蓄積されたものとほぼ等しい経済力が創出される。しかし変化するのは量的側面だけではない。国民経済の効率、われわれの前進テンポの向上で、新しい水準に到達しなければならない。

そこで第一に国民所得の伸び率の上昇（前次5カ年計画の年間3・1%から年間5%へ）、第二にもっと調和のとれた生産構造の形成、第三に、これが肝心かなめの点なのだが、もっぱら生産の全面的集約化にもとづく成長率の引き上げが予定されている。

社会主義の根本問題の解決の主要方向は、究極的には社会的労働生産性の上昇である。世界の最高水準に進出するという綱領的課題の解決での決定的一歩が、今後15年間に踏み出される。二〇〇〇年までに国民経済全体の労働生産性を2・5倍に高める予定である。

物的資源の需要の充足に対するアプローチも、これまでとは違ったものになる。従来はそれが主として資源増産によってカバーされていたのに対して、今では燃料、エネルギー、原料の需要増加分の75―80%をその節約でカバーするという課題が提起されている。

科学技術革命の成果にもとづいて国民経済の技術的再建を実施するという、真に歴史的な意義をもつ課題が提起されている。

ソ連共産党が長期的な見通しとして打ち出している経済発展の主要な目標と課題は以上のようなものである。

ソ連共産党の長期経済戦略の実際的な実現の最初のきわめて責任ある段階となる5カ年間（一九八六―一九九〇年）の問題について言えば、この期間中に国民所得の増加分は1・6倍になる。その結果一九九〇年には国民所得は六一四〇億ルーブルに、工業生産高は一兆ルーブルに達する。

今後5年間に社会的労働生産性は、終了した5カ年計画期の16・5%に対し、20―23%上昇する。燃料、原料、資材の需要の伸びの60―65%が節約によって確保される。こうして、一九九〇年には経済の規模が一九八五年の2倍となる。

今後5年間にソ連人の物質的生活水準を決定する消費基金の絶対額が大幅に増やされることになっている。消費基金の伸びはこの5年間で前次5カ年計画中の五五〇億ルーブルに対し七四〇億ルーブルとなる。

ソ連では科学技術発展の問題が絶えず重視されてきた。歴史的に短い期間に強大な科学力が創設され、国の発展の各段階において大きな国民経済上および防衛上の課題を成功のうちに解決

することを可能にした。しかし、重要な科学研究の成果や先進的な構想を持ちながら、われわれが先端技術の実用化やわが国で生まれたものの実用化においてさえ立ち後れていることは秘密ではない。こうした状況は、各省が技術政策で誤算をおかし、ときとして明日をのぞき見ようとしなかったためとしか言いようがない。

一九八五年のソ連共産党中央委4月総会と6月のソ連共産党中央委員会における会議では、科学技術進歩の途上の障害を断固排除し、そのすべての方向における抜本的、革命的変化を確保するという問題が提起された。

科学技術進歩の重要な方向の一つは、先端技術の広範な実用化である。今後5年間に先端技術の導入を1・5―2倍に増やすことが見込まれている。

もう一つの方向は生産の自動化と機械化である。5年間に国民経済の自動化水準は平均して2倍に高まる。とくにこの期間中に産業ロボットの保有台数は3倍に増える。

科学技術の達成が究極的には社会的矛盾の激化をもたらしている資本主義とは異なり、社会主義国家ではこれは社会発展の強力な変革力である。ここでは社会主義に歴史的優位性があり、それを完全に利用しなければならない。

科学技術の発展は科学的な思想や達成の絶え間のない補充を求めている。

科学技術の進歩の加速に向けられた投資政策についていえば、スタートした5カ年計画における年間の基本投資額は大幅に増やされ（前次5カ年計画の一二五〇億ルーブルに対して平均一七〇〇億ルーブル）、5年間の総額は約一兆ルーブルに達する。5カ年計画の重要な特徴となっているのは、機械工業への基本投資の大幅な増大（1・8倍）である。このことによってわれわれは、科学技術進歩の加速のための確実な物質的基盤を築くであろう。

基幹部門の中で投資の観点からとくに重視されるのは、燃料・エネルギー・コンプレクスである。農工コンプレクスには基本投資総額の$\frac{2}{3}$が向けられる。

投資構造の観点から見てスタートした5カ年計画の特徴となっているのは、既存の生産設備の更新の重視である。この目的に向けられる基本投資のシェアは、一九八五年に37%だったのに対し、一九九〇年には50%にまで高められる。

建設部門には解決を要する問題が特に山積している。何よりもまず、資金の分散をなくす必要がある。国内では現在、三〇万以上の大小施設が建設されており、これは大規模なソ連経済にとってすら許しがたいほど多い。分散は必然的に施設の操業開始期限の延長につながっている。

構造政策について言うなら、機械工業において最も大幅な進展が期待されている。機械工業製品の刷新は毎年行われ、一九八五年の4・5%に対し、一九九〇年には13%となる。

燃料エネルギー・バランスの構造も大きく変わる。早くも今次5カ年計画終了時には、原子力発電所の電力生産高は倍増し、エネルギー・バランスに占める原発のシェアは20%に増える。

国の燃料エネルギー資源に占める天然ガスのシェアは38%に上がる。採油業、特に西シベリアのそれは大幅な改善を要する。石炭産業について言うなら、何よりもまずソ連東部地域での露天掘りによる採炭を増やさなければならない。ドネック（ウクライナ）とクズネック（シベリア）をはじめとする古くからの炭田の坑内掘りの炭鉱の設備更新と改修も続行される。

一九八六―九〇年には、農工コンプレクスの諸部門の協同行動がさらに緊密で調整されたものとなる。これは成果をあげるはずだ。今次5カ年計画終了時の穀物の生産高は二億五〇〇〇万―二億五五〇〇万t、食肉の生産高は二一〇〇万tとなる予定。食糧計画実施のその他の方面でも高い課題が設定されている。

われわれの計画では一般消費向け工業製品の生産課題にも大きな関心が払われている。軽工業、地方工業、サービス分野、商業を技術進歩の最先端のレベルに引き上げ、これらの部門の発展を加速するという課題が設定されている。たとえば非食料消費物資の生産高は5年間で1・3倍増となる。これは国の工業総生産高の伸びよりテンポが速い。

国の経済力の増強には各連邦構成共和国が大きく貢献する。たとえばソ連経済・社会発展の基本方向案は、エネルギー立地型産業をシベリアをはじめとする燃料エネルギー基地に近づける

こと、中央アジア諸共和国など労働力資源が最も豊富な地域に雇用口を増やすことを見込んでいる。

最近まで管理の改善の必要性は多くの点で軽視されてきた。旧来のもっぱらお役所的な方法への固執が勝つことがしばしばだった。思考の停滞が必然的に事業の停滞を生んでいた。

党は必要な結論を出した。近年中にわれわれは、一貫した管理システムの創設にねばり強く取り組み、経済運営メカニズムの諸要素を徹底的に改善し、計画化と奨励、生産の組織の効果的な形態・方法を見つけなければならない。

5カ年計画の重要課題の一つは、すべての経済部門を新しい管理方法に移行させることである。現在（実験的に）新方式で活動している企業は、工業生産高の半分を生産している企業であるのに対し、一九八七年からはすでに国の工業全体と運輸部門全体が新方式に移行する。

独立採算制の原則は、労働報酬を労働の結果に直接に結びつけること、あるところの経営のまずさを別のところの高い指標でカバーするのを許さないこと、労働集団に対することこまかな監督をやめることなどだが、こうした原則がソ連の企業の活動のルールとならなければならない。国は、新規に課題が定式化されつつある部門担当省に多くを期待している。これらの省はそれぞれの部門で科学技術進歩を実現する本部とならなければならない。

対外経済交流については、諸国間の経済・科学技術交流を積極的に発展させ、国際分業に諸国が参加する必要がある。

ソ連の対外経済交流の基盤はコメコン加盟諸国との協力であるが、ソ連は先進資本主義諸国とも協力をめざしている。

われわれはここに少なからぬ可能性があると見ている。それは、貿易、科学技術、金融など事実上あらゆる分野の交流について言えることだ。しかし、協力が相互の事業であることは周知の事実だ。ここでは相互の利益を厳密に考慮し、米国が実施しているありとあらゆる制限、ボイコット、禁輪を完全にやめる必要がある。現代世界での経済関係は、同権、信頼、相互取り決めの厳守にもとづいて初めて構築することができる。貿易・経済関係を醜い政治的計算に従属させてこれに反する行動をとることは、世界の進歩を抑制する試みに等しい。歴史的経験はそのような試みが絶対に成就しないことを示している。

始まった5カ年計画期の社会発展と国民福祉の向上の問題では、予定されている経済とその効率の伸びが、ソ連国民の生活水準を質的に新しい段階に引き上げるというソ連共産党の綱領的目標の実現で大きく前進するための強固な基盤を作り出しつつある。

労働の条件、性格、内容の面で重大な変革が見込まれている。始まった5カ年計画では手労働や未熟練労働の削減のテンポが少なくとも2―3倍に伸びるだろう。生産の設備更新や技術更新も労働条件の改善をめざすものだ。

労働報酬の有効性を引き上げるという絶大な重要性をもつ課題が解決されるだろう。事実上一つの5カ年計画期間中に、物的生産部門で新しい等級賃金・職務給への移行が実施され、平均25―30%引き上げられる予定だ。教師、医師、中級医療専門家、文化・啓発施設や高等教育機関の働き手など非生産部門の働き手の労働報酬も引き上げられる。

ソ連では子どもの生活・勉学条件の改善に対してつねに特別の注意が払われてきた。向こう5年間に、子どものいる世帯への国家援助が拡大され、新たな発展を見るであろう。とりわけ、1年間の育児有給休暇がさらに半年間延長され、3歳未満の子どもに対してはすべての薬が無料で与えられるようになる。就学前児童施設の収容人数の問題は向こう数年間のうちに解決されるだろう。

党がたえず配慮しているのが住宅問題だ。すでに少なからぬ成果があがっているが、この問題の深刻さはまだ解消されていない。5年間で総面積五億六五〇〇万―五億七〇〇〇万平方mの新しい住宅が建設される予定になっている。

国が提起した諸課題はソ連国民の根本的利益に合致しており、これを達成することはソビエト国家の力を一層強め、世界での社会主義と平和の地歩を固めることになる。

（この報告の全文は本号付録参照）

新原子力砕氷船ロシア号の就航

本誌記者 ユーリー・シニトニコフ

カメラ V・ボロニン
V・チスチャコフ

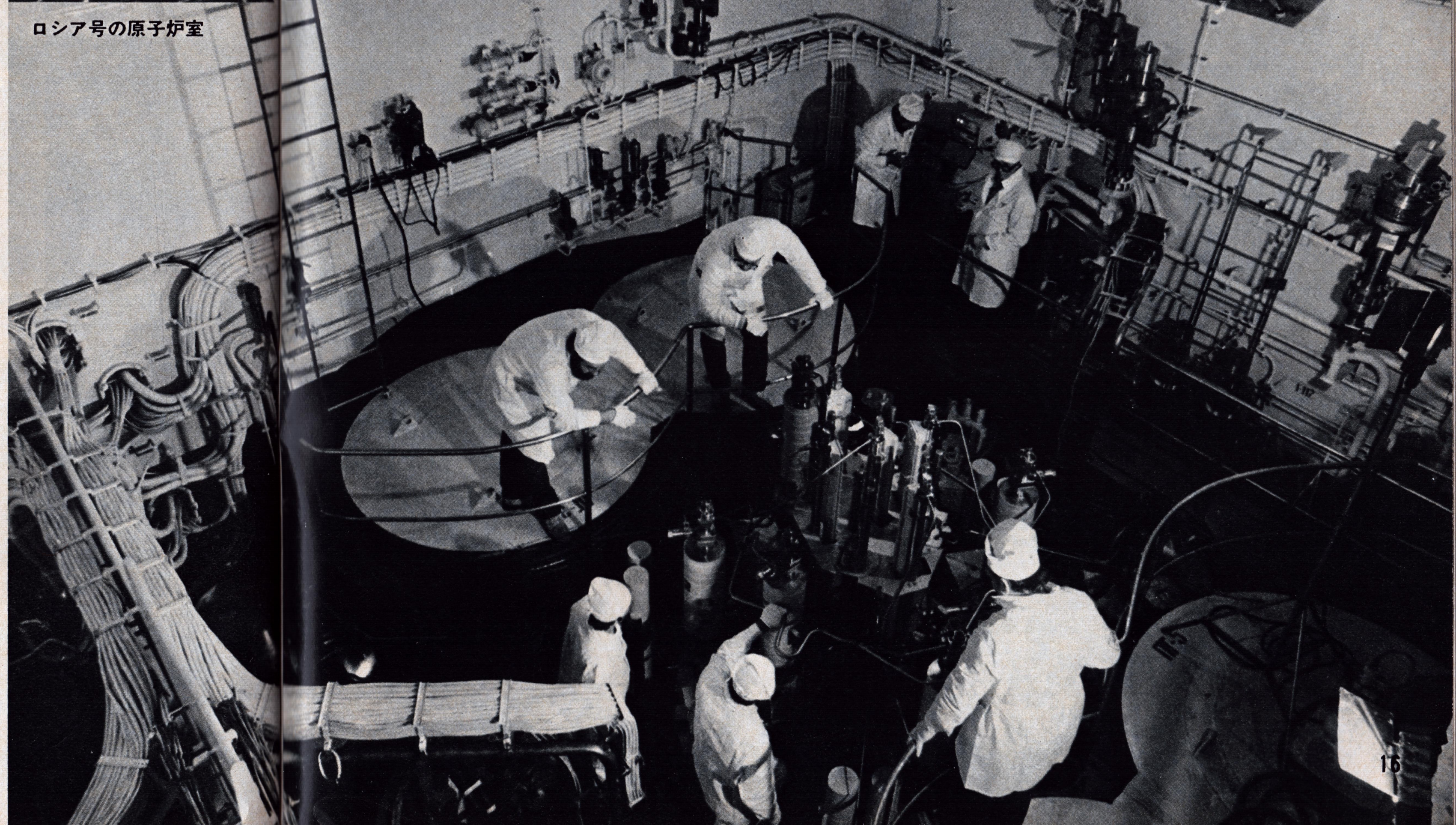


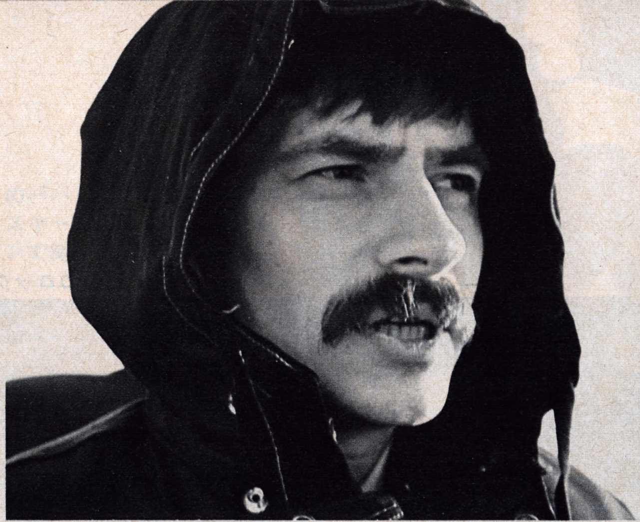
今年の１月、試験航行のためカラ海に出た原子力砕氷船ロシア号。どんな氷でも割れることを証明した。



ロシア号に搭載されているヘリコプターKA32C

ロシア号の原子炉室





3等航海士D・ポルーヒン

下右　原子炉は放射線量測定技師によって常時監視されている。

下右　ロシア号の中央制御室







船内の放射線量を監視するアントモシキン技師（手前）とワシリエフ医師

本誌4号の写真ニュースですでに紹介したように、昨年末、新鋭の原子力砕氷船ロシア号がレニングラードのバルト造船所で進水した。ロシア号はすでにあらゆるテストをすませ、北極海航路で船団の先導に就役している。この新原子力砕氷船について、もう少し詳しく紹介しよう。

初めこの船の船体は、北極海のぬし——シロクマの絵で飾られていた。やがて船首部に原子力のいかめしいシンボルマーク——黒い原子核とそれを取りまく電子の楕円軌道が描かれた。そしてしめくくりはソ連国旗だった。一九八五年12月中旬、新原子力砕氷船ロ



スポーツ・ホールも完備している。



船内のロック・バンドはファンが多い。

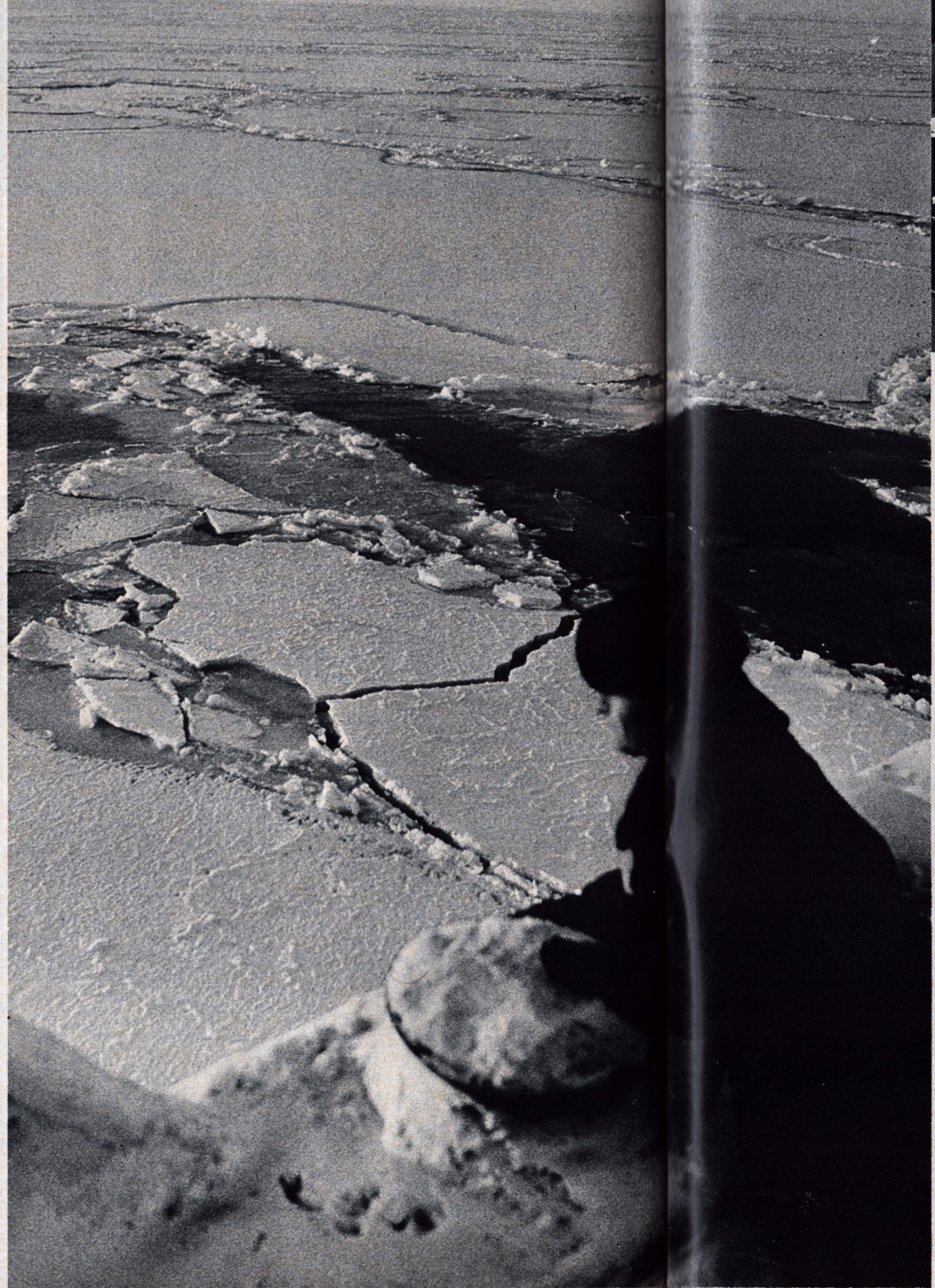
シア号はソ連北極海船団に加えられた。輸送量がそれほど大きくない航空運輸を除けば、原子力砕氷船は極北の厳しい条件のもとで輸送を可能にする唯一の力である。原子力砕氷船は北極海の氷を割って、北極圏内の都市や新しく建設される企業、あるいはシベリアの天然資源開発のための物資を積んだ船団を先導する。

ロシア号を建造したのは一つの造船所だが、さまざまな段階でのそのさまざまな部分の設計や製造には一〇〇以上の研究所や設計機関、約三五〇の工業企業が参加した。

原子力を厳しい条件のもとでの航海に使うという発想そのものが、アイデアと計算と技術のこのように大規模な協力を必要としたのである。北極海で安心して働くために必要な航続距離とパワーを可能にするのは原子力しかない。

ロシア号は全長一五二m、排水量二万三五〇〇トン、喫水11・4m、出力七万五〇〇〇馬力、補給なしに1年以上航行できる。建造関係者は造船の分野における最新の成果を最大限取り入れるよう努力した。

ロシア号は第2世代の原子力砕氷船ブレジネフ号（元アルクチカ号）、シベリア号と姉妹船で、したがって共通するところも多い。だが、多くのちがいもある。ロシア号はこれまでの砕氷船に見られない一連の設備を持っている。



見渡すかぎりの氷の世界



コックのバベヒン（左）とザカルジェフスキーはムルマンスクのレストランで働いた経験がある。



アナトリー・ラメホフ船長は社会主義労働英雄でもある。

ロシア号のアナトリー・ラメホフ船長は、シベリア号と比べてロシア号の設備が一〇〇〇点以上も改良されていることを指摘する。機関部の余力と信頼性が向上した。設計者たちは機関の扱いを簡単にした。これは修理や点検のさいの効率を考えれば大事なことである。

最新の電波航法システムは氷状についての完全な情報をもたらすだけでなく、それぞれの水域でそれぞれの時点に最も好ましい航行をするための現実的な方法を示してくれる。最新装置によって通信衛星のサービスをフルに活用できる。ロシア号に搭載されているヘリコプターＫＡ32は、気象条件が悪いときでも飛べる。このヘリコプターは特殊な航法計器と強力な照明手段を備えており、真っ暗闇の中で飛びながら氷の割れ目を探すことができる。ま

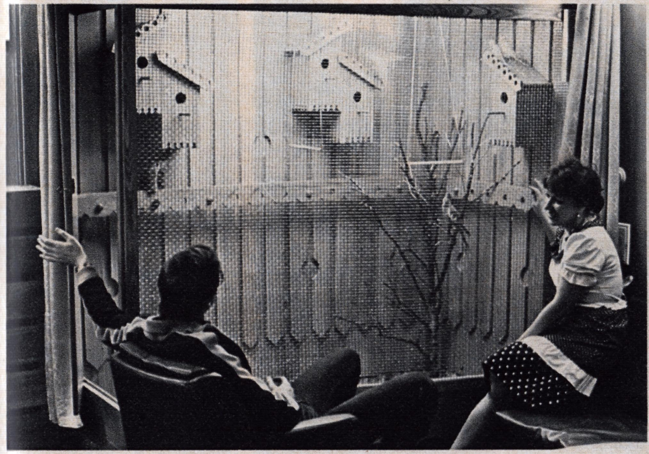


船内のプール

船上でいちばん最初に誕生日を迎え、仲間に祝福されるアレクセイ・シューキン技師（ひげの人）



船内で聞く小鳥の声はまた格別。



さに船の"触角"である。

設計と建造にあたっては乗組員（一五〇人以上）の生活条件の改善にも真剣に配慮された。船室は一五五あり、その多くは揺れや衝撃を打ち消す装置を備えている。長い航海に欠かせないビタミン源——ウイキョウ、ネギ、パセリ、レタス、ラディッシュなどをつねに絶やすことなく栽培するための温室もある。北極海では緑の香りを嗅ぐだけでも大感激なのに、天然のビタミン"添加剤"が毎日の食卓をにぎわすのだ。

ロシア号にはまた、すばらしいレクリエーション施設も備わっている。さまざまな器具がそろったスポーツ・ホール、プール、サウナ、休憩室がそれである。ロシア号の一二八四の部屋のうちには音楽サロン、チェス・ルーム、映写室、写真用暗室、日用品修理所、医務室、勉強部屋（多くの船員が航海中、通信制教育で高等教育あるいは中等教育を受ける）もある。

ソ連砕氷船としては初めて、船体に氷が付着するのを防ぐために熱い空気を吹き出すシステムが取りつけられた。

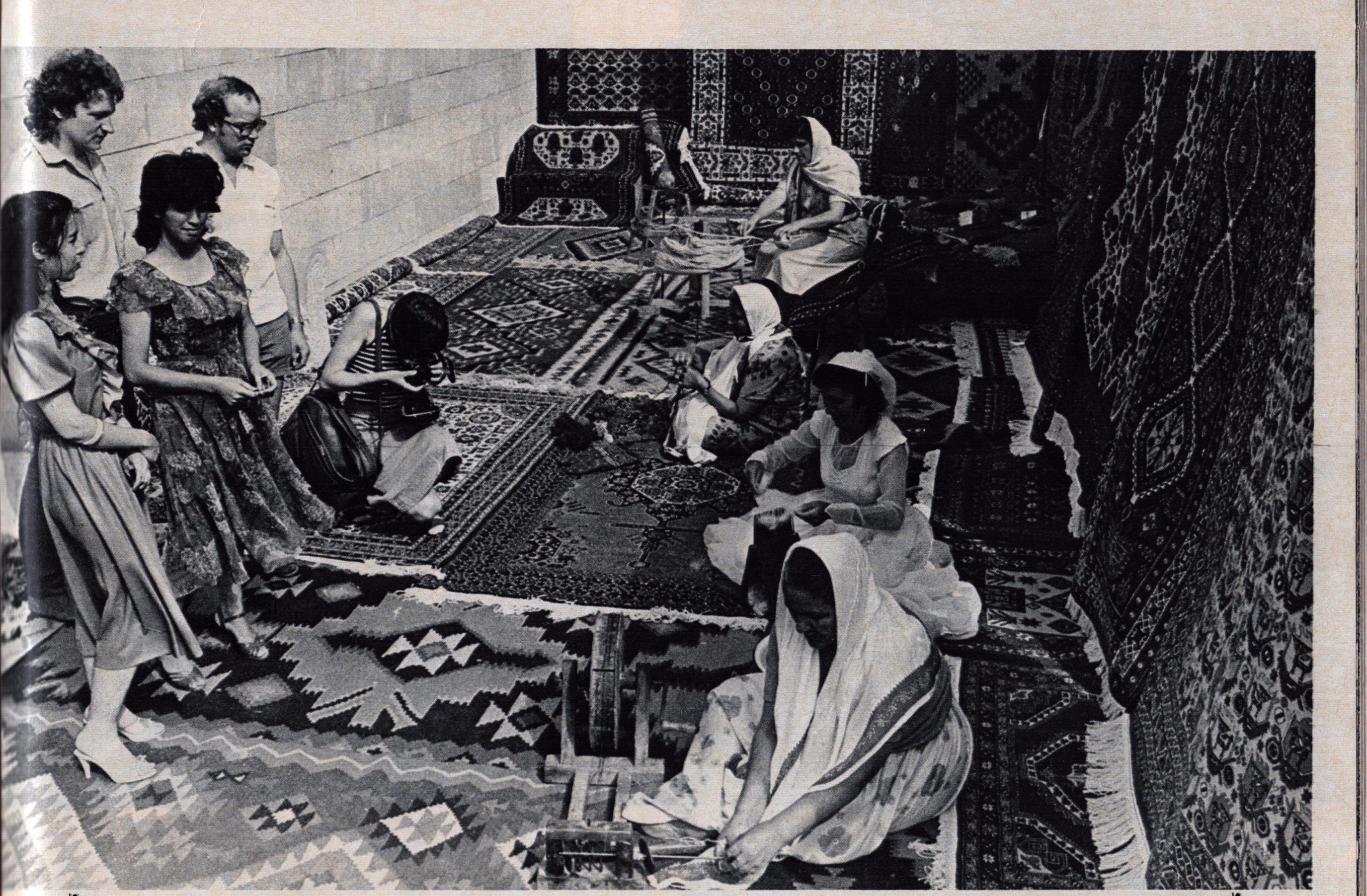
現代技術の粋を集めた大型外洋船はしばしば、その国の科学技術力を示す"名刺"にたとえられる。舷側に書き込まれたロシア号の船名はまさに、高度の科学技術力を持つわが国の名刺にふさわしい。

食堂は一流レストラン並み。





航跡を残しながら氷海を進むロシア号



アゼル バイジャンのじゅうたん

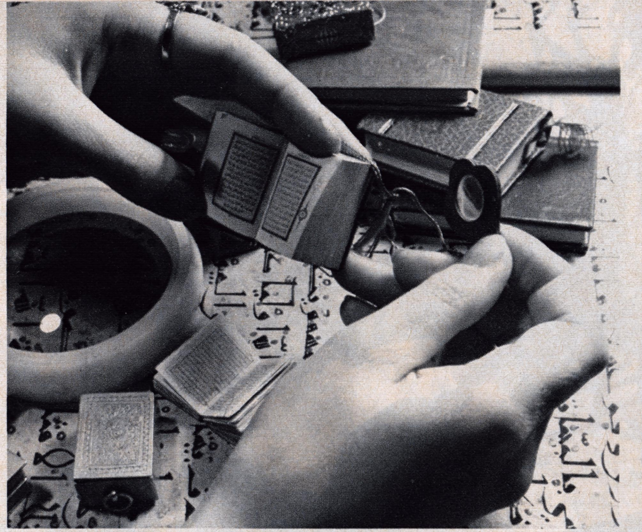
ザカフカズのアゼルバイジャン共和国の首都バクーでは、昔の城跡でよく民族工芸祭が開催され、名人たちがじゅうたん織りの伝統技術を市民や観光客に実演して見せる。

共和国の面積はそれほど広くないが、じゅうたんは産地ごとに独自のデザインをもち、バラエティーに富んでいる。ある地域では図案化された動物や人、多角形や星型などこみいった幾何学模様が特徴だし、他の地域では花柄や唐草模様が主流といった具合。今は機械織りのじゅうたんの方が生産量は多いが、質の面からいえば手織りにかなうものはない。

10回目のスカラ座出演

ソ連の有名なバス歌手エブゲニー・ネステレンコは昨年、モーツァルトのオペラ『魔笛』のザラストロのパートで、イタリア・ミラノのスカラ座に10度目の出演をした（写真右）。イタリアの各新聞はネステレンコの舞台を高く評価し、絶賛の言葉を贈った――「彼の声はまるで純青銅製の彫像のように彫りが深く、荘重である」（レプブリカ紙）、「世界最高のバス歌手は、本当にその呼び名にふさわしいことを示した」（コリエール・デラ・セラ紙）。







カザフ国立図書館の古写本

カザフ共和国の首都アルマアタにあるプーシキン記念カザフ共和国国立図書館は世界33カ国の75の学術機関と図書交換を行っている。図書館の東方文献部には七〇〇点余りの写本が収集されており、その中には中央アジア初期のコーラン（イスラム教の聖典）の一つである13世紀のコーランもある。図書館全体の蔵書数は四〇〇万冊を超える。上右の写真は東方文献部の古い写本を調べるアバイ記念カザフ教育大学の研修員カリヤ・ネシクバエワ（右）と同大学歴史学部大学院生ムラート・シェレケノフ。上左の写真は東方文献部に保管されている豆本。ルーペがないと読めない。

文化トピックス

クラスノヤルスクの新コンサートホール



東シベリアの大都市クラスノヤルスク（人口約87万）に、このほど写真のようなコンサートホールが完成し、オープンした。ホールは1800人収容。設計はロシア連邦共和国功労建築家のA・S・デミルハノフ。



きょうも浮世絵の研究に没頭するベアタ・ウォロノワ

浮世絵の謎に取り組む女性（下）

本誌記者 フェリクス・プラテ　カメラ V・アルチュノフ

前号で国立プーシキン美術館の先任学芸員をしているベアタ・ウォロノワ（芸術学博士候補）を紹介した。この号ではウォロノワが保存員となっている同美術館の浮世絵コレクションについて、またコレクション創始者の海軍士官セルゲイ・キタエフに関するウォロノワの話を紹介しよう。

モスクワの国立プーシキン美術館の日本美術コレクションは、ソ連にある18—19世紀の日本版画のコレクションとしては最も初期の作品が入っており、最も完全なコレクションの一つといってもいい。その数は、掛け物や絵巻物、版画、画布、絵本、読本など二〇〇〇点以上を数える。

一九五〇年にプーシキン美術館で働きだしたベアタ・ウォロノワはここのコレクションの主要部分が19世紀末セルゲイ・キタエフによって集められたものであることを知っていた。キタエフはロシアで最初の日本美術品のコレクターの一人であり、日本美術に精通していた。キタエフの申し出によって一九一六年にコレクションがモスクワのいわゆるルミャンツェフ美術館（書籍、写本、古銭、民族学その他の個人コレクションを基に作られた）に寄贈されたことも、ルミャンツェフ美術館が一九二四年に改組され（所蔵品はジャンル別にそれぞれの博物館、美術館に分散）、キタエフ・コレクションは以来ずっと国立プーシキン美術館の所有物になっていることも分かっていた。

キタエフを求めて

コレクターのセルゲイ・キタエフについてウォロノワは次のように語っている——「美術館に入って記録する仕事を始めてすぐに私はキタエフについてのデータを探しました。どんな人物だったのか、どうして日本美術に興味をもったのか、またどうやって版画を集めたのか、を知りたかったのです。

なぜ、なぜと疑問ばかりでデータはほとんどありませんでした。キタエフの生涯についてもほとんど知られていませんでした。私は古文書保管所や図書館で書類を引っかきまわし、当時の新聞雑誌、美術家の回想録を調べました。キタエフを知っていたに違いない、あるいはその頃のことを何かおぼえているはずの人たちと手紙のやりとりまでしました。

ところがずっと何年も探していたものを、思いがけずレニングラードで、国立海軍中央古文書保管所で探しあてたのです。薄っぺらな紙ばさみ第一七七七号がそれでした。そこには一九〇六年1月27日作成の「海軍兵学校本部付き中佐セルゲイ・ニコラエビチ・キタエフの官歴」が保存されていました。

この「……官歴」に書かれているデータにその後私は、モスクワ、レニングラードの種々の古文書や今世紀初期の定期刊行物から得たデータをつけ加えました。中でも重要だったのは博物館の古記録の中から見つけた、キタエフが友人の美術研究家で線画家として有名なパーベル・パブリノフと交わした私信でした。どれもこれも断片的で、数も少なかったけれど、プーシキン美術館の極東美術のコレクション史にとってだけでなく、ロシアにおける日本の美術品の収集と研究の初期の段階全体にとって興味あるデータでした……」

海軍士官とコレクション

「……官歴」によると、セルゲイ・キタエフはリャザン県（モスクワから南東二〇〇kmにある現在のリャザン州）の名誉市民（革命前のロシアの特権身分）の家庭に、一八六四年6月10日に生まれ、14歳でペテルブルグ（現在のレニングラード）の海軍兵学校に入り、一八八四年には次席で卒業、学校の壁に彼の名前が金文字で彫りこまれた。この年の10月16日、キタエフは第4艦隊に編入され、一八八五年6月11日、フリゲート艦ウラジーミル・モノマフ号での外国航海を命ぜられた。キタエフは10年以上もの間いろいろな艦船で太平洋を航海していたことが知られている。

勇敢な士官は順調に昇進し、六つの勲章をもらい、一九〇九年3月には〝その勲功によって〟大佐に昇進した。その後キタエフはペテルブルグの海軍兵学校本部に派遣され、病をえて退任するまで（一九一二年頃）そこで職務を遂行した。

セルゲイ・キタエフの個人的生活については、第一階級の商人の娘アンナ・ザミャーチナをめとり、一八九七年に男子インノケンチーをもうけたことだけが知られている。

キタエフの一九〇三年来の友人、P・パブリノフの思い出から判断すると、キタエフは教養豊かなかなりの金持ちで、若い時から美術に関心を示し、デッサンをやり、水彩画を描き、多くの画家と知り合いだったらしい。

セルゲイ・キタエフが日本美術に心をひかれだすのは日本沿岸を航海したまだ若き現役時代である。日本の絵画や版画は船が日本の港に停泊している間に手に入れたものだ。キタエフの依頼を受けて日本人の代理人たちが日本中を縦横に歩きまわり、東京、横浜、大阪、神戸、下関、長崎、函館、日光、名古屋、鹿児島、それに大津、宮の下、稲佐、熱海などで版画や絵を買い集めた。

多くの作品をキタエフは表具師の仲介で買った。これらの表具師は高度の技術を持った職人で、キタエフが書いているように、「美術を理解し、画家を知って」いた。

こういう仲介人の一人に長崎に住む荒木なにがしがいた。「これは教養のある、この上ない好人物で、私の所にちょくちょく顔を出し、われわれ二人とも北斎や円山応挙、谷文晁その他の画家にほれ込んでしまった」——セルゲイ・キタエフはこう書いている。

（これと以下の引用はベアタ・ウォロノワが現在プーシキン美術館に保管されているキタエフのパブリノフあての手紙から抜粋したもの）。

キタエフが入手した美術品の中にはいたんでいる物もあった。こういう場合もキタエフは日本で修理に出し、へりをつけたり、厚紙に張ったりの化粧直しをさせ、湿気から守るために密閉できる金属製の箱に入れて船の中に保管した。残念なことに化粧直しの時、多くの本からテキスト部分が削除され、イラストだけが残されているが、これは学術的、芸術的価値を著しく低下させたとウォロノワは考えている。

キタエフは仲買人だけでなく画家やその親類から直接作品を買うこともあった。大津に行って岸駒の子孫に会ったし、北斎への特別な思いを抱いて北斎の生地を訪れ、北斎の墓地と墓碑のある水彩画を描いたりしている。

キタエフのコレクションはだんだん有名になった。美術の愛好家やコレクターがコレクションを見に船を訪れた。

「私の3人の友人——イタリアのキオソーネ、フランスのビゴー、ギベールのほかにも古い作品を愛でるため日本の美術研究家たちも私の所に来た。有名な歌舞伎役者団十郎（いろいろな版画家のモデルになっている）——金持ちで、いいコレクションの持ち主——も来たが、私にとって最も感銘深かったのは美術評論家で東京美術学校長の岡倉天心が訪ねて来たことだ……われわれはいろんなことを話し、私は彼の意見をじっくり聞いた。岡倉を東京美術学校長に任命したのは天皇自身だし、日本の美術や東洋文化の研究、紹介につとめ、中国にも旅行した人物である」——とキタエフは書いている。岡倉天心がロシア人のコレクターを訪ねたこと自体が当時のキタエフ・コレクションの価値を雄弁に語っている。キ



安藤広重（1797—1858）『東海道五十三次・沼津黄昏図』

歌川国貞（1786—1864）『鮑取り』



キタエフ・コレクションから



安藤広重（1797—1858）『雪中葭に鴨』



葛飾北斎（1760—1849）『諸国滝廻り・下野黒髪山霧降滝』



喜多川歌麿（1753—1806）『当時全盛美人揃・玉屋内花紫』



歌川国芳（1797—1861）（3枚続きの錦絵の一部）

タエフが記しているように、多くの作品を岡倉は「大変ほめ、称賛した」。

セルゲイ・キタエフは自分のコレクションの整理に取りかかり、日本の美術全体をまじめに研究した。この問題に関する最新の文献に目を通し、のちには露日協会、仏日協会の会員にもなった。

キタエフにとってコレクションを集めることは、決して気まぐれや儲けのためではなかった。彼はロシアの文化人であり、文化人にとって美術品の発見と収集は社会的な責務だと考えられていた。彼はコレクションをロシアのために集めたのだった。「私自身がコレクションにほれ込んでおり、それをすぐ売ることに関心を持っていない。私にはただ、コレクションが真の芸術を理解する人々がそこから大なる満足を汲み取るほど十分な財産になっていないことが残念だ」とキタエフは書いている。

一八九八年の初頭、キタエフはロシアの有名な文化・社会活動家で、先に述べたルミャンツェフ美術館の館長でもあり、のちにモスクワに美術館(現在のプーシキン美術館の前身)を創設しその初代館長を務めたイワン・ツベタエフに手紙を書き、次のように述べている――「……日本コレクションのことを思い出していただきたい。それは美術館の役に立たないでしょうか? ご承知のように、日本美術は当時ヨーロッパの美術に影響を与え、ヨーロッパ諸国の首都は日本の美術品を時機を逸せずに手に入れようと苦労しました。私のコレクションは相変わらずモスクワでブリキの箱の中に眠っています(歴史博物館で展示したあとなので)。私はそれを外国へ運び出したくありません。私はそれをロシアのためにどうしても守ります」

一九一六年、キタエフは家族とともに外国へ療養に出発するにあたって、コレクションをルミャンツェフ美術館に委ねた。一九二四年、コレクションはこの美術館のすべての版画コレクションと一緒にプーシキン美術館に移った。

セルゲイ・キタエフの消息は一九一六年に絶える。パーベル・パブリノフは彼のことについてそれ以上耳にすることはなかった。第1次世界大戦が荒れ狂っていた。52歳だったキタエフがかなり重い病気にかかっており、療養のために戦乱のロシアを去ったことは分かっているが、どこへ行ったのかは分からない。あるいは、なつかしい日本へ行ったのかもしれない。ベアタ・ウォロノワはその可能性を否定しない。

ロシアに日本美術を初めて持ち込んだこの非凡なロシア人が、人生の最後の日をどこで、どのように終えたのか、もちろん正確に知りたいものだ。キタエフがもし晩年を日本で過ごしたのなら、あるいは本誌の読者の中に、その様子を明らかにしてくれる人がおられるかもしれない。ベアタ・ウォロノワも本誌編集部も、そのことを期待してやまない。

最初の日本美術展覧会

真の収集家の名に値したキタエフは、収集した浮世絵を自国の人にぜひ見せたいと思い、当時所蔵していた自分のコレクションの展覧会を一八九六年まずペテルブルグで、さらに翌年モスクワでも開いた。モスクワでは日本芸術に関する公開の講演会もやった。この展覧会は事実上ロシアで最初の日本芸術の展覧会であり、大成功を収めた。当時多くの新聞、雑誌にこの展覧会と日本芸術に関する紹介記事と論評が載った。これらの記事はロシアにおける日本芸術研究の最初の道標とも言うべきものであった。もっともそのころ欧州では日本の芸術はすでにかなりよく知られていた。

キタエフ自身はその当時のことをこう書いている――「……日本の封建制度の崩壊に伴って最も教養のある階級――武士が落ちぶれ、先祖代々たくわえてきた美術品の一部は持ち主の意思で、また一部は貧しさのため止むをえず売りに出された。その機会を逃さずにこれらの美術品を買い込んだのは、あらゆる分野の学問と欧州美術を教えるために(明治)政府に招へいされた目利くヨーロッパ人たち、主に教養の高い人々だった。彼らは一八〇〇年代から名品を収集し始め、欧米に帰ると余暇にそのコレクションを研究するとともに、自国の人々に紹介した」

ロシア人も欧州人とほぼ同時に日本の芸術を発見したが、ロシアで日本の芸術が広くもてはやされるようになったのは欧州よりも遅く、一八九〇年代末であった。日本の芸術の美学は欧州の目から見てすこぶる思い切った意表をついたもので、それは高く評価され、やがてその芸術は創造的認識と学術的研究の対象になった。その時期からキタエフの展覧会に関するかなり大きな反響記事のほかに、日本の芸術についての概括的な最初のロシア語の論文(翻訳でない)がぽつぽつ現れはじめた。そして書いたのは画家であり、芸術史の学者であったイーゴリ・グラバリであった。論文「衰微と再生。芸術における現代の潮流」のなかで、彼は現代の美術スタイルの形成に対する日本芸術の影響について書いた。グラバリはまた日本の色刷り木版画展(一九〇三年)の目録のはしがきや「芸術の世界」誌の大論文(一九〇二年、後日単行本になった)も書いている。

日露戦争後さらに幾つかの日本芸術展が開かれた。たとえば一九〇五年には「版画展」、一九〇六年にはN・コロバシキンのコレクションのなかの「中国と日本の工芸品、祭具、家庭用品の展覧会」が開かれた。

しかし一九一〇年以後日本に対するロシア人の関心は薄れてゆき、代わって米国で日本の芸術に対する関心が高まった。日本の芸術への興味の波は全世界を一巡し、最後に米国にまで行きついたが、米国の収集家たちの収集規模は大がかりで、比較的短い期間に米国では、世界最大のコレクションが集められ、キタエフの収集品を上回った。しかしキタエフのコレクションは日本本国で直接入手されたものであり、従って珍品や未公開の作品が多く、初期の収集品の一つとして今なお注目されている。

キタエフ・コレクションの評価

収集の幅の広さは、収集家たちからよく欠点の一つとして見られがちである。キタエフは収集に万全を尽くした。日本の芸術作品のロシア最初の収集家である彼の目的は、もっともなものだったし、正しかった。彼はロシアに全然知られていなかった芸術を紹介しようと努めたのであり、日本の絵のオリジナルと浮世絵だけでなく、複写刷り石版画それに複製でさえも、その紹介に役立つことができた。ウォロノワの意見によると、雑多なものが集められたため、当然コレクションは玉石混交となり、その芸術的水準は低下した。

またそのころ収集家たちに知られておらず、入手もできなかったすべての初期の日本芸術に、キタエフが関心を持たなかったことも、彼のコレクションの欠点である。

コレクションのなかの逸品は、18世紀の九〇年代から19世紀中ごろまでの浮世絵師の作品、アルバム、本である。

当時の日本の絵師の芸術は、キタエフにとっては生きた身近なものであった。彼には好みの絵師がいた。「私が日本の美術をはじめて知ったころ、誰よりも一番北斎に惚れ込んだ……北斎はまったく驚くべき、自然の境地に立った絵師だった」。

北斎の魅力につかれたキタエフは、北斎の署名の入ったものや北斎に近い絵師たちの絵を手当たりしだいに入手しようとした。そのおかげでいま北斎の作品全体の$\frac{1}{4}$近くが美物館に収まっている。

18世紀後半の絵師たち(歌麿とその弟子たち、豊国とその流派の人々、細田派)や広重、国芳、国貞らの19世紀の絵師たちの浮世絵もかなり沢山コレクションの中に入っている。しかし17世紀の浮世絵は全く欠落しており、わずかに奥村政信、祐信、春信らの18世紀の前半と中頃の有名絵師の作品が数枚あるにすぎない。それとともにベアタ・ウォロノワの評価によると、清長、長喜、春章らの珍品も数点ある。

浮世絵のコレクションのなかで最もよくそろっているのは、「摺物」と言われるサイズの小さい絵で、歌麿、豊広、国直、豊国、俊満らのこのジャンルの主だった絵師のほとんど全部の作品がある。しかしこの美術館でとくに多いのは北斎とその弟子たちの摺物である。

セルゲイ・キタエフが始めたコレクションの研究調査は、若干の中断はあったが、コレクションの現在の保存員ベアタ・ウォロノワの手でいまも続けられている(前号参照)。

戦後これらのコレクションの展覧会がプーシキン美術館で2回開催されたし、多くの論文が発表され、浮世絵の目録が作成(近刊予定)された。そのほか若干の浮世絵は他の博物館や施設の展覧会や国内各都市の移動展にも出品された。こうして、祖国のために美術品を収集し、そのコレクションを「すべての人の財産」にすることを夢見たロシアの収集家の一人セルゲイ・キタエフの夢は見事に実現したのである。

催し物のお知らせ

☆国立モスクワ・ボリショイ舞台サーカス公演

北九州市・九州厚生年金会館(4月1日)、熊本県・阿蘇町体育館(4月4日)、出水市文化会館(4月5日)、熊本市体育館(4月6日)、防府市公会堂(4月8日)、萩市民館(4月9日)、徳山市体育館(4月10日)、下関市民会館(4月12日)、岩国市民会館(4月13日)、浜田市民会館(4月15、16日)、広島郵便貯金会館(4月19日)、高知県民体育館(4月22日)、愛媛県民館(4月23日)、徳島市立体育館(4月26、27日)

▽お問い合わせは、㈱中央放送エージェンシー(電話03・572・6331)へ。

☆マイヤ・プリセツカヤとソビエトバレエのスターたち――バレエ・コンサート公演日程

浦和・浦和文化センター(5月26日)、前橋・群馬県民会館(5月27日)、柏崎市民会館(5月29日)、新潟・新潟県民会館(5月30日)、郡山市民会館(6月1日)、宇都宮市文化会館(6月3日)、札幌市・北海道厚生年金会館ホール(6月4日)、名古屋・愛知厚生年金会館ホール(6月6日)、松本市民会館(6月7日)、東京・東京文化会館(6月9、10、11、12日)、横浜・神奈川県民ホール(6月13日)、東京・昭和女子大学(6月15日)、大阪・フェスティバル・ホール(6月16日)、松戸・聖徳学園(6月20日)

▽お問い合わせは、東京労音(電話03・265・6361)へ。

☆エストニア・アンサンブル公演

東京・日野市民会館(4月19日)、北海道・新得公民館(4月20日)、池田町生活文化センター(4月21日)、広尾町公民館(4月22日)、厚岸町福祉文化センター(4月23日)、中標津青少年体育館(4月24日)、摩周観光文化会館(4月25日、ただし予定)

▽お問い合わせは、日ソ親善協会本部(電話03・261・4897)へ。

☆ソビエト名作映画鑑賞会

「恋するものたち」――4月1日

▽会場:東京大手町・日経小ホール/開映:午後6時30分/入場料:800円

▽お問い合わせは、㈱日本海(電話03・262・4131)へ。

ソ連共産党第27回大会代議員

イリザロフ博士の“奇跡の手術”

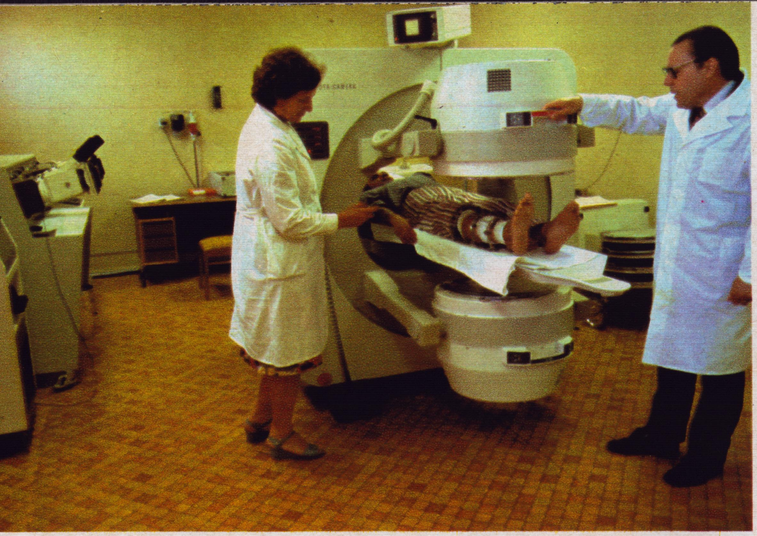
本誌記者　ミハイル・コチュノフ　カメラ　ビャトキンほか



レントゲン写真で患部の様子を点検するイリザロフ所長（右）



▶治療のための体操



ラジオアイソトープで血液循環とリンパの流れを追跡する

小児成長調整部の休息ルームで









少女が大腿骨を骨折した。骨片は完全に転位していた。ふつうなら患部を固定して約1年は寝ていなければならない。障害が残らないともかぎらない。だが彼女は47日後に退院して、家に帰ると、骨折した方の足で跳ねてみせた。すっかり元どおりに治っていたのだ！　イタリアから来た少年は身長が105㎝しかなかった。脛骨を伸ばし、大腿骨を月に6㎝ずつ伸ばして、いま身長は128㎝になった。

そんなことが本当にあるのだろうか？　だが実際にそれは、南ウラルのクルガン市にある整形外科学・外傷学実験・臨床研究所で起きたことなのである。きょうも、奇跡を求めて患者がやって来る……

一九四〇年代の半ば、シンフェローポリ医科大学を卒業したガブリール・イリザロフは、ウラル南部、クルガン州のある農村の病院に配属された。すでにこのときから、彼が生涯かけて取り組むことになる仕事の構想が、目に見える形を帯び始めた。整形外科医としての経験は、骨組織の

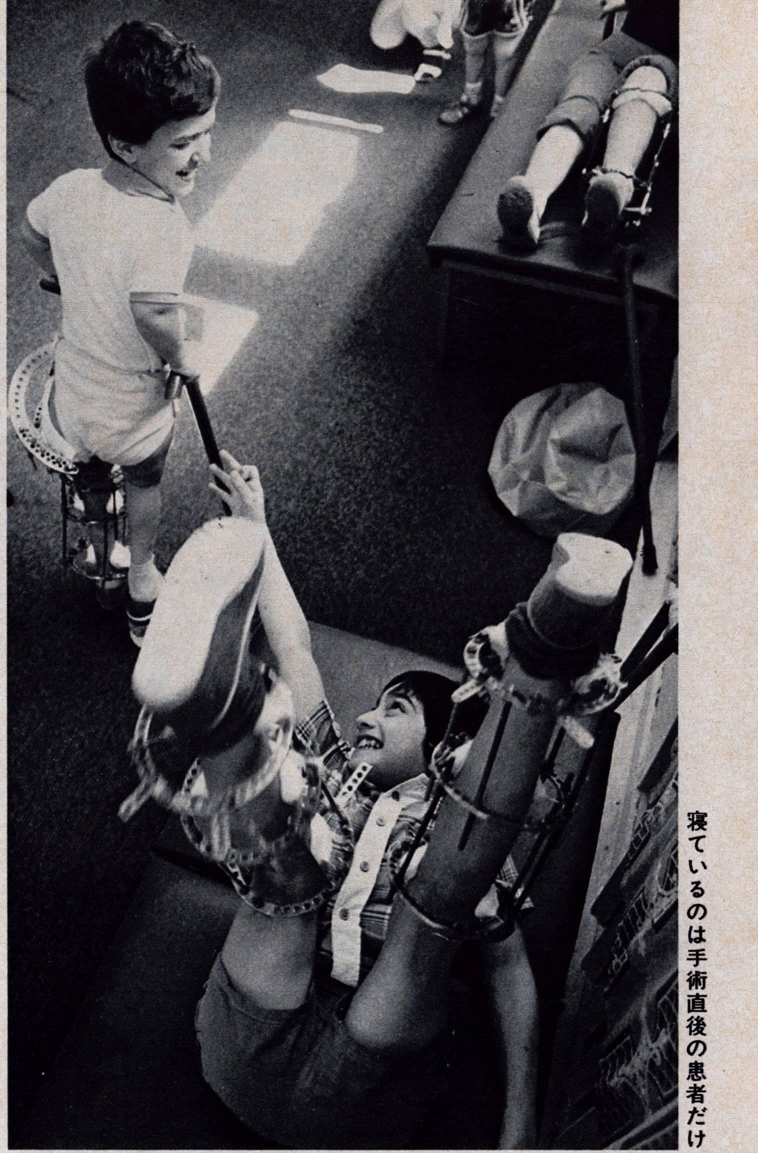
上　ガブリール・イリザロフ・クルガン整形外科学・外傷学実験・臨床研究所所長（医学博士、ロシア連邦共和国功労医師、同功労発明家、レーニン賞受賞者、社会主義労働英雄）

左上　〝運動による回復〟がこの研究所の方針

左下　ミラノから来たこの双子の兄弟（両端）は身長を22㎝伸ばした。

クルガン整形外科学・外傷学実験・臨床研究所の建物





寝ているのは手術直後の患者だけ

成長の可能性は軟組織の成長の可能性に対応するだけでなく、条件によってはそれを上回る、ということをイリザロフに最終的に確信させた。そのような条件を探せばいいだけだった。長年の研究によって、そのような条件の中で肝心なのは、癒合しつつある骨組織に適量の絶えず引っ張る力を与えることだ、ということが分かった。癒合しつつある骨をしっかり固定することも重要だった。

医学界は初め、この新しい考えを攻撃した。なぜか？　昔から、折れた骨を治療するには患部の絶対安静が必要だと考えられて来た。それを引っ張れというのである。疑問視する人々を納得させるために、イリザロフはそれを証明するための器具を作らなければならなかった。いまでこそ有名なこの器具を使って、構想は実地に移すことが可能になった。この器具は現在では数十種のモデルがあるが、その原理は、一九五二年にイリザロフが新案特許の証明書を受けたときと変わっていない。骨折箇所の両側の骨を貫いて手または足を囲む鋼鉄のリングに固定された数本のステンレス製のスポーク。リングとリングはロッドでつながれ、ナットで締めつけてある。これがこの器具の基本的な構造である。

手術にさいしてはまず、骨折部を整復し、器具を使ってしっかり固定する。1—2日たって骨が癒合し始めると、ナットを回してリングの間隔を広げ、厳密に定められた量の引っ張り力を患部にかける。すると奇跡が起こる。くっつきかかった骨折部は意外にも離れないばかりか、急速に癒合しながら、伸び始める。骨が元どおりにくっつくだけでなく、折れるとしばしば短くなる骨の長さも回復できるのである。

器具は画一的な部品から組み立てられているので、四肢のあらゆる種類のけがの治療に利用することができる。医者も新しい職種を身につけることになる。伝統的な医療器具の代わりに、仕上げ工や組立て工のように、ボルトやナットを操作しなければならない。骨にスポークを通すときには、電気ドリルさえ使う。

以上述べてきたことは、もちろん、ごく大ざっぱな話だ。それにもかかわらず、イリザロフの方法と器具のことになると、治療のプロセスが著しく簡単になったこと、それがきわめて速くなったことが必ず指摘される。"ふつうの"複雑骨折（単純骨折の場合は必ずしもこの器具を必要としない）なら、従来の方法——ギプスによる固定や伸長療法の$\frac{1}{3}$の期間で治る。特に重要なのは、全快する率が97％だということである。残りの3％はすべて手遅れの場合なのだ。

とはいえ、速く、簡単に治すということがこの新しい方法の主要な目的ではなかった。イリザロフ法によれば、病気や生まれつきの原因で発達しない手や足を伸ばすことができる。伸ばす長さは自由で、そのための期間もそれほど長くかからない。骨は平均して1昼夜に1㎜伸びる。

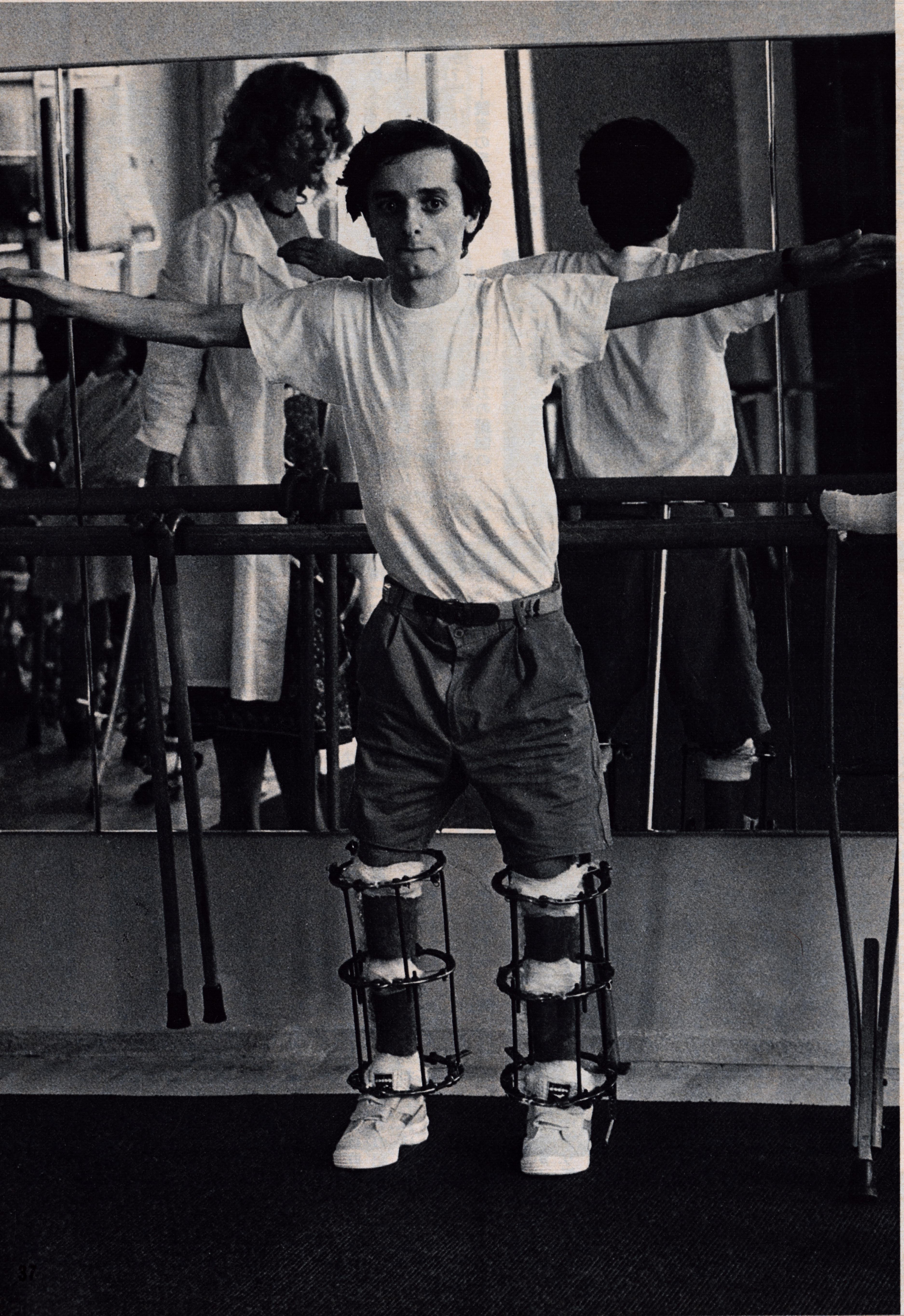
イリザロフが指導する研究所は病院の中のいくつかのベッドから出発した。やがてそれは大きくなり、一つの部屋をもらった。いまでは研究所のために特別に設計された新しい建物が使われている。

興味深いことに、入院患者用のベッドは三六〇床しかない。それ以上必要ないのだ。入院するのは手術を受けたばかりの者だけだからだ。2—3日して骨が癒合すれば、もうその足で歩くことができるし、その手を使うことができる。治療中の負荷は、健康な部分に固定された器具が引き受け、患部には伝わらない。

回復中の患者は研究所の隣にあるペンションで生活し、ときどき診療を受けるためにやって来る。診療所の古い部屋は実験室に変わり、そこで将来のための研究が行われている。四肢のあらゆる種類のけがの治療という問題が事実上解決されたいま、研究所員たちはイリザロフの指導のもとに、もう一つの、それに劣らず重要な課題——脊椎の損傷および先天性の脊椎欠陥の治療に着手した。

ガブリール・イリザロフは自分の人生の意義を人々への奉仕の中に見出している。そのためには力も時間も、自分

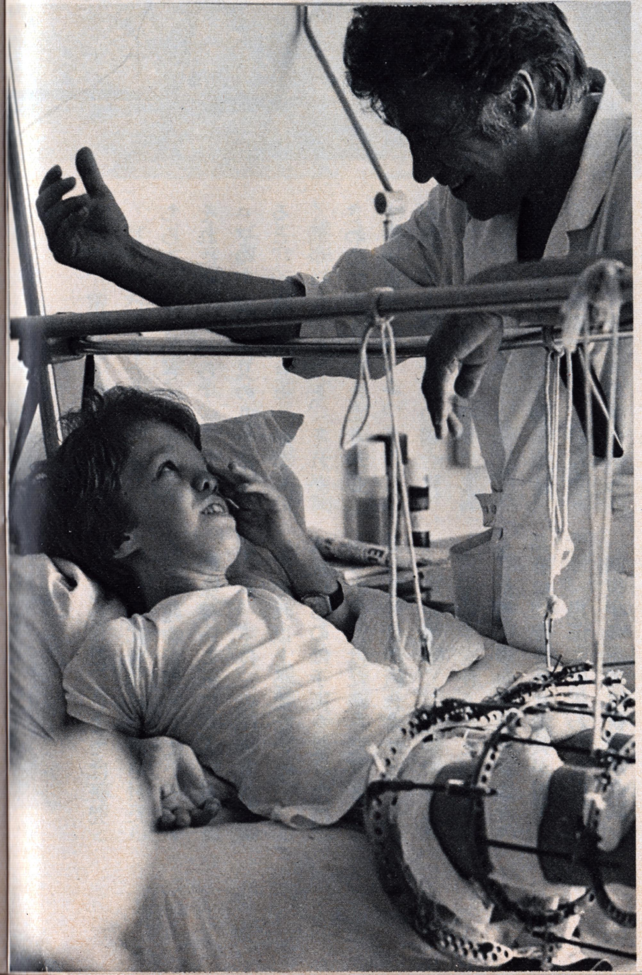
成長調整部で治療を受けるイタリアの青年





イリザロフ所長直々の診察

まず脛骨を13cm伸ばして、こんどは大腿骨を伸ばすために2度目の手術を受けに来たアイスランドの少年。



自身さえも惜しまない。そして人々も、同じことでそれに応える。ウラル山脈以東をシベリアと呼んでいるから、クルガン市は〝立派に〟シベリアである。気候は厳しく、果てしないタイガが広がり、顔が凍傷にかかるほど寒くなる。イリザロフは何度も、モスクワかレニングラードに移って、生活と仕事のための理想的な条件、研究活動のためのもっと広い場を作り出すよう勧められた。だが、彼はあらゆる勧めを断ってきた。なぜなら、シベリアに惚れ込んでしまって、ほかの土地など考えられないからだ。地元の人々はイリザロフをソ連共産党第27回大会の代議員に選出した。

イリザロフの研究所——それは大規模な研究施設であり、治療施設であり、自分の仕事に熱中している人々の大きな集団である。研究所には診療所、実験部その他の部局のほかに、最新の構想を器具という形に結実させ、それを量産さえできる実験工場もある。このような整形外科学・外傷学センターは世界のどこにもない。

ソ連の軍事費——事実と憶測

本誌評論員　ゲンナジー・ピサレフスキー

「西側諸国は軍備を増強するために社会・福祉費を削減せざるをえなくなっています。一方ソ連では民生が向上し、社会計画が拡充していますが、ソ連はどのようにして、民生の充実と現在の軍備水準の維持とを両立させているのでしょうか?」

——読者の手紙から

実際、ここ40年間ソ連では、国民の実質所得は一度も下がったことがなく、年々増加しています。

その一方で、ソ連は周知のように西側最大の強国米国と軍事・戦略的に均衡を保つようになりました。このことから、ソ連と米国に軍事的均衡が存在する以上、軍事力の維持と装備の物質的支出も同じでなければならないという宣伝的な理屈が西側で唱えられています。もし公式発表の軍事支出に違いがあれば、それはソ連が故意に真の支出を隠しているからだというのです。こうして宣伝的空想がどこまでもふくらんでいくようです。

われわれの論敵が挙げている主な根拠は、読者の皆さんによく知られていますが、残念ながらその逆のソ連側の論拠は、事実上西側の新聞に載りません。

まず初めに軍事力の編制の諸原則ですが、これはソ連と米国では根本的に違っています。ソ連軍は普通兵役義務法に基づいて編制されていますが、米軍は自由志願（雇用）制が原則です。ソ連では満18歳に達した青年は、健康状態または家庭の事情により召集を免除される場合を除き、兵役に就かねばなりません。米国ではお金を稼ぐために軍隊に入ります。だから米軍の給養費はソ連よりもずっと高くついています。

それからソ連では周知のとおり、すべての企業が国有です。国は軍隊も養っています。軍と産業の主人は国であり、防衛企業には利潤は一ルーブルも入ってきません。軍には機械装備や燃料、食料などが原価で支給されています。

一方米国では産軍複合体に入っている私有会社が、すべての軍需注文をこなしています。米国防省の注文は消費財の生産に比べて60%増のもうけを約束しています。米上院分科委員会は軍需生産にたずさわっている一三一の独占体の経理収支を調査して、このうち49社が一〇〇%以上、22社が二〇〇%以上、3社が五〇〇%以上、1社が約二〇〇〇%の利潤をそれぞれあげていることを明らかにしました。

周知のように米国では、普通の値段の何倍もの値段をつけて、国庫金をふんだくったというセンセーショナルなニュースがよく新聞に載っています。それによると海軍当局は、原価25セントの電球を納入した業者に84倍の21ドルを支払い、1ヤードの小売り値3・6ドルの電気ケーブルに約15倍の50ドルを払ったということです。このような例は非常に沢山あります。だからソ連の兵器生産費が米国の$\frac{1}{10}$―$\frac{1}{16}$であるという米国の専門家の評価はもっともだと言えます。

米国はつねにソ連に対する軍事的優位をめざしてきましたし、残念ながら今もそれをめざしています。軍拡競争をエスカレートするきっかけをそのつどつくってきたのはつねに米国であり、ソ連がそのきっかけをつくったことは一度もありません。そのため、ソ連は軍事面でたえず米国に追い付かねばなりませんでした。ソ連が米国の核独占をうちこわした一九四〇年代末としたし、米国が原子力潜水艦を開発し始めた一九五〇年代末や米国が分離核弾頭つきのミサイルを開発した一九六〇年代がそうでした。巡航ミサイルや他の多くの種類の兵器の場合にも全く同じことが起こりました。

いま米国はさらに大きく前進し、宇宙を軍事化し、SDI（スターウォーズ）計画を実現して、対ソ連優位を獲得しようと努めています。ミハイル・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長は昨年11月21日ジュネーブでの記者会見のさい「われわれはもちろん対抗措置を見つけよう。かつてソ連指導部は、権威ある機関と科学者にしかるべき依頼を行っており、われわれは、われわれの対抗措置がより効果的で、コストはより低いものとなり、もっと短期間で実現可能だ、と言うことができる」と語りました。

しかしわれわれの政治的選択は、それではありません。われわれは均衡に賛成ですが、その水準をたえず引き下げ、理想としては完全軍縮にまでもってゆく用意があります。これについてはM・ゴルバチョフがさる1月15日の声明（本誌第4号付録）の中で述べています。

⑦ 今日のソ連邦 ソ連ミニ百科

■ピオネール組織

この大衆的児童組織には、10歳から15歳未満の学童2000万人余りが加入しています。当然ながらピオネールの指導者たちは、子供たちが興味をもつことにたずさわり、子供たちの生活が楽しく、おもしろく、知識を増進するものになるように努力しています。そのためピオネール組織は、たくさんのさまざまなサークルや会を持ち、ハイキングや旅行、各科目の学力競技やスポーツ競技会を催しています。同時にピオネール員は故紙やくず鉄集めといった力相応の労働に参加します。ピオネールの「緑のパトロール隊」は自然保護にとても役に立っています。ピオネール組織は5000以上のピオネール宮殿・会館、1530の少年技術者ステーション、1026の少年自然科学者ステーション、48のこども鉄道を持っています。

夏休みには8万1500のピオネール・キャンプが開設されます。なかでも有名なのは、黒海沿岸クリミアにある国際キャンプ場「アルテク」です。ピオネール組織は28種の新聞と45種の雑誌を発行しています。中央紙「ピオネールスカヤ・プラウダ」（週2回刊）は970万部発行されています。



クリミアのピオネール・キャンプ「アルテク」で。ソ連の子供たちと共に、外国から来た子供たちもここで休暇を過ごす。写真は一緒に写生するインドとソ連の子供。



モスクワのカリーニン通りにある対外友好会館（ソ連対文連と対外友好団体の本部が入っている）



下　ソ連対文連加盟団体の一つ、ソ日協会の招きで日本からお客さんがよくソ連を訪れる。写真はレニングラードの勝利公園にある〝姉妹都市の小径〟で記念植樹をする大島・大阪市長(右)。

■ソ連対外友好・文化交流団体連合会（対文連）

この名称そのものが、この団体の活動内容を物語っています。対文連はソ連の82の対外友好団体を統合しています。これらの対外友好団体には延べ3万以上の企業、教育機関、研究所、文化施設が団体会員として加入しています。対文連の活動には5000万人以上のソビエト人が参加しています。対文連と対外友好団体（ソ日協会など）は、伝統行事として友好月間や友好週間を実施し、他国民の生活のさまざまな面を紹介し



平和擁護の署名集めをするウクライナ共和国の青年たち

たり、その国の祭日、記念日などにちなんだ文化・科学デーを催したり、さまざまな展覧会を組織したりしています。1984年には外国で136の対ソ友好団体が活動しました。対文連は週刊紙「モスコー・ニューズ」（ノーボスチ通信社と共同で発行）と月刊誌「文化と生活」を発行しています。対文連の最高機関は、5年に1度開かれる全国協議会です。

■ソ連平和擁護委員会

1949年創立。ソ連の平和擁護運動を指導し、連邦構成諸共和国とソ連の大都市の平和擁護委員会の活動を調整し、世界平和評議会の活動に積極的に参加しています。ソ連平和擁護委員会のイニシアチブで平和デー、軍縮週間、欧州安全週間が実施され、平和行進や平和集会が組織されています。ソ連平和擁護委員会は原子力兵器の禁止を呼びかけ（1950年）、軍拡競争の中止と軍縮を求めた（1975年）二つのストックホルム・アピールの署名運動を指導しました。

■ソ連婦人委員会

極めて活発な活動を行っているこの委員会の役割は、計り知れないほど大きなものです。ソ連婦人委員会はソ連と諸外国の婦人の友好関係を発展させ、平和と諸国民の安全をめざす国際民主婦人運動や、婦人と子供の権利を守る闘争に参加しています。世界最初の女性宇宙飛行士ワレンチナ・テレシコワを議長とする同委員会は、120カ国の250以上の各国の団体や国際団体と友好関係を保ち、毎年数十の代表団を受け入れています。委員会は14の言語で月刊誌「ソビエト婦人」を発行しています。指導機関は毎年開かれる総会です。

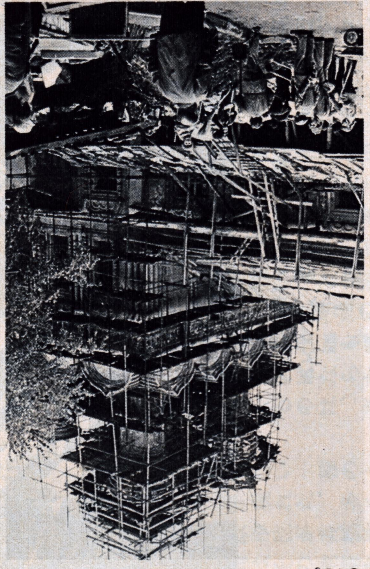


平和行進に参加するソ連婦人委員会議長のワレンチナ・テレシコワ（ソ連邦英雄、ソ連宇宙飛行士）

■全ソ科学協会

全ソ科学協会は全部で約20あり、ソ連科学アカデミーに付属しています。各協会には、具体的な科学部門に興味を持ち、科学広報活動を行っている研究者と専門家が加入しています。たとえばこんな協会があります――天文・測地学協会、生化学協会、遺伝学・品種改良学者協会、微生物学協会、古生物学協会、心理学者協会、生理学者協会、哲学者協会。

17―19世紀ロシア建築の記念物ブイソコペトロフスキー修道院（モスクワ）の修復にはボランティアの市民も参加した。



■自然保護・文化財保護の団体

この種の団体は年を追ってますますポピュラーになり、会員も増えています。新しい会員の多くは学校の生徒と青年労働者です。自然保護協会の主な仕事は、国と社会団体の環境保護活動に協力すること、この分野の法律の順守の監視、科学・啓もう活動、教育活動の実施です。史跡・文化財保護協会は保護すべき記念物を探し、その保護と修復に尽くし、アマチュアのフォークロア・グループのコンサートを催しています。

■文学・芸術関係の創作同盟

文学・芸術の創作関係の職業に就いている人々の任意加入団体は全部で6つあります。それは作家同盟、美術家同盟、作曲家同盟、映画人同盟、ジャーナリスト同盟、建築家同盟です。各同盟はそれぞれ出版物を発行しています。文学・芸術関係の知識人が加入するこれらの同盟は、充実した活動を行っています。各同盟は創作活動にたずさわっている人々自身のためにも、また国の文化の発展のためにも多大の努力を払っています（とくに物質的援助を与えている）。各同盟の最高指導機関は全ソ大会で、大会から大会までの間の活動は、理事会と書記局が指導します。

5 対外政策、平和擁護闘争

ソ連対外政策の主要原則／大祖国戦争／ソ米首脳会談／2000年までに核兵器を完全・全面廃絶するプログラム／平和擁護法／平和擁護運動／ソ連と国連／国際交流／外国貿易／レーニン平和賞／ソ連外務省／ワルシャワ条約／経済相互援助会議（コメコン）／ヘルシンキ全欧会議

■ソ連対外政策の主要原則

ソビエト国家の最初の法令は、1917年10月26日（新暦の11月8日）――10月社会主義大革命が成就した翌日に採択された「平和に関する布告」でした。布告を社会主義国家の対外政策の基本として、社会体制の異なる国々の平和共存の原則を宣言しました。平和共存は次のことを前提条件としています。国家間の紛争問題を解決する手段としての戦争の拒否、交渉による紛争問題の解決、国家間の同権・相互理解・信頼、互いの利害の考慮、内政不干渉、自国のすべての問題を自主的に解決する各国民の権利の承認、すべての国の主権と領土保全の厳粛な尊重、完全な平和と互恵に基づく経済・文化協力の発展です。ソ連の対外政策の主要目的は、世界戦争を回避するだけでなく、社会生活から永久に戦争を排除することにあります。この外交理念は第2次世界大戦でばく大な、とうてい償えない損害を被ったソビエト国民の苦労の結晶と言えましょう。

■大祖国戦争

ソビエト国民が1941年から1945年まで、ファシスト・ドイツとその同盟諸国に対して行った正義の解放戦争を、ソ連の人々は大祖国戦争と呼んでいます。1941年6月22日未明、ドイツ軍は突然、ソ連に対し不法な攻撃を加えてきました。彼らの作戦行動のもとになった「バルバロッサ」計画は残酷で“簡単な”ものでした。つまりソ連の住民を皆殺しにするか、奴隷化すること、そのために1カ月半か2カ月間でソビエト軍をせん滅し、ボルガ川まで、その後はウラルまでの領土を占領する、というものでした。開戦時のドイツとその同盟諸国の兵力は、ソビエト軍の2倍以上でした。そのため開戦後数カ月間ソビエト軍は後退せざるを得ませんでした。しかし1941年12月初め、ソ連の友も敵も驚嘆した真に歴史的な戦闘がモスクワ近郊で始まりました。それはドイツ軍の第2次

南太平洋地域の非核地帯化宣言



イズベスチヤ紙政治評論員　アレクサンドル・ボービン

昨年の8月5―6日、クック諸島の行政中心地アバルアで開催された第16回南太平洋諸国会議で、南太平洋地域を非核地帯と宣言することを決めた。こうして13ヵ国は〝永久に〟自国領土内での核兵器の配備・生産・実験と太平洋への放射性廃棄物の投棄を禁止した。核保有諸国が調印する予定になっている条約付属議定書は、核保有諸国に非核地帯の地位の尊重を求めている。

この事実は、それ自体興味深く重大であるだけでなく、核兵器の拡散防止と非核地帯の設置をめざす長期のねばり強い闘争から見ても注目され、意義深い。

非核地帯の歴史は一九五六年2月27日に始まった。この日、国連軍縮小委員会でソ連は、欧州に軍備制限・査察地帯を設置することを提案した。

東西両ドイツとその隣接諸国の領土に核部隊やあらゆる種類の原子・水素兵器の配備を禁止するというのが、その趣旨だった。それ以来さまざまな国から非核地帯を中欧と北欧、バルカン、地中海地域、中東、アフリカ、インド洋水域にそれぞれ設置する提案が繰り返し出され、討議された。

これらすべての提案は、核戦争発生の危険性を減らし、核軍備の配備地域を制限し、非核地帯内の国々が核紛争に巻き込まれるのを防ぎたいという熱望から出たものだった。長文の文書が作成され、しかるべき決議が採択されたが、事態ははかどらなかった。その理由は簡単だ。米国と米国に追随するNATO加盟諸国、イスラエルと南アフリカ共和国のような国からすれば、非核地帯は、自国の力の政策に対する脅威であるからだ。

しかし一九六七年2月12日にメキシコでラテンアメリカにおける核兵器禁止の条約(トラテロルコ条約)が締結され、核兵器のない世界への突破口が開かれた。すべての核保有国が調印し批准した付属議定書2によれば、核保有諸国は非核地帯の地位を守り、その地位の侵犯に協力しない義務を負うことになっている。

ところでどの非核地帯にも共通する単一のモデルというものはない。しかしトラテロルコ条約、アバルア条約、その他の非核地帯に関する諸条約は、非核地帯の法体制をかなり明確にうたっている。この地帯に入っている諸国は、自国の目的のために核兵器を生産・蓄積・搬入せず、自国領土に核を配備することを許可しない義務や、核兵器の製造設備や装置を設置せず、また設置を許可しない義務を負っている。核兵器保有諸国は、もし自国軍隊が国際協定に従って非核地帯の領土内に配置されているならば、軍隊の装備として核兵器を保有せず、この地域の各国政府に核兵器を渡さず、地帯の加盟諸国に対し核兵器を使用せず、加盟諸国を核兵器の使用を盾に脅迫しない義務を負っている。

このように、非核体制は非核諸国ならびに核保有諸国の義務の総体である。だがフランスは非核地帯に入っているムルロア環礁で核爆発を続けると、すでにはっきりと声明した

太平洋諸国の住民にとってこのことは文字通り難問題である。フィジーの大学職員たちは、フランスと米国が行った二一〇回以上の核実験による環境の放射能汚染が、すでにガンの発病件数の増加、先天的障害児の出産、遺伝異常といった結果を招いたことを明らかにした。実験する側の当事者は通常、今度の爆発は〝きれい〟で、だれにも害をもたらさない、と主張している。だとすると、なぜ爆発のコントロールセンターから数千㎞も離れた所に実験場を設けなければならないのかという反論が出てくるのは、当然だろう。

最近、核兵器のない一種のミニ地帯を設置する慣行が現れた。多くの市町村、その他の行政単位が非核地帯化宣言をし、現地当局はその地帯内での核兵器の製造、配備、輸送を禁止している。一部の国の政府は地方自治体のこのような決定を無視しているが、それでミニ非核地帯宣言の道徳的・政治的意義が低くなるわけではない。宣言は広範な住民層の政治意識の成長と軍拡競争の拒否を象徴しているからである。

日本の人口の半分以上が住んでいる九〇〇の市町村が非核自治体宣言をした。M・S・ゴルバチョフは長崎市長と広島市長への手紙(本誌前号参照)の中で、日本を本当に核のない国にし、そうすることによって地上からの核兵器の完全廃絶に貢献しようとの日本の広範な大衆の熱望を反映しているこの運動の重要性を強調した。



大祖国戦争(1941―45年)中の写真――破壊された自分の家の廃墟に座り込むベロルシアの婦人。



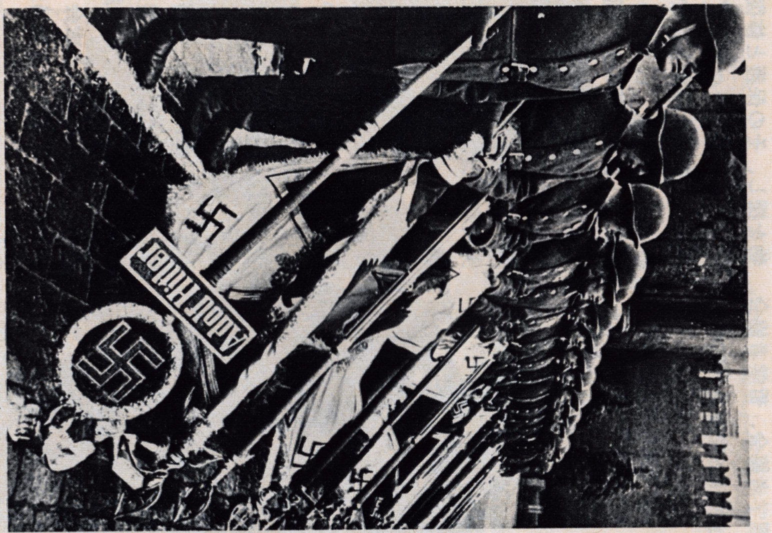
大祖国戦争中の写真――ファシストの強制収容所に入れられたソ連の子供たち。

55

世界大戦中初の大敗退となり、"電撃戦"構想の破綻であり、戦争の転換の始まりでした。それでもまだかなり強力だったドイツ軍はボルガ川まで達しました。しかし1942年11月19日、ソビエト軍はスターリングラード付近で強力な反攻に転じ、ここで33万のヒトラー集団軍を粉砕しました。これは戦局の根本的な転換となりました。その後、1943年夏のクールスク戦でのソビエト軍の勝利と続き、その結果終戦までずっとソ連は戦略的主導権を握り続けました。1944年はソビエトの国土から敵が完全に駆逐された年であり、欧州諸国民がファシズムの束縛から解放され始めた年でした。1945年4月30日、輝かしい戦果を収めたベルリン作戦のあと、ドイツ国会議事堂の上に勝利の旗がひるがえりました。5月8日、ドイツ軍最高司令部は全面無条件降伏文書に署名しました。5月9日がソ連で勝利デーと宣言されました。

第2次世界大戦中、ソ連、米国、英国、フランス、中国、ユーゴスラビア、チェコスロバキア、ポーランドその他、全部で28カ国による反ヒトラー連合が結成されました。しかしヒトラー軍の壊滅に決定的な役割を果たしたのはソ連でした。ソ連はこの戦争で2000万人(第2次世界大戦の全犠牲者の約40%)を失い、物質的損失は2兆6000億ルーブルにのぼり、ソ連の1710の都市と数万の村、数万の企業が破壊されました。

56



モスクワ'赤の広場'一九四五年6月24日 ソビエト軍のがい旋パレードで投げ[illegible]されるファシスト・ドイツ軍の軍旗

ソ連共産党第27回大会——意見と感想

率直な自己批判に感銘

——石橋政嗣・日本社会党中央執行委員長にインタビュー



——今回のソ連共産党大会についてどのような感想をお持ちですか?

世界中の大きな関心を集めた大会でしたね。その理由は第一にゴルバチョフ政権が誕生して初めての党大会だったということ。第二に、ソ連の国内政策、外交政策にどのような新しい変化が現れるか、その点でとくに注目されていたということでしょう。結果的には、ゴルバチョフ報告は多くの人を満足させた、と言っていいのではないでしょうか。この大会に日本社会党を代表して出席した武藤副委員長もこの演説を高く評価し、ゴルバチョフ書記長が自信をもって党大会に臨み、今まで見られなかった新しいスタイルを生み出したことが印象深かった、と語っていました。この評価については私もまったく同意見です。

——ゴルバチョフ書記長は党大会での政治報告の中で、「今日、平和共存以外の道はありえない。平和という条件の下でのみ、すべての問題が解決できる。包括的な国際安全保障体制の設立のために、地球上の平和の運命を案じている各国政府、諸政党、社会団体や運動、すべての諸国民はより緊密に協力すべきだ」と呼びかけています。これについてはどうお考えですか?

結論から言えば、まったく同感です。

昨年9月に私がモスクワでゴルバチョフ書記長と4時間にわたって話し合いをした時、私の方からも同じことを言いました。簡単に言いますと、「今の世界に蓄積されている核兵器は人類を何回も殺りくできるほどの膨大な量に達しており、一説によれば核弾頭や核爆弾は三万発——広島、長崎に投下された型に換算して一〇〇万発分もあると言われている。こういう状況下では、社会主義体制がいいか資本主義体制がいいかを力で決着をつけるということはもはや不可能だ。どちらがよいかは、平和的に実績で競争する以外にない」といった見解を述べたのです。つまり、ゴルバチョフ書記長の意見と完全に一致するのです。

その後、ゴルバチョフ書記長はこの1月に、3段階方式で今世紀末までに核を廃絶しようではないか、という提案をしましたが、私は全面的にこれを支持しました。これまでの提案は核の数の制限、核の管理といった発想であったものが、初めて具体的な核廃絶を目標とする提案がなされた。これは画期的なことです。

今度の党大会でも改めて核廃絶の提案が行われ、各国の来賓からも圧倒的な支持を受けたそうですが、その実現のために一歩も退かず全力を尽くしていただきたい。

——ゴルバチョフ報告の中で述べられたソ連の社会主義建設、経済建設のプログラムについては、どう評価されますか?

日本のマスコミの評価も、武藤副委員長の報告もそうでしたが、今度の党大会では実に率直な自己批判が行われています。非常に大胆に従来の欠陥を指摘し、それをいかに克服すべきかを訴えたことは高く評価していいでしょう。特に私が注目したのは、「社会の一層の民主化、国民の社会主義的自治の深化」ということが強調された点と、これとの関連で企業の、あるいは労働集団の自主管理という考えがこれまでになく強く打ち出されているのではないかということです。労働者、国民が自主性をもって社会主義建設に取り組むように訴えていること、従来のともすれば上からの官僚的な指導に頼ろうとするやり方を、下からの自主性を重んじ、労働者にやる気を起こさせる方向へウェートを置き換えていこうとしていることは極めて印象的であり、明るい未来を期待させるものです。

——党大会で採択されたソ連共産党綱領新稿についてどのような評価をお持ちですか?

日本社会党もいま、脱皮と再生ということをスローガンに掲げて、ニュー社会党をめざして頑張っているわけですが、そのことと関連して、ソ連共産党綱領新稿は非常に参考になります。ゴルバチョフ報告の党活動に関する部分を見ても「新しいやり方で仕事をし、党組織の役割と責任を高めること」とか、「清らかで誠実な党員像のため、原則的な要員政策のために」とか、「イデオロギーと実生活との結合を強化し、人間の精神生活をゆたかにすること」といったことが、あるべき党の姿として掲げられていますが、ここには党自体の活性化への強い意欲が感じられます。それがなければ、人民の期待するような国家もつくれないし、計画が完全に達成されるような生産力も生まれない、また、労働者の意欲も湧いてこないということだと思います。

——ゴルバチョフ報告には宇宙開発に対するソ連のアプローチ——平和な宇宙、宇宙の非軍事化をめざす闘いがソ連の政策の中心的な要素であると述べられています。これに関連して、米国のSDI(戦略防衛構想)、米国の宇宙政策についてどうお考えですか?

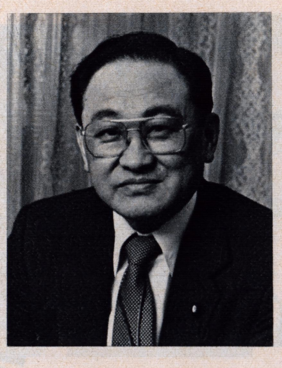
日本社会党はSDI構想が発表された時から態度を明らかにしています。われわれは地球上の軍拡を否定していますが、それがさらに宇宙にまで及ぶとはもってのほかです。宇宙はあくまでも平和な所に、人類共有の場所に確保しておかなければいけないというのが、われわれの基本的な考え方ですから。ここに資本主義体制と社会主義体制の違いが現れているのではないか。社会主義体制の場合は軍縮をやることになれば、軍備のための資源をそのまま国民生活の安定・向上に振り向けることができます。しかし資本主義体制では、軍需に使われている部分を削減するということは軍需産業の崩壊につながっていくため、非常に抵抗が強いのです。かつてアイゼンハワー大統領が指摘したように、資本主義は産軍複合体というどうしようもない体質を持っているわけですから、なかなか軍縮が実行できないのです。日本にも同じような矛盾があり、そのためSDI開発研究に歩調を揃えようという動きがあり、われわれは警戒を強めています。

——ゴルバチョフ報告の中にはソ連共産党と他の国の社会主義諸政党、社会民主主義諸政党との関係を今後発展強化していくという意思が述べられていますが、これについては?

私は昨年訪ソの際、ゴルバチョフ書記長と長時間会談し、わが党とソ連共産党との共同声明を採択しました。その結果両党の関係は飛躍的に友好の度合いを深めただけでなく、日ソの関係改善にも大いに役立ったと思います。今後も両党の良い関係は深まり、成果が上がるものと確信しています。

ゴルバチョフ政治報告を読んで

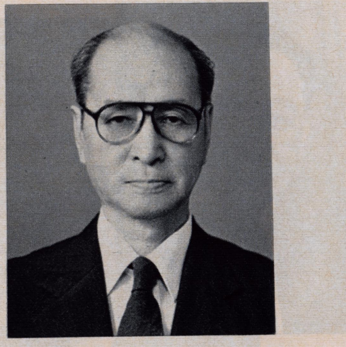
日本共産党常任幹部会委員・
国際委員会責任者
立木 洋



わが党はソ連共産党第二十七回大会にあてた中央委員会の祝辞で、今回の大会が「世界政治の大きな流れが、人類文明破滅への道をさらに先へ突き進むのか、それともこの脅威を根本的に取り除くための効果的措置を早急にとるのかという、きわめて重大な局面にさしかかっている」ときにひらかれる、として大きな関心をよせた。ゴルバチョフ書記長の政治報告がその冒頭の部分で、世界政治の現在の複雑さ、きびしさを指摘しながらも、「急激な転換の時点」として位置づけ、「核兵器を非合法なものとして禁止し、核兵器その他の大量人殺し兵器を完全に一掃……する課題が、ますます緊要なものとなっている」とのべている点がとくに印象的である。周知のように、わが党とソ連共産党は、国際問題における他の一連の不一致点を脇において、核問題にしぼった活発な議論をへて一九八四年十二月の両党首脳会談で核戦争阻止、核兵器全面禁止・廃絶を「人類にとって死活的に重要な緊急の課題、反核・平和運動、世界政治全体における中心課題」と明確に位置づける共同声明を発表したが、その後の曲折をへてゴルバチョフ書記長の一月十五日の声明がだされた。この声明は核廃絶を米ソなど核兵器保有国間の交渉の具体的日程にのぼせた点に画期的意義がある。いまや世界諸国民の共通の要求となっている核兵器廃絶の好機をのがさないためにも、国際的な世論の動員と発展を背景に核保有諸国間、とりわけ米ソ両国間で核兵器全面禁止・廃絶のための具体的な政治的合意を結実させることが、差し迫って求められている。

この点でゴルバチョフ報告にしめされた個々のアプローチや提起については、わが党なりの見解や評価はあるが、ここではゴルバチョフ書記長をはじめとするソ連共産党新指導部が米ソ交渉など国際政治のあらゆる場で「転換」というにふさわしい新しい創意とイニシアチブを発揮され、この人類的な課題の前進のために貢献されるよう改めて期待したい。わが党は、核戦争阻止、核兵器廃絶の世界世論と運動のいっそうの前進のために全力をあげる決意である。

核兵器廃絶へ向けて新たな成功を



日ソ協会理事長　清水　達夫

ソ連共産党第二十七回大会に際し、ソ連国民各位、ソ日協会会員各位に心からお祝い申し上げます。

私は先ず第一に、この大会が核戦争阻止・核兵器廃絶という人類にとって最優先の緊急課題を遂行する上で新たな成功を収められる事をお祈りします。

三月末に開かれる日ソ協会の第三十回総会の方針書（案）は、今世紀末までに核兵器を廃絶することをうたい、この課題を世界政治の日程にのせたゴルバチョフ書記長構想を、被爆国民として歓迎し、その実現を加速するために、貴国民を含む全世界の人々とともに世論と運動をもりあげ、核兵器廃絶の国際協定締結のため反核国際統一戦線の結成に貢献することを決意しています。

第二に私は科学技術革命の最新の成果と社会主義制度の優位性を有機的に結合し、経済の集約的発展・生産の構造的再編成によって、今世紀末までに生産力を倍増するという基本方向が成功裡に実現されることをお祈りします。

さいごにこれを機に私達は既にソ連対外友好文化交流団体連合会・ソ日協会と合意しているように「自主・平等・内部問題不干渉・国際連帯」の原則を双方で堅持して、真の日ソ友好の事業を発展させたいと存じます。

婦人生活の今後の変化に注目

――清水澄子・日本婦人会議議長に聞く



――今回の第27回ソ連共産党大会では社会的諸問題が討議され、批判的意見も出ました。こうした問題提起にどういう印象、ご意見をお持ちですか？

今度の共産党大会を注目している人は世界的にも多いと思います。それは新書記長のもとで、ソ連の経済、対外政策がどういう方向に向かうかということが関心をもたれているからでしょう。経済政策のこれまでの欠点を率直、大胆に反省していることは、私たちから見ても好感がもてます。過去を真剣に分析する姿勢は必ず新しいものを生み出していきますから。革新的な組織には、いい面だけを評価するという悪い傾向がありますが、こうしたやり方は官僚主義を生むだけでなく、さまざまな人々の優れた提言や、活動力、創造力を発見して社会へ生かす道を閉ざし、さらに組織の停滞、腐敗を生み出しがちです。ですから今大会のような非常に大胆な問題提起は世界的に共感を呼ぶのではないでしょうか。私が一番期待を寄せたいのは、指導部のあり方を改めよう、という箇所です。私たちのような運動体では、停滞の原因が会員の方にあるとして、会員に反省を求めることが往々にしてありますが、まず指導部が姿勢を正すことだと思いますから。またこれからの幹部像として、創造的、自主的に行動し、自分の意見を持ち、勇気をもって発言することを求めていますが、これが実行されればソ連は飛躍的に前進するでしょうし、世界の進歩勢力にも一つの問題提起になるでしょう。その意味で私は、党大会でゴルバチョフ書記長が数々の課題を提起したことを高く評価します。

――党大会では婦人の地位の一層向上についても討議されています。ゴルバチョフ報告によると、離婚の問題、家庭のきずなを強める問題は子供の教育にもかかわる重大な問題であることが述べられています。こうした点についてどうお考えですか？

経済改革――21世紀まで、つまりあと15年間で国民所得と工業生産を2倍にするという計画だそうですが、これが達成されれば、その恩恵は女性が一

番多く受けることでしょう。例えば食料品の増産ができれば、買い物の行列にも影響してきますからね。所得も上がり住宅条件も改善された15年後を想像すると、女性が全体的に暮らし易くなるだろうなと思います。有給育児休暇をさらに半年延ばすことや就学前児童施設の充足の課題も立てられており、女性にとっては他の国に見られない希望のある内容ではないでしょうか。

離婚の問題は社会主義の新しい問題と言えましょう。社会主義社会では女性が経済的、社会的に自分で生きていける条件が保障されていて、離婚の増える社会的要因というものがあります。しかしそれは資本主義社会のそれとは異なり、人間が精神的により高い文化、知的な生活を求めるゆえに起こる側面も大きいと思います。それだけに今ソ連は、より新しい家庭、より新しい夫婦・親子関係の創造を模索している段階にあると言えるのではないか。経済改革にこうした精神革命がどう伴っていくのかも興味がありますね。

――ゴルバチョフ書記長は、国民福祉の向上のために、経済・技術発展の面ばかりを追い求めてきたこれまでの傾向を批判し、精神的に向上するための福祉――住宅・食料事情、医療・スポーツの発展といった人間的な福祉に目を注ぐべきだという路線を打ち出しました。技術・経済発展ではソ連をしのぐ日本と比べてどうでしょうか？

日本は経済や先端技術の発展が世界一と言われても、子供を含め社会的な弱者の人権がないがしろにされている状態のもとで人々の心がすさみ、人間性が破壊されています。産業や科学技術の発展が環境や自然を破壊し、さらに軍事的な面に科学技術を集中させ開発しようとしている今、人間にとって産業や技術の発展とは一体何であったのかが問われてきています。そんな時に、最も重要な人間的な要素を重視したものを国の方針に据えたことは立派なことで、ぜひ実現して欲しいものです。

――書記長の報告には、居住地ごとに婦人評議会をつくり、婦人のつながりを強化しようという提案もありましたが……

地域で女性のコミュニティーを作るということは、一つの新しい自治の始まりということですから、興味がそそられますね。21世紀に、新しい社会主義的自治を作り出すその主役に、女性がなって欲しいです。

いまゴルバチョフ書記長が提起し、イメージしている21世紀がぜひ実現するよう願っています。

均衡のとれた貿易のために双方の努力が必要

――河合良一・小松製作所会長に聞く



――ソ日貿易の将来性についてどうお考えですか？

ご承知のように日本の輸出が多くてソ連からの輸入が少ない。合計が四〇億ドルちょっとになり、過去2年ぐらい日ソの貿易額がぐっとダウンしたのがここでやっと横バイに入った。横バイに入ったことは非常に結構だが残念なことに、貿易が非常にアンバランスになって、日本の輸出超過になっている。貿易を将来どんどん拡大していくためにはやはり輸出入のアンバランスを解消していくことが必要だと思いますね。それでアンバランスをどう解消するかといいますと、ソ連とアメリカ、ソ連と西欧との貿易の形態を勉強してみたのですが、対米貿易はちょっと別で、穀物だけ多く輸入して輸出はほとんどない。西欧との貿易は、ソ連の輸出超過ですが、輸出品目は石油、天然ガス、それから金属類が少し、とやっぱり原材料が多い。それに対して日本はどうかと言うと木材が一番多い。木材の次に金属類、それから石炭などの燃料の順です。それでどうやって貿易を拡大していくかというと、サハリンの石油と天然ガスのプロジェクトをぜひ妥結させて進展していくのが一番いいと思うんです。やはり輸入を増やしませんとね。ソ連の方に買って下さい、買って下さいと言っているだけでは貿易は長続きしないと思うんです。

――それに関連して、今回の党大会でソ連は国民所得を今後15年で2倍にしようという意欲的な計画を打ち出しましたが、そういうことにソ連が取り組めば、日ソ間の貿易・経済関係の強化という観点から展望が開けてくるでしょうか？

貿易もそれに従って拡大していくと思うのです。ただ問題は、さっきも言いましたが、こちらから輸出するものは工業品がたくさんありますけれど、輸入するものは何を、ということなんです。それでソ連で工業が発達すれば、例えば石油化学の工場ができれば、その中間製品を輸入できますし、いろいろ新しい品物が出て来ると思いますね。

――長いことソ連とつき合いのある小松製作所としては、貿易のパートナーとしてのソ連をどう評価していますか？

約束したことは守っていただけるパートナーだ、とそれはまず最初に言えます。何年かやって、例えば向こうの公団のやり方が分かってくればやりやすくなるのですが、そうなるまでが大変です。それからわれわれとして一番困るのは、こちらで実際そのものを設計した人、そのものを一番よく知っている日本の技術者が現場に行けないことがあるんですが、これは困ります。もう一つ、ソ連との貿易はいったん沢山の注文をいただいたかと思うと、しばらくするうちに注文がまたほとんどなくなる。つまり、5カ年計画の初めには多くて、中間は減るという一つのサイクルがありますね。

——第12次5カ年計画が始まるから今度は上向くということですね。

いま、いろいろたくさん注文をいただいています。恐らく5カ年計画の1年目に使われるのでしょう。納入を大変急がされています。率直に言わせていただければ、今次5カ年計画が始まる前から建設機械が大分必要になるというお話があったし、だいたい分かっていたことなんだから、もっと早くから準備させていただければ、という気がします。

——党大会でも言われましたが、ソ連は互恵の条件の下での国際交易の発展に賛成であり、いかなる経済制裁に対しても断固反対しています。これについてはどうお考えですか？

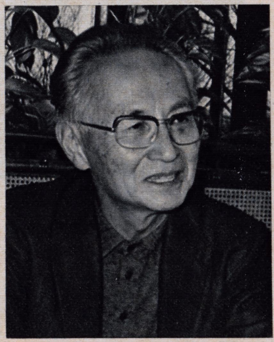
それはもう、制裁的、制限的なものはなるべく早く取り除いてもらいたいと思っています。ただわれわれの立場からいうと、政府の規則には従わざるを得ないわけです。まあ、ココムの問題ですね。町で売っているものまで輸出禁止になっているのはまことに残念な気がします。

——最後におたずねしますが、ソ日貿易関係の今後について会長は楽観的ですか、悲観的ですか？

これはなかなかむずかしい問題です。現在のようなアンバランスだと私は長続きしないと思っているんです。ですからこのアンバランスをどうやって解決していくかお互いに努力していくこと、ソ連も日本に受け入れられるような商品を開発していくこと、それも必要だと思うし、日本ももうちょっとソ連から日本に輸入できるものを積極的に探す努力が必要でしょう。そうすれば貿易関係は発達していくでしょう。

音楽を通じての相互理解を

——寺西春雄・日ソ音楽家協会会長に聞く



——ソ連国民にとって大変重要なイベントであるソ連共産党第27回大会についてご感想をうかがいたいのですが。

私にとって何よりもまずうれしいのは、私が知っているかぎり、歴代の書記長の演説の中でも今大会の書記長演説は出色で、若々しく、新鮮で、率直であり、しかも内容が豊かなことです。書記長の演説の前置きにもすでに出て来ていましたが、ソ連が革命後70年近くもたって、革命以来の歩みとロシア時代の長い歴史を踏まえながら、今新しい息吹を見出そうとしている、そういう姿勢がはっきり出ていて、その点が私にとって大変新鮮で、目新しく、うれしかった——とそう受けとめています。特に悪い意味でのマネジメントというものに陥るのを根本的に否定なさった——これはたいへん力強く、ソ連国内だけでなく、おそらく国際的にもいい影響を及ぼすでしょう。

——党大会には共産党員だけでなく、国民全体が関心をもっています。それは党大会が国民の生活、今後の運命を決定するからです。その大会が文化面で提起した問題——共産主義に向かっていくためには国民の文化の役割、意義、質が高められなければならない、つまり国民の文化の向上なしには共産主義社会はあり得ないということについてどうお考えですか？

私もまったく同じ考えです。文化とか芸術というと、この頃は何か人間の生活の中にあるものでなくて、特別なもの、例えば音楽会というと、お金を払って、ある所へ行き、その時だけ楽しむ——そういう一面が強くなってきています。それに対してこの間の演説では、文化というものは国民のあらゆる面での一つの重要な原動力であると言っている。つまり、そういう言葉すら不自然なほど生活の中にある、あるいは政治の中にある、社会の中にあるものが文化であり、芸術であると、そういうことでしょう。

——大会ではこの問題は、大衆の精神的水準を一定の文化的軌範にまで高める一方、同時に、文化そのものが一般大衆の中に入っていかねばならない——そういう二つの流れが精神的に交流し、有機的に結合されるべきだと主張されていますが……

先ほど申し上げたことと重複すると思うが、巨匠と大衆がまったく同じ言葉でしゃべり、同じ生活をするということでしょう。今までどちらかというと、巨匠とか芸術家とかいうのは特別扱い、タレント扱いされて来たが、そうではなく、そういった人も民衆と同じ生活をし、同じレベルにあるんだということ、そういったことを民衆が分かるような音楽活動が大切だということ。民衆がそうやってまず自信を持ち、それから更に自分たちが文化的に向上する——それが同時に生活あるいは社会を考える時、民衆が自力で上がっていくレベルに到達することになるんだということ。私もまったく同感です。

——ソ日両国民の文化交流、特に音楽分野の交流について、協会の活動について少し……

この間、ソ連と米国の市民がテレビで話し合いましたね。あの時も感じたのですが、国民同士がほとんど相手の実情を知らない、その素顔を知らない。日本でもそうです。戦前の悪い先入観を持っている人が多い。しかし、その先入観が正しければ、そういう国があれだけの文化、芸術を持ち得るはずはない、それを分かってもらいたい。ソ連の素顔を知ってもらうこと、それが私たちの仕事の一つでありましょう。そしてまたソ連の音楽教育、体系的な教育の素晴らしさというものをやはり日本は学ばなければならないし、また日本にもソ連にない音楽の良さというものもあるはずですから、お互いにそういうものを分かりあって欲しい。それがこの日ソ音楽家協会設立（一九八四年10月）の趣旨なんです。日本の音楽学生がソ連に留学できるチャンスが今は非常に少ない。それも将来なんとかしたい。日本のいい音楽、いい文化をソ連に紹介していきたい。

第27回党大会とソ連社会の新しい力

ソ連経済研究家　仲　弘



「二月はまがりくねった道」というロシアのことわざがある。春が来る前は世の中の動きも激しい。ソ連共産党大会が二月に開かれるのは初めてではない。二十五回大会以来ならわしになっているようである。しかも、ここしばらくソ連の経済・社会的発展は、まさに「まがりくねった道」であった。新しい発展の道に踏み出すためには、さまざまなたたかいが必要であった。すでに十年以上も前に経済改革をめざす主人公の苦闘を描いた『途上の闘い』という長編小説が評判になり、人々に読まれた。

七十年代、ソ連社会は沈滞の中にあるように思われた。しかし、これは「途上の闘い」のひとこまであった。西側の評論家たちは、「ソ連経済体制の失敗」について騒ぎたてた。実際には、これは、旧来の惰性に浸っていた人々と、それを打ち破ろうとする新しい勢力の間の一時的な均衡に過ぎなかった。

ゴルバチョフ書記長の登場は、大胆なアプローチでソ連の社会と経済の発展を図ろうとする意欲と実力のある人々が、見掛けの「沈滞」の中から、主流となって躍り出てきたことを示している。「新しいほうきはよく掃ける」とロシアではよくいうが、今、この「ほうき」は、ゴルバチョフ書記長個人ではなく、根を張った事大主義と停滞の中で全力を尽くして新しい道を求めてきた、新しい人々の力である。今回の大会の主要議題のソ連共産党綱領新稿の最初の草案は、昨年六月末の政治局会議で更に現実に見合ったものにすることが求められ、再検討され、そしてソ連国民の大衆討議にかけられたものである。この一事の中にも、「まがりくねった道」をいまソ連の新しい指導者と国民が突破しつつあるスピードと勢いをみることができる。

ソ連の国民生活にも、生産力の構造にも、経済地理にも、大きな変化が現れるであろう。困難は大きいし、失敗も避けられないであろうが、人々の闘志がそれより強ければ、ソ連の社会と経済は社会主義の利点を大きく発揮して前進するだろう。

今回のソ連共産党大会は、「人間の要素」が経済の発展を導きだすという、ソ連の社会の発展の現段階の特徴、法則性を示すものとなろうと、私は考えている。

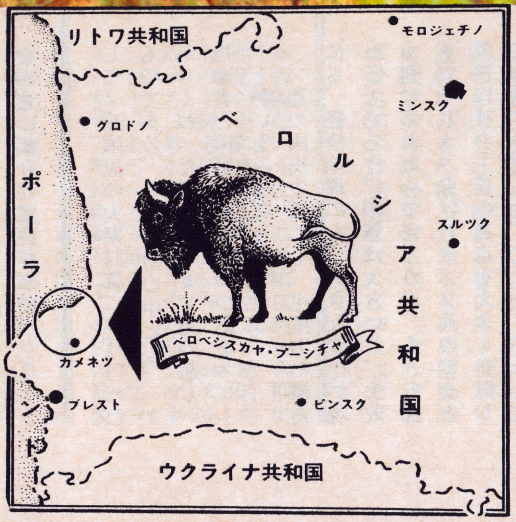
バイソンが住む森の保護区

人間と自然

本誌記者 セルゲイ・トロフィメンコ
カメラ V・ボプコフほか



ベロベシスカヤ・プーシチャには樹齢三〇〇年、高さ40m以上の欧州アカマツも見られる。



ベロルシア共和国のポーランドとの国境沿いに広がるベロベシスカヤ・プーシチャは、世界で最初の自然保護区の一つ。キエフ公国のウラジーミル・モノマフ大公（一〇五三―一一二五）がここで狩猟をしたという記録が残っている。現在、この自然保護区の総面積は一三万ha以上。そのうちの約$\frac{2}{3}$はソ連に、$\frac{1}{3}$はポーランドに属している。13世紀、ベーラヤ川とレスナ川が合流する地点に、白い石造りの望楼のある要塞が置かれた。そこでベロ（白い）ベシスカヤ（小屋の）・プーシチャ（密林）の名が生まれた。

この森についての今日まで残っている最初の記述は16世紀にさかのぼる。17世紀末、ここはヨーロッパ・バイソン（野牛）が住む世界で唯一の場所になってしまった。一七九四年、ベロベシスカヤ・プーシチャはロシアに編入され、一九三九年にはソ連の一部になった。一九四〇年、国立自然保護区に指定され、一九五七年に自然保護・狩猟区に変更された。現在、ソ連側の自然保護・狩猟区の面積は八万七七六〇ha、そのうち七万六四〇〇haが森林、二二〇〇haが草地、二九八haが水面である。

初めてここへ来た人は、風景の多様さにびっくりする。薄暗いトウヒの林があるかと思えば、明るいアカマツの林があり、さらにそれがまだらなシラカバ林に変わる。巨大なカエデやトネ



森林内で実習する学生



自然保護・狩猟区「ベロベシスカヤ・プーシチャ」の自然博物館

ベロベシスカヤ・プーシチャは何百年もの間、ロシアの皇帝たちのお気に入りの猟場で、ヘラジカ、シカ、イノシシ、とりわけバイソンが乱獲された。この写真は革命前の狩猟の乱獲ぶりを伝えている。



リコ、15階建てのビルほどの高さがある樹齢七〇〇年ものカシも見える。東欧に典型的な植物相である。ここでは53種の哺乳類、一二一種の鳥類、24種の魚類、7種の爬虫類、11種の両生類、昆虫にいたっては八五〇〇種以上が記録されている。

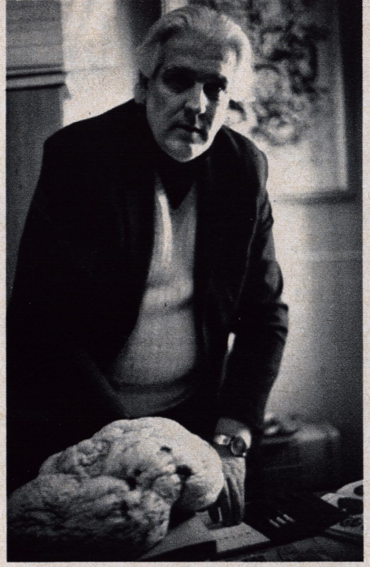
私たちが森の中を歩いたときだけでも、トウヒの枝の間にオコジョが姿を現し、ヘラジカが前方を横切った。

自然保護区長のセルゲイ・バリュクは言う――「ここの見ものはヨーロッパ・バイソンです。バイソンは現在ではヨーロッパでいちばん大型の動物で、不格好な外見にもかかわらず、走るのは速く、泳ぎも上手で、沼地のぬかるみも渡ります。この大型の野牛はものすごいパワーがあり、歩きながら森の下枝や低木を折り、怒り狂うとひと抱えもある木さえ倒してしまいます。原生林の中で生きるすばらしい能力は、大気中の水分がまだ広々とした野原に吸収されず、樹木も切り払われておらず、沼地も干上がらず、バルト海の水位もいまより高く、そのおかげで水量豊かな大河がこの地方を網の目のように縦横に流れていたときの名残りです」

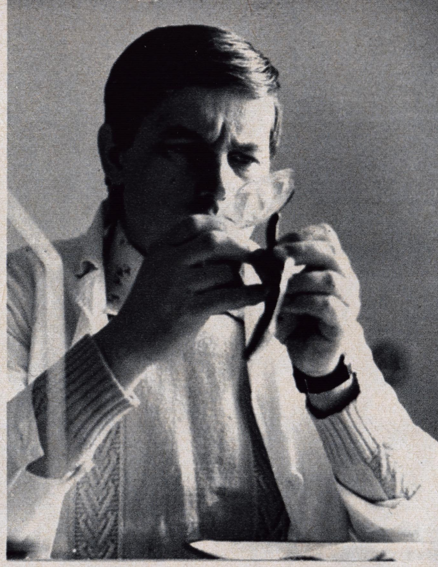
ベロベシスカヤ・プーシチャは自然を知る目安であるだけではなく、一種の野外実験室でもある。ここで行われている研究の主要な方向は、混合林の植物相および動物相の保護と再生、バイソンを繁殖させる方法の研究である。

今世紀初頭、ヨーロッパ・バイソンは世界じゅうで数えるほどしかおらず、本来ならば絶滅するところだった。一九一七年の10月革命までベロベシスカヤ・プーシチャが自然保護区だったのは、それが皇室の所有地であり、貴族の猟場だったからにすぎない。バイソンは容赦なく撲滅された。一回の猟でバイソンが28頭も殺された例が知られている。地主制ポーランドの支配と第2次世界大戦時のファシスト・ドイツによる占領はベロベシスカヤ・プーシチャをバイソンにとって破滅的な環境にした。

自然保護区の職員たちは、バイソン保護という重要な問題を解決するために学者たちと協力した。この問題はいまでは解決されたと考えられている。バイソンの数はまだそれほど多くはないが、ゆっくり増えつづけている。

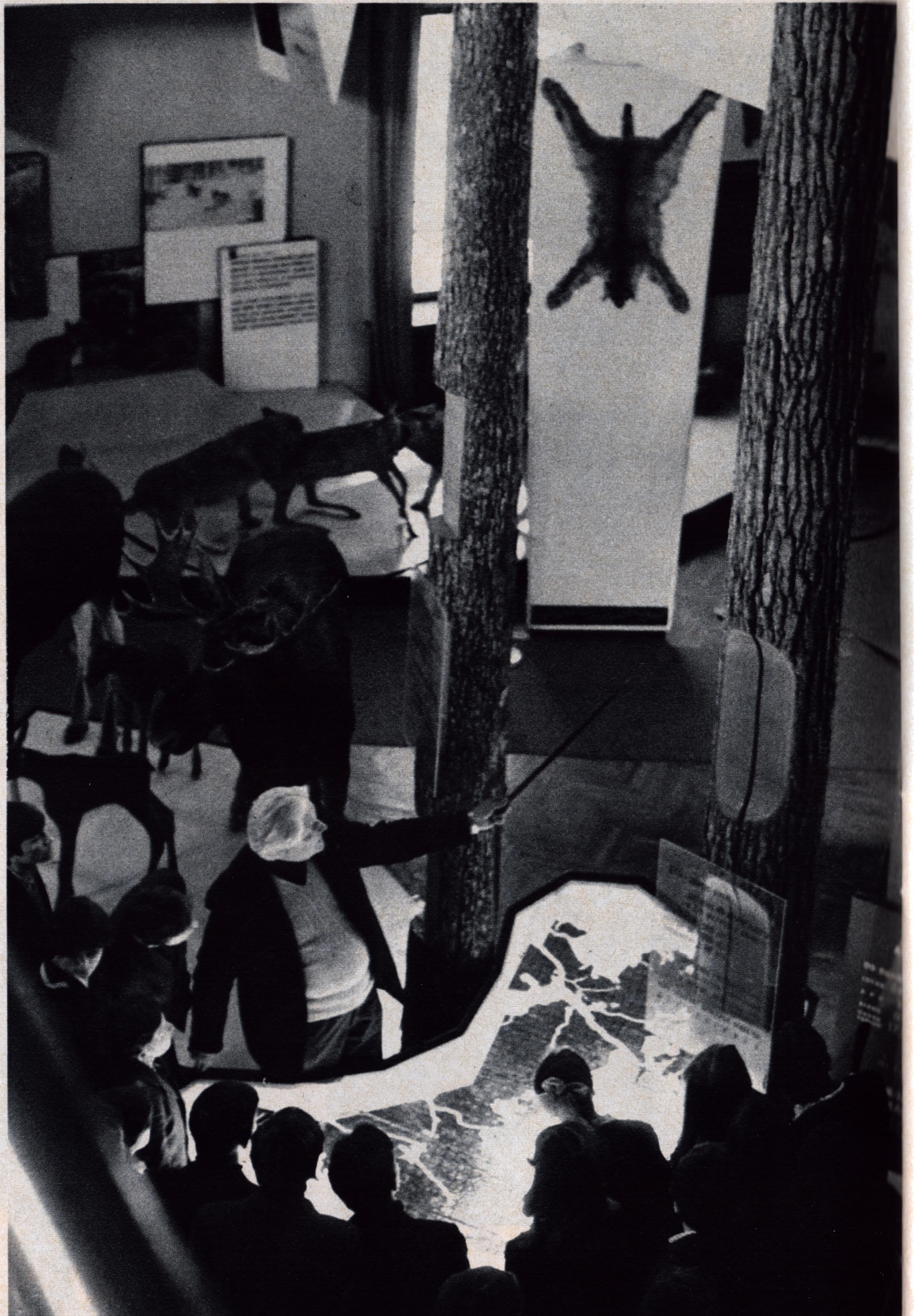


きのこを研究するパーベル・ミハイロビチ



ここで両生類と爬虫類を研究する動物学者のビクトル・バハレフ

下 自然保護区の職員たちは自然保護の宣伝に力を入れており、講演会やセミナーを開いたり、ラジオ・テレビに出演している。写真は付属の自然博物館を訪れた生徒たちに説明する職員。



セルゲイ・バリュク自然保護区長は言う――「ここの養殖場にはバイソンが一三〇頭いますが、一頭ずつ名前と番号が国際バイソン保護協会の台帳に登録されています。生き残っていたヨーロッパ・バイソンをアメリカ・バイソンと交配することによって、絶滅から救うことに成功しただけではなく、頭数を次第に増やすことにも成功しました。やがて自然保護区内では生息密度が高くなったので、バルト海沿岸、ウクライナ、カフカズなど他の地域にも順次移しています。現在、わが国にいる総数は七〇〇頭を超えます」

ベロベシスカヤ・プーシチャには、やはり世界的に貴重な野生馬タルパンもいる。かつてこの野生馬はヨーロッパ各地で飼育されていたが、19世紀末にはポーランドのルブリン州の野生動物園で保護されているだけになってしまった。一九二一年にポーランドの馬



冬の森でエサを探す小鳥たち



◀ここにはオオカミもいる。



クロライチョウ

森の中で出会ったイノシシ





ベロベシスカヤ・プーシチャを代表する動物——ヨーロッパ・バイソン

この森には合計53種の哺乳類が生息している。



の調査が始まったとき、その中にあまり大きくない、ずんぐりした、全体に明るい灰色で、肩と足に黒っぽい縞のある馬がいることが分かった。これは古い血統を示すものだった。この馬は力が強く、働きもので、軽快で、走るのが速かった。動物学者たちは選抜法によって種を復元した。現在、タルパン馬はまだ完全に純血種ではないが、ベロベシスカヤ・プーシチャの飼育場に群れをつくっている。



自然保護区の中をパトロールする監視員



▶ヘラジカはこの森の中で最もよく見かける動物の部類に入る。

給餌場に集まってきたイノシシ



こうして、大昔この地域に住んでいたが姿を消してしまった動物が、徐々に復元されつつある。それは、自然が破壊から守られるのは、ただ自然がすばらしいから、あるいは自然なしでは暮らせないからという理由で人間が自然を少しでも愛している場合に限られる、という単純な真理を裏付けている。

草の陰からのぞくウズラの巣



科学技術

新世代の冶金

ソ連科学アカデミー冶金学研究所長
ソ連科学アカデミー準会員
アナトリー・マノーヒン

新しい生産技術による金属の再利用は、ソ連の冶金工業で近年広範に発展した主要方向の一つである。進んだ工程の導入によって、原料資源の採掘を縮小することができるだけでなく、エネルギー資源の消費も著しく減らすことができよう。

たとえば二次原料からマグネシウムを1t生産するのに要するエネルギーは、鉱石原料から同じ1tを得るのに要するエネルギーの$\frac{1}{36}$ですむ。アルミニウムではこのような支出は$\frac{1}{20}$、ニッケルでは$\frac{1}{10}$、亜鉛では$\frac{1}{4}$ですむ。しかも金属の生産費は増える傾向にある。天然の原料が乏しくなり、その採掘と加工のためのエネルギー支出がますます多くなっているからである。

ソ連科学アカデミー冶金学研究所の専門家たちは科学・生産合同「ツーラチェルメト」の冶金学者たちと共同で、一連の優秀なくず鉄加工装置を開発した。その一つが事実上廃物を出さずにくず鉄を加工できる転炉である。この設備は上吹きと底吹きの組み合わせ送風を行い、くず鉄の質と量に応じて生産条件を能率よく変えることができる。このくず鉄改鋳用転炉は極めて高い生産性を持っている。この転炉の利用は、大きなエネルギー支出と低い生産性を特徴とする電気炉での通常のくず鉄加工よりもはるかに有効である。西独のクルップ社がこの転炉のライセンスを買い付けた。マンネスマン社（西独）や日本の商社との商談が行われている。

冶金業におけるもう一つの重要な方向は、鉱石と精鉱の総合的な利用である。自然界には鉄だけの鉱石、非鉄金属だけの鉱石はない。鉄鉱石は非鉄金属や希金属を含み、非鉄金属鉱石には通常鉄や希有元素が含まれている。ソ連における原料の総合利用の一例は、チタン・マグネシウム工業である。今日ソ連で生産される高級チタンはチタン鉱からだけでなく、低品位原料からも生産されている。低品位チタン含有鉄鉱から人工チタン酸塩——チタン生産用の最高級原料が得られる。貧鉱からタングステン、フェロチタン、フェロニオブ生産用の原料を得る技術も開発された。

周知のように、新しい進歩的な工程——鋼の連続鋳造法の開発によって、鋼の質を高め、ロスを減らすことができた。この方法が初めて英国のベッセマー（一八一三—九三）によって提唱されたのは、前世紀のことである。この構想を〝金属で〟実現するために一〇〇年かかった。実現したのはソ連の専門家たちだった。最初の水平型の連続鋳鋼装置はソ連で開発され、この方法は世界の製鉄業に広く普及した。

連続鋳造法では良品歩留りは98%に達し、ロスは最小限度に切り詰められている。従来の鋳造法では精々70%しか得られない。

金属の節約法や冶金生産の改良について話すなら、粉末冶金に触れないわけにはいかない。粉末冶金の一般的特徴は、原料の消費が相対的に少なく、一次生成物から出る廃物の比率がごくわずかなことである。金属粉末から部品をつくるのに要する金属は、同じ部品を圧延材で作った場合に比べ$\frac{1}{2}$以下の重量ですみ、しかもその製品の耐用年数はずっと長い。粉末冶金は、部品の製造のさいに労働支出の60%までを占める機械加工をほとんど完全に取り除く。そして機械加工に代わって自動化プロセス——圧縮成型と焼結が用いられている。

第二の事情も恐らくさらに一層重要である。粉末冶金の方法で、全く変わった材料を得ることができるのだ。調節可能な気泡のある金属、他の諸物質とともに構造的に一体化した異種金属——いわゆる複合金属がすでに開発されている。ある金属を他の金属に〝染み込ませる〟ことさえできる。

粉末冶金法による高速度切削工具の製造はその寿命を2—3倍高め、さらに材料一〇〇〇t当たり50tの、不足しているモリブデン、タングステン、コバルト、バナジウム、クロームを追加的に節約することも可能にしている。

粉末冶金製品は機械工業、電子工業、無線工業、電機工業などで今後大いに利用されるようになろう。その将来性は大きい。

最初のソ日合作アニメ映画

本誌記者　アレクサンドル・ファジェーエフ



本誌記者のインタビューを受ける小森徹ライフワーク社長

ソ連と日本の映画人の映画製作面の協力は、これまですでにめざましい成功を収めてきた。『小さい逃亡者』、『モスクワわが愛』、『甦れ魔女』（原題『メダルへの道』）は、ソ連映画ファンはもちろん、日本のファンもよく覚えているだろう。とくに『デルス・ウザーラ』はアメリカ映画芸術科学アカデミーの最高賞であるオスカー賞さえ受賞した。

昨年12月20日、全ソ合作映画公団（ソフインフィルム）、モスクワの「ソユーズムリトフィルム」（アニメ映画）撮影所と日本のライフワーク、AIST両社との間で締結された契約は、映画分野の実り多いソ日協力の新しい発展段階を開いた。この契約によって初のソ日長編アニメ映画が共同製作される。

合作アニメのプロデューサーの小森徹ライフワーク社長と「ソユーズムリトフィルム」撮影所のドミトリー・ゾートフ所長は製作予定の合作アニメについて、本誌記者に次のように語った。

小森氏——「ソ連のアニメ映画の成功は広く知られている。われわれも日本で主にテレビ向けの多くのアニメを撮っている。われわれは日数をかけずに手早くアニメを作っているが、必ずしも出来がよくない。逆にソ連の方は製作日数はわれわれよりも長いが、その代わり出来はよく、真の映画芸術作品といえる芸術性の高いものがつくられている。われわれは皆で力を合わせてよいアニメを作ろうと申し出た。一番手間のかかる動画を書く作業はソ連の〝ソユーズムリトフィルム〟撮影所で行われ、音声を入れる仕事とフィルムの現像、焼き付けなどの主な技術的作業は日本で行われる。この共同製作を通じてわれわれは、ソ連のアニメ映画作家の仕事を知ることができよう。

このアニメは9—10歳の学童向けであるが、この位の学童は映画を見るとき大抵父母同伴であるから、子供以上に大人も面白いと思うものをつくりたい」

ドミトリー・ゾートフ所長——「日本のアニメは一種独特であり、表現が豊かで、その表現には芸術的、技術的特徴がある。そもそもアニメ映画は監督、カメラマン、美術担当者などのスタッフの繊細な独創的手法と熱のこもった見事な仕事の結晶である。われわれは日本のアニメ映画が国際アニメ映画祭で何度も受賞したことを知っている。

ソ日合作アニメ映画をつくる話を持ち込んだのは日本側である。われわれはソ日双方に最も受け入れやすいアニメのテーマをいろいろと審議した結果、動物をテーマにしたものを選ぶことに決めた。こうして子供のペンギンが主役にきまり、ビクトル・メレシコ、多地映一氏の脚本により、題名は一応『小さなペンギン　ロロの冒険』ということになった。このさき骨の折れる長い製作作業にとりかかることになり、第一部の製作が終わるのは、ことし7月の予定である」

ソ日アニメ映画人の協力が、劇映画部門のときと同じく大きな成果をあげることを期待したい。

話題を拾う

薬局博物館





13世紀末にはもう商業、経済、文化の中心地として栄えていた西ウクライナの大都市リボフは古い町並みを残す美しい都市だ。このまちの17世紀の建築記念物でもある薬局博物館には〝若さの霊薬〟、〝長寿ドリンク〟など一風変わった名前のついた薬がガラスケースの中に陳列されている。しかもながめるだけでなくお金を出せば売ってもらえる。こんな薬が違和感もなくスッポリ収まっているというのも、これが250年もの長い歴史を持つ薬局のせいだろう。六つの部屋と地下室に2000点以上の陳列品が並び、それを順次追っていけば、薬局の発達の歴史が一目で分かる。処方全書、宗教改革以前の家庭用医学書、薬学辞典、中世ヨーロッパ諸国で薬剤師が使っていた植物標本集など書籍だけに占領された部屋もある。年間10万人以上の来館者があるが、現在建設中の別館が完成すれば、もっと大勢の来館者を迎えられるだろう。別館では歴史的な陳列品だけでなく、現代の薬局で使っている道具も公開される。

木工細工で第二の人生を

おとぎばなしの木彫りの小箱のようなこの素敵な家は、アルマアタ市（カザフ共和国の首都）に住む年金生活者ミハイル・シーシキンの手づくり。さすが現役時代（運転手、機械工）からのベテラン日曜大工だけのことはある。クルミ材を使った手づくりの木工家具のインテリアは見事なもの。エクステリアは年金生活入り後の制作で、助手は孫のセリョージャ。





バルト海の無人原子力燈台

パワフルな原子力電池、予備のディーゼル発電機、波力をエネルギー源とする霧笛など最新のソ連の光学・無線技術でカバーされた世界最大の無人原子力燈台がバルト海の難所の一つ、サーレマ島とコルカ岬を隔てるイルベンスキー海峡の入り口に建設された。14階建てで高さ53mの燈台は、建設にも技術の粋が駆使され、まず海中に巨岩と砕石でがんじょうな〝台床〟が築かれ、その土台の上にタリン（エストニア共和国の首都）の工場で作られた重さ5000ｔの８面体（塔は高さ12m）が据え付けられた。これはタリンからイルベンスキー海峡まで200マイルの海路を曳航されてきたもの。据え付けにはヘリも動員された。今やこの無人燈台が航海の安全を保証している。



ことし出版予定のソ連の日本関係図書

ことしもソ連の読者は例年どおり、日本の様々な生活面を紹介した沢山の本を手にする。その中にはソ連の専門家が書いたものもあれば、日本人自身（14世紀初めの後深草院二条の『問はず語り』から現代の経済学者奥村宏氏まで）の手になるものもある。

ソ連には中央と地方の出版所、一般向けと専門家向けの出版所、児童もの出版所や大学の出版所など、合わせて二〇〇以上の出版所があって、ソ連と世界の一五〇の民族語で年間八万点以上（総発行部数二〇億部）の本を刊行している。

ではことし、ソ連でどのような日本関係の新刊書が出版されるのか？　出版予定の本をテーマ別に並べ、簡単にご紹介することにした。ことわっておくが、ごく狭い分野の専門書（たとえば「ミール」出版所から出る日本の著名な数学者白鳥正樹、三好俊郎、松下久雄共著『数値破壊力学』など）は割愛する。

参考図書

政治図書出版所の参考図書——『世界の国々』（発行部数三〇万部）、『政党』（三〇万部）、『国際年鑑』（一〇万部）には、現代日本に関するさまざまな情報がかなり沢山掲載される。またいろいろな問題の概観的論文と並んで、日本の実にさまざまな生活面に関する参考資料や事件日誌が載る。

さて、日本関係の近刊予定書としては、『二つの体制の経済競争——社会的、経済的諸問題』、『世界の革命過程における労働者階級』、『現代世界における労働組合』、『ソ連の対外経済関係』などがある。

歴史、政治、経済

学術書専門の「ナウカ」出版所関係では——

▽A・メシチェリャコフ著『古代日本——仏教と神道（神仏混こうの諸問題）』、二五〇ページ、一万部。

▽S・パスコフ著『中世初期（7—12世紀）の日本』、三五〇ページ、五〇〇〇部。

▽『ソ連と日本の歴史学者の研究におけるロシアと日本』——これは一九八三年11月にレニングラードで開かれ、露日関係の問題を討議した第7回ソ日歴史学シンポジウムの報告集。五〇〇〇部。

今日の日本を扱った本の中で、まず挙げておかねばならないのは、年鑑『日本—85』（二五〇〇部）。日本の現在の経済、政治、文化、科学の諸問題の研究成果が四〇〇ページにわたって掲載されている。

現代日本の政治、経済をテーマにしたその他の今年度の主な新刊予定書（特に指定のないものは「ナウカ」出版所）は次のとおり。

▽A・ミハリョフ著『一般社会学理論における現代日本社会（非マルクス主義的概念の紹介）』（一五〇ページ、五〇〇〇部）

▽Y・ベレジナ著『日本——科学技術進歩の社会的結果』（三〇〇ページ、五〇〇〇部）

▽B・ドブロビンスキー著『日本経済　一九七〇—一九八三年』（二五〇ページ、三〇〇〇部）

▽I・レベジェワ著『日本工業の構造的変化』（二〇〇ページ、三〇〇〇部）

▽V・ポポフ著『日本の農村の社会・経済構造の形成』（三〇〇ページ、二〇〇〇部）

▽Kh・エグラウ著『巨大企業の闘い。欧州・米国・日本の経済競争』（「プログレス」出版所、三〇〇ページ、一万五〇〇〇部）

▽A・ボガツーロフ著『原料・燃料資源獲得闘争での日本外交（一九七〇—八〇年代）』（三〇〇ページ、五〇〇〇部）

▽I・チホツカヤ著『現代日本の原料問題』（二〇〇ページ、三〇〇〇部）

▽A・アバネソフ著『日本——エネルギー問題解決の探求』（「国際関係」出版所、一五〇ページ）

▽M・クルピャンコ著『日本と中国——経済協力のメカニズム』（二五〇ページ、三〇〇〇部）

▽奥村宏『日本の六大企業集団』（「ムイスリ」出版所）

文芸図書

「ナウカ」出版所から『万葉集抄』（一万五〇〇〇部）、後深草院二条の『問はず語り』（三万部）が出る。

「文芸図書」出版所は谷崎潤一郎の生誕一〇〇周年を記念して2巻本の『選集』（『痴人の愛』と『細雪』などを収める）を出版する。各巻とも発行部数は七万五〇〇〇部。「ラードゥガ」出版所から出る川端康成『選集』（五万部）には既刊の『山の音』、『古都』、『伊豆の踊子』のほか、ロシアの読者に初めて紹介される中編『みずうみ』や晩年の短篇数編が収められる。

芸術

ことし「クニーガ」（図書）出版所から『図書芸術史』シリーズの一つとして、8—19世紀の日本の写本と印刷物を物語るE・ザワドスカヤの研究書『日本の図書芸術』（一万部）が出る。

「オーロラ」出版所から出版される『エルミタージュ博物館所蔵の日本の浮世絵』（三〇〇〇部。38×51・5㎝、16枚。帙入り）は60ルーブルと高く、もっぱら美術愛好の収集家向けである。

同じ収集家向けだが、歌麿の『お染』の絵はがきが手頃な値段（5コペイカ、二万五〇〇〇部）で発行される。この絵はがきは「モスクワ・プーシキン美術館の至宝」シリーズの一つ。

モスクワの「芸術」出版所から出る『17—19世紀の日本の芝居絵』（二万五〇〇〇部）の著者E・セルジュークは、歌舞伎の美学の立場から鑑賞用の版画だけでなく、ポスター類の版画も論じている。

同じ「芸術」出版所のレニングラード部からM・ウスペンスキー編のアルバム『根付け』（二五〇〇部）が出る。

「芸術」出版所から出るインナ・ゲンス著『挑戦。一九六〇—七〇年代の日本の映画監督』は、大島渚、吉田喜重、今村昌平、勅使河原宏、熊井啓、浦山桐郎、森川時久、山田洋次などの新世代の日本の映画監督の作品を論じたもの。

言語学

モスクワ大学出版所から新しい日本語の教科書が出る。著者はI・ゴロブニン、発行部数は五〇〇〇部。

「ナウカ」出版所から『日本言語学の当面の諸問題』（五〇〇〇部）が出版される。

「ロシア語」出版所からは『和露化学工学辞典』（四万語）と『露日会話集』（二〇〇〇語、二万部）が出る。

札幌で二つのソ連写真展





上　柴野理事長（左）の案内で写真展を見るオコニシニコフ総領事（写真提供＝北海道日ソ友好文化会館）

下　民族衣装や民芸品も飾られた「今日のソ連」写真展の会場（写真提供＝北方圏センター）

ソ連共産党第27回大会開催を機会に、ソ連の現状と今後の発展への理解を深めようと、札幌市の北海道日ソ友好文化会館が写真展「発展するソ連のすがた」を同会館ホールで開催した。

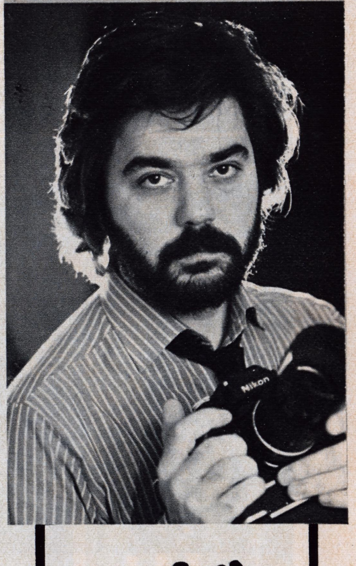
初日の2月21日には写真展開催に協力した在札幌ソ連総領事館のオコニシニコフ総領事夫妻らが会館を訪問、柴野理事長の案内で展示を見たあと、懇談した。その中で総領事は、「ソ連の現状を紹介し、新たな5カ年計画に向けて積極的に取り組んでいるソ連国民のすがたを一人でも多くの日本人に知ってもらう機会を作っていただいて感謝している」と述べた。柴野理事長は「両国民の相互理解と友好関係増進のためには、このような写真展は効果的な手段の一つと思うので、今後もどしどし開いていきたい」と語った。

◇　◇　◇

これとは別に2月25日から3月12日までの16日間、札幌市の北方圏センター展示室で写真展「今日のソ連」が開催された。この写真展は日ソ両国の友好と交流をより一層促進することを願って、北方圏センター、在札幌ソ連総領事館、北海道日ソ友好文化会館が共催したもの。開会式では長谷部純雄・北方圏センター事務理事、オコニシニコフ総領事が「写真展を通して多くの道民の方々に隣国ソ連への理解を深めてほしい」とあいさつ。テープカットには山中洋・北海道総務部知事室長ら関係者が加わり、写真展のオープンを祝った。

どん欲な写真家ビャトキン

本誌記者　アンドレイ・バタシェフ



本誌の読者ならノーボスチ通信のカメラマン、ウラジーミル・ビャトキン（35歳、写真）の名をご存じだろう。カメラ・ルポもしばしば掲載されているし、昨年の本誌ソ日共同取材シリーズ「ソ連の学校教育――伝統と改革」では、日本の柴田義松・東大教授、フェリクス・プラテ記者に同行し、ザカフカズとバルト海沿岸の共和国の教育現場の写真を撮ったカメラマンとしておなじみのはずだ。

このわれらのビャトキンが、ここのところ外国の写真コンクールで受賞づいている――昨年の秋北京のスポーツ写真展で作品「しなやかさ」が1位に、アムステルダムの第19回国際写真コンクール〝ワールド・プレス・フォト85〟では「護衛」が金メダル、組み写真「外科医の両手」が〝ゴールド・アイ〟賞に輝いた。私たちはビャトキンを〝身内〟と思っているので喜んでこのニュースを読者の皆さんにもお知らせし、その作品を紹介することにした。

ウラジーミル・ビャトキンは他の多くのカメラマンと違ってほとんどいつも急いだことがない。しかも時にはどんなにせかされてもわざとゆっくり仕事に時間をかけているように見える。

でも彼にはこうしか出来ないのだ。なぜならビャトキンの基本原則は、被写体をまず最初に出来るだけよく研究し、被写体の職業を細部にわたって徹底的に理解し、被写体の内的世界に入りこみ、そして可能な限り被写体と友人になる――そうして初めてカメラに向かう。そのために多分、ビャトキンの写真には外見的表情だけでなく、また、被写体の内面状態への理解（これ自体すばらしいことだが）だけでなく、被写体のカメラマンに対する関係がしばしば写し出されているのであろう。この写真家と被写体との間の相互作用がビャトキンの作品に特別の緊張感、豊かな情感と気分を与えるのであろう。

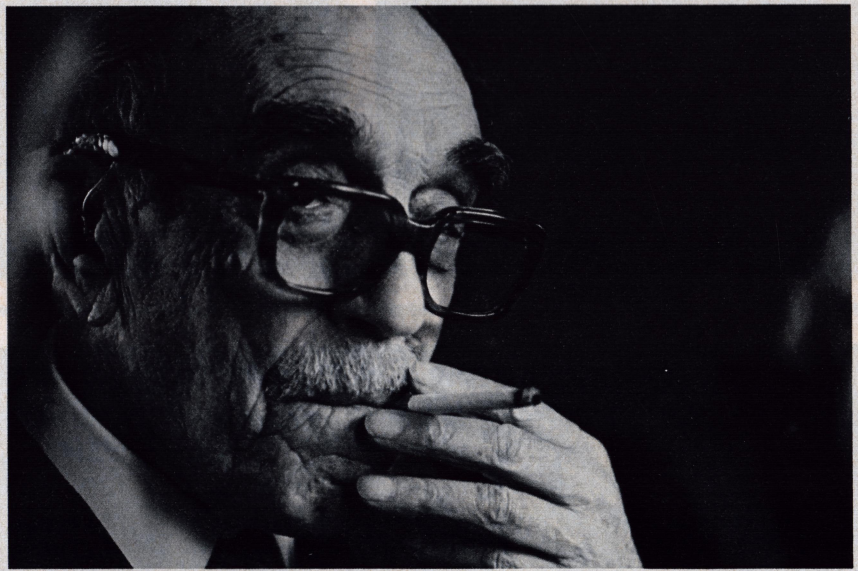
組み写真「グラン・バレエの舞台裏」がいい例だ。ビャトキンはこのシリーズを撮ろうと決心すると、バレエダンサーたちの驚くのをしりめに、一年半の間、バレエのレッスンやリハーサル、公演に通いつづけた。どういうわけかたった5―6枚の写真を何としても撮れないこの変なカメラマンは、しまいには、みんなの同情を誘うようになった。だがビャトキンがバレエダンサーを徹底的に研究しつくしたと思う、その時が来た。彼は特別の撮影許可を得て、延々6時間もバレエダンサーたちに踊りを強いた――何カ月もの間に彼の想像の中で〝成熟した〟数枚の画面がカメラにとらえられるまで……。

「そのためかダンサーたちといい友達になりましたよ。もっともそうなる前には〝ビャトキン、あんたなんか大嫌いよ！〟と何度も言われたものですが……」――ビャトキンは思い出を語る。

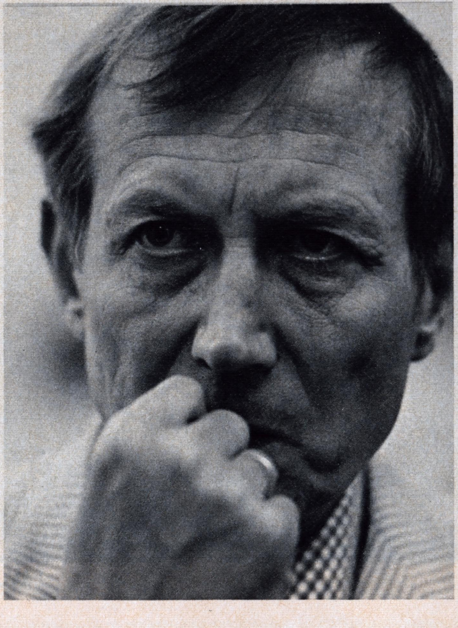
もっともフォト・ジャーナリストは



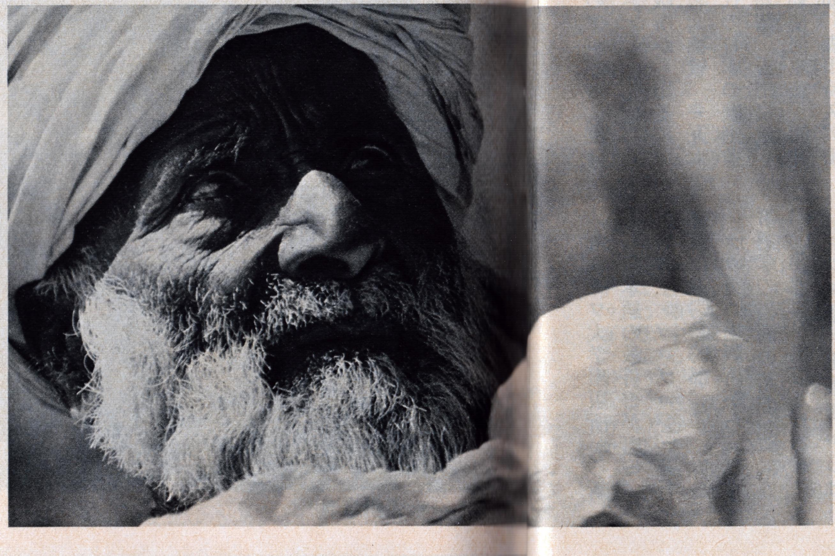
「舞台のベテラン――マールイ劇場（モスクワ）の老優たち」



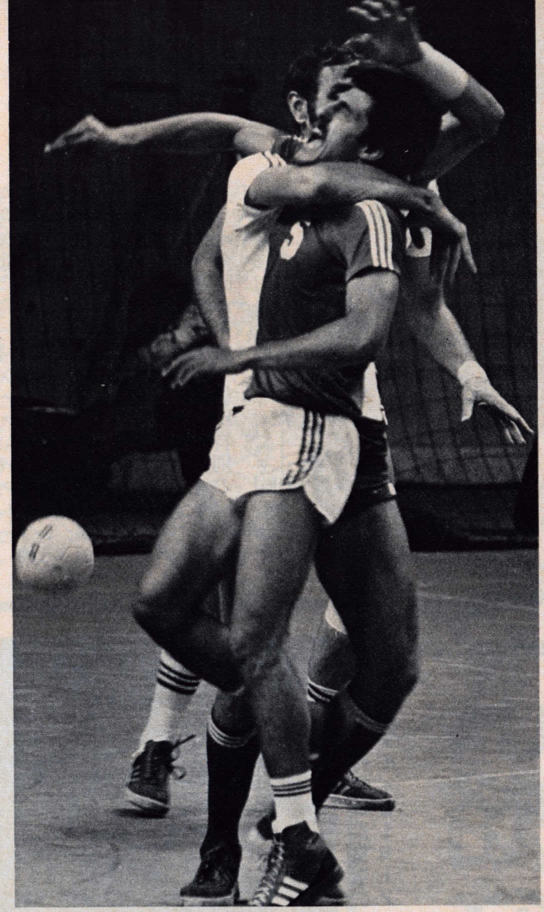
「ノーベル化学賞受賞者のアカデミー会員ニコライ・セミョーノフ」

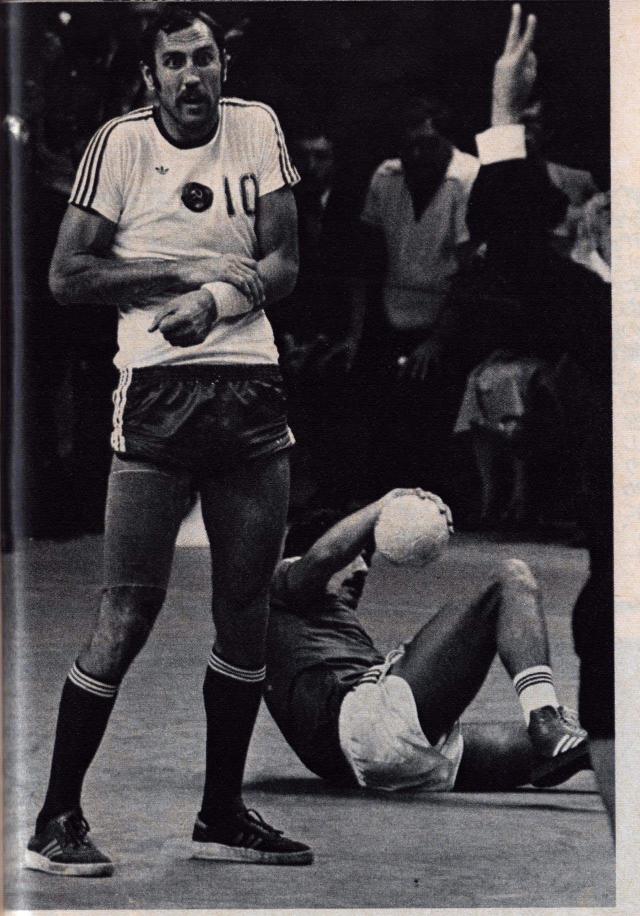


「詩人エブゲニー・エフトゥシェンコ」



「アフガンの老人」

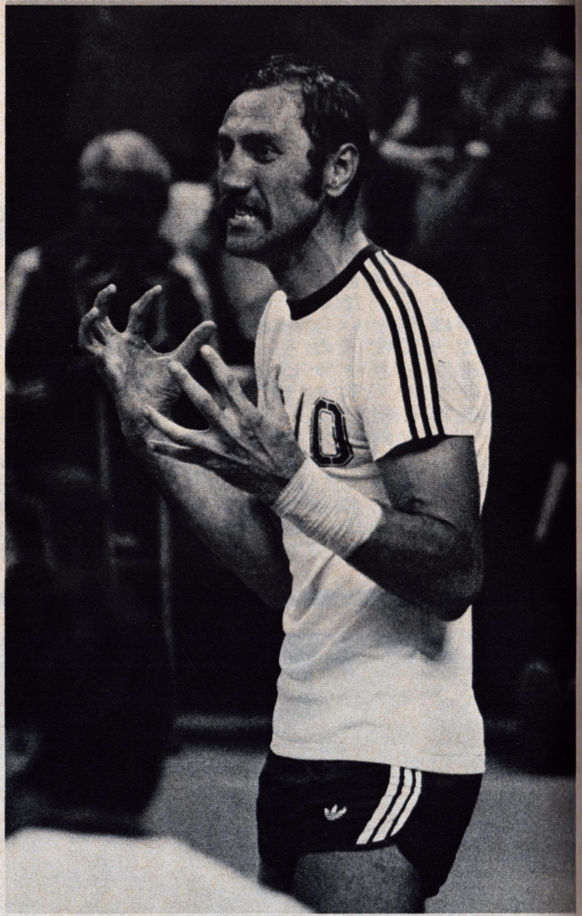


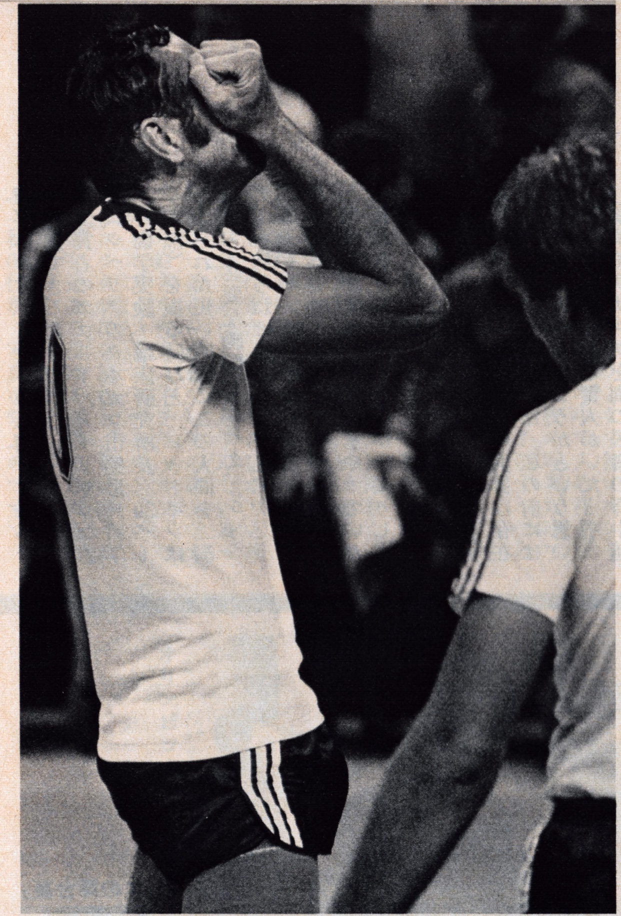


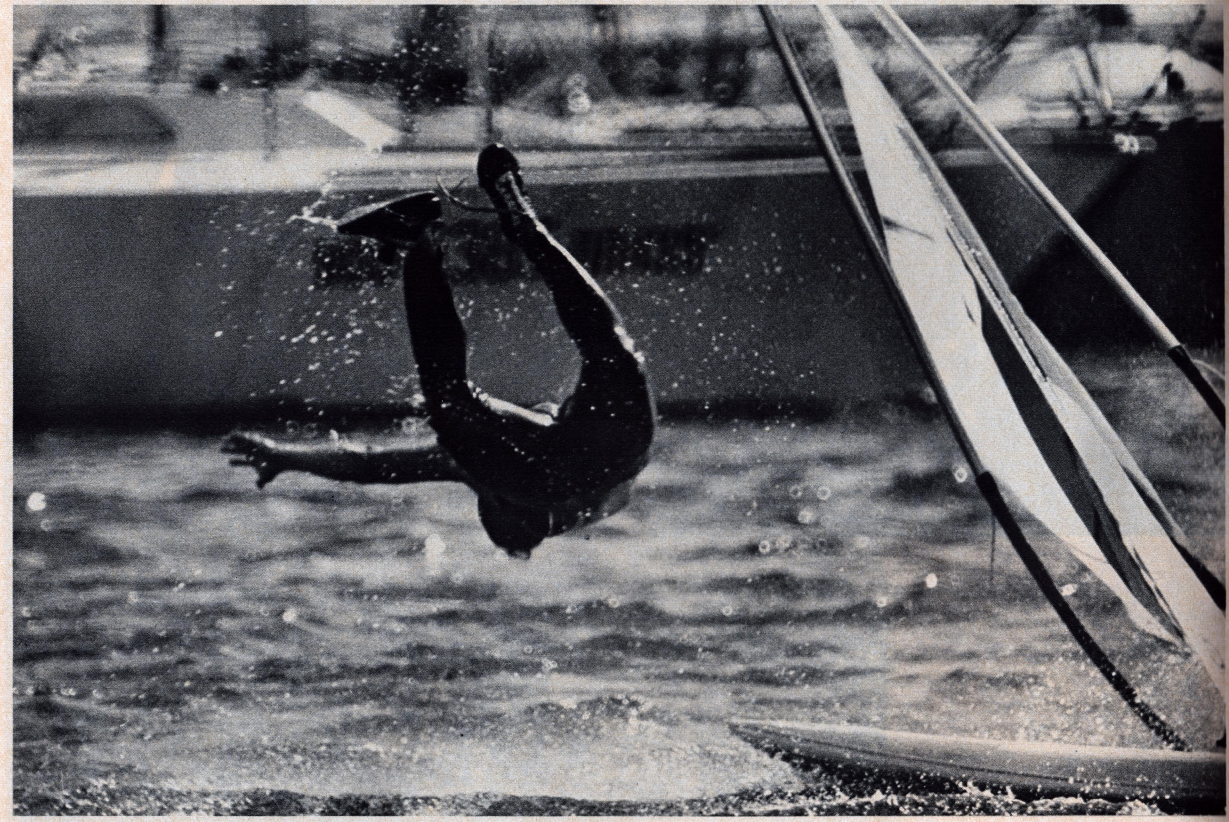
「退場はすなわち負け」



「熱い試合」







「片意地なボード」

被写体のすべてをいつも何カ月もかけて研究できるわけではない。レーニン賞受賞者のガブリール・イリザロフ教授（シベリアのクルガン市整形外科学・外傷学実験・臨床研究所長、30ページ参照）を撮る時など、ビャトキンは与えられた短い時間にこの人間を〝洞察し〟、必要な瞬間をとらえ、シャッターを切らねばならなかった。

ビャトキンはその時のようすを次のように語った――「イリザロフは医者と患者に囲まれて相談会をやっていた。入れ替わり立ち替わり人が出入りし、質問し、既往歴を語った。だがイリザロフがいったんレントゲン写真を手にとり、じっと目をこらすそのようすを見ていると、もはや周りの世界は存在しないかのように見えた。私の前にはどうやって人を助けようかという思いにとらわれた善良な賢人がいた……

私はイリザロフを別の医者の背中越しに撮ったが、シャッターの音が霊感を受けたように集中しきっているイリザロフの表情をこわしてしまうのではないかととても恐れた、だが運がよかった。この大勢の人の中で、自分自身と向かい合っているイリザロフを撮れたのだ……」

つけ加えると、モスクワの〝インタープレス・フォト85〟展でこの作品は金メダルをとった。

ウラジーミル・ビャトキンについて〝生まれながらのカメラマン〟という表現はできない。中学校時代は水球をやり、ラッパを吹き、絵画や歴史に夢中になった。写真をまじめな仕事として考えたことは一度もなかったかも知れない。あるいは運命のいたずらだろうか、中学校卒業後モスクワ大学史学部を目ざしたビャトキンだったが入試



「デュエット」

「グラン・バレエの舞台裏」



に失敗、その年にノーボスチ通信社に就職し、写真情報編集部の助手見習いとして働き出したのである。

かつてビャトキンは絵を描こうとしてどうしても思うようにかけないもどかしさを感じたことがある。ノーボスチ通信社のカメラマンたちの作品に接し、ビャトキンはハッとした。もしかするとカメラを使えば、かきたい絵をかけるかも知れない。暇をみつけては美術館に足を運んだ。そのあとは写真を撮りまくった。前世紀の肖像画家たちの表現力豊かな筆づかいを模倣しようとつとめた。ある時ビャトキンの写真がソ連有数の写真芸術家であるワシリー・マルイシェフの目にとまり、弟子にならないかと誘われた。それ以来、この高名な写真家の下で修業をつづけながら、ビャトキンはもう10年以上も一人前のカメラマンとして働いている。

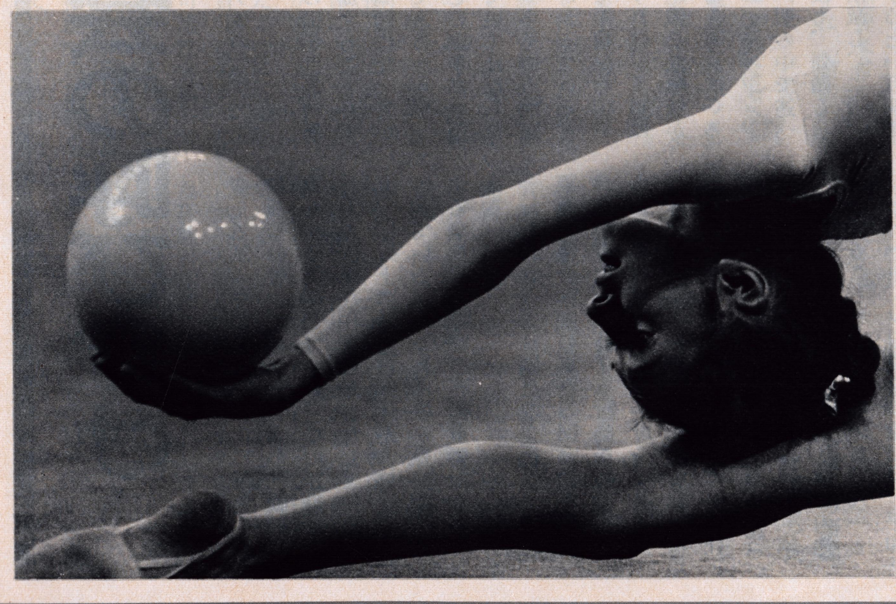
ビャトキンの作品の中で人の注意を引きつけるのは一枚一枚の写真だけではない。ドラマトゥルギーのすべての法則に従う大量の写真をモンタージュした、さながら短編映画のような組み写真も人の目を引く。ビャトキンは語る。

「写真は、他のものからかけ離れた芸術だとは思わない。例えば私は美術家から色彩とコンポジションの感覚を、音楽家からは気分とリズムを表現する能力を、作家からは思考の広がりと構成能力を学んだし、今も学んでいる。今私が一番心ひかれているのは文学だ。だから好きな作家――チェーホフ、ツルゲーネフ、ジョン・チーバー、フリオ・コルタサルを読むと、私はすぐれた文学を通して受ける感動にひたるだけでなく、すぐれた文学から多くを学ぶ。私の仕事、写真を学ぶのです」

「オリンピックのホープたち」



「しなやかさ」



日本の世論に対するソ日協会の呼びかけ

ソ日協会中央理事会は、2月5日に開いた会議で次のような日本の世論に対する呼びかけを採択した。

尊敬する日本の友人の皆さん！

国際緊張の軽減と核による人類絶滅の防止に助力したいとの心からの希望を指針としてソ日協会は、日本の世論に対し核軍備の増強、地上における核兵器の拡散とその宇宙空間への配備に反対し、その完全廃絶にいたるまでの核兵器の段階的削減のための好条件の醸成をめざす闘争にわれわれの努力を結集することを呼びかける。

今日、思想的、民族的、宗教的、その他の違いの存在にもかかわらず、絶滅から人類を守るという意欲が地球の住民を結集しなければならない情勢が、世界に生まれている。一九八六年を国際平和年と宣言した国連の決定は、まさにこの客観的な現実に迫られてなされたものである。

ソ日協会は、国際情勢健全化の道の今後の探求に期待をもたせたジュネーブでのゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長とレーガン米国大統領とのソ米首脳会談の成果を歓迎した。実生活は、国際関係における率直な二国間および多国間の対話への移行を切実に求めている。

デタントを深める事業で大きな役割を担っているのが世論であって、それは平和を支持するその積極的な行動によって世界で進行しているプロセスに好影響を与え、ソ日関係も含めた国際関係に現れた新しい芽を維持し、増大させる力をもつ。

核時代においては、民族的エゴイズムや戦略的もくろみを超越することが求められている。そういったものの意義は、最重要な価値——平和の維持と比べれば取るに足りないのだ！　そのためには、なによりもまず具体的な行動が、実例による説得が必要である。

周知のように、ソ連は多くの義務を一方的に引き受けた。これは、衛星攻撃兵器を宇宙に展開しない決定であり、一部西欧諸国の領土への米国製中距離核手段の配備に関連した欧州における、われわれの対抗措置の今後の実施の停止であり、広島への原爆投下の記念日に当たる一九八五年8月6日にソ連において実施され、本年初めからさらに3カ月間延長されたあらゆる核爆発の実施に対するモラトリアムの宣言である。

大小を問わずすべての国が世界情勢の健全化プロセスに参加することが重要だ。なぜなら、今日問題になっているのは、全人類の運命であるからだ。核による全滅の危険性との闘争に無関心であったり、傍観していてはならない。この闘争の成功は、多くの点で団結した決定的な行動にかかっている。

ソ連では、もしすべての核保有国が現実主義と善意を発揮すれば、人類は今世紀中にも核による絶滅の危険性から救われることができると考えている。この点に関連して、ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長声明の中で述べられた提案——運搬手段も、弾頭も含めた核兵器を段階的に削減し、二〇〇〇年までに完全に廃絶するという明確で現実主義的な提案は、きわめて重要なものである。

この歴史的プログラムの実現は、公式の政府レベルにおける努力だけでなく、世界のすべての国の広範な世論の一致した行動をも求めている。われわれ、ソ日協会の会員は、非核三原則の厳守を支持し、日本を米国の核基地に変える試みや宇宙の軍事化に反対し、核兵器の禁止をめざす日本の世論の努力を高く評価している。この運動には、日本の広範な住民層が参加している。九〇〇以上の地方自治体が非核宣言を行っているが、これは核の脅威に反対する全世界的な闘争への重要な寄与である。

われわれ、ソ日協会の会員は、平和、軍縮、社会体制の異なる国家間の相互理解の深化を支持する行動を強めることを日本の世論に呼びかける。ソ連と日本は近い隣国であり、両国の国民は極東の平和と安全に対して多くの責任を負っている。われわれは、アジア・太平洋地域をそこに住む諸国民の共同の努力によって平和・善隣・協力の地域とすることを支持している。

われわれ、ソ日協会の会員は、平和と生命を大切に思う日本のすべての人々に対し、広島と長崎の悲劇が決して世界のどこでも繰り返されないようにすることに、二〇〇〇年代に核爆弾の黒い影によって将来の世代の頭上の平和な空がおおい隠されないようにすることに、その努力を傾注するよう呼びかけるものである。

平和を守るために努力の結集を

——グジェンコ・ソ日協会理事長に聞く

ソ日協会が2月5日、日本の世論に対する呼びかけを採択したことについて、同協会のチモフェイ・グジェンコ理事長（ソ連海運相）に本誌記者がインタビューした。

——一九八六年1月15日付のM・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長の声明の中で述べられた、ソ連の新しい平和的諸提案に対する世界の世論の反応をどのように評価しておられるか？

これらのソ連提案に対する肯定的な反応は、世界各国の世論に特徴的な反響である。ソ連の提案はだれをも無関心のままにしておかなかったと言っても、間違いではないと思う。提案は各国のさまざまな国民層でも、政府レベルでも広範に審議されている。

われわれソ日協会会員は、核破滅の脅威から人類を解放する具体的で明確なプログラムが、ほかならぬわれわれの政府によって提案されたことに正当な誇りを抱いている。他方、われわれは、このプログラムを実現するためには、国際共同体のすべての国の集団的努力が必要だということをはっきりと理解している。日本の世論に対し、核戦争に反対する闘いで努力を結集するよう呼びかけるにあたり、われわれは、日本の友好団体とのわれわれの共同行動が、核悲劇の脅威を永久に一掃する偉大な事業への応分の貢献になることを期待している。

われわれは、核爆撃の悲劇を体験し、子どもの世代、さらには孫の世代の健康へのその有害な影響を体験し続けている国民が、核兵器廃絶のための緊急措置をとる必要性を特に痛感していることを知っている。

ソ連もまた、核廃絶のための緊急措置をとることを第一の課題とみなし、その解決に総合的に取りかかるよう呼びかけている。われわれの最終目標は、人類を核戦争の脅威から完全に解放することである。軍拡競争の中止と軍備の徹底的な削減は、M・S・ゴルバチョフの声明の中で強調されたように、「人間の生活環境の破壊、新しいエネルギー源探求の必要性、経済的後進性や飢えや病気との闘争といったますます深刻化するグローバルな問題を解決するためにも不可欠な前提条件」である。われわれのモットーは「発展のための軍縮！」である。

——ソ連は核爆発の一方的なモラトリアムをさらに3ヵ月延長したが、この措置の意義はどこにあるとお考えか？

核爆発を一方的に放棄することは、米国が核実験を継続していることを考慮するなら、ソ連を困難な立場に置くことは、専門家でなくても分かることである。しかし全人類の生存への脅威が増大している条件下では、国家的安全の概念は極めて相対的なものになっている。国際共同体全体にとっての安全は、全般的な安全しかありえない。ソ連の声明で強調されたように、期待はあまりにも大きく、責任はあまりにも重いので、あらゆる可能性を試してみないわけにはいかないのである。

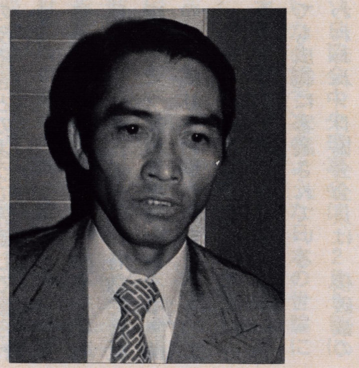
このように、ソ連のこの措置は善意の表れ、具体的な対応措置への招請として重要な意義を持っている。われわれは、結局モラトリアムは2国間のものに、次いで多国間のものになると期待している。

——核の脅威に反対する世界の諸国民の闘争への日本の平和愛好勢力の貢献をあなたはどのように評価しておられるか？

われわれは、日本で反戦、反核運動が広範な規模を持っていることを知っている。これは日本の平和憲法擁護の行動であり、核兵器禁止の全国民的署名運動でもあり、核兵器を積んだ米国艦船の日本の港への立ち入りに反対し、米第七艦隊の艦船への巡航ミサイル〝トマホーク〟の配備に反対するデモでもある。とりわけ最も大衆的で強力な運動の一つ——日本の都市や県の非核地帯宣言運動の成功には特に感銘を受ける。ソ日協会と日本の友好団体との共同反戦行事の実施でもかなり豊富な経験が蓄積された。われわれは今後ともこの方向で日本の友好団体との協力を発展させるつもりである。

ゴルバチョフ声明——私はこう思う (3)

——作家森村誠一氏に聞く



今後15年間に世界中の核兵器を廃絶して、人類が核兵器を持たずに21世紀を迎えるための具体的なプログラムを提案した1月15日付のM・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長の声明（本誌4号付録）は、世界に大きな反響を呼び起こしている。本誌では日ごろから軍縮・平和問題に強い関心を持つ日本の著名な方々に、ゴルバチョフ声明についての感想を伺った。本号では作家の森村誠一氏にインタビューした（聞き手　ノーボスチ通信東京支局長M・エフィーモフ）。

——森村さんにはすでに一〇〇以上もの作品があるわけですが、その中でも軍部と科学者が結びついた場合の危険性について書かれた『死の器』と『悪魔の飽食』の二作品のテーマは、これからおたずねしたい問題に近いものです。今日存在する人類絶滅の脅威——核戦争の脅威について、どのようにお考えですか？

日本国民というのは、核兵器の脅威に対して世界のどの国民よりも敏感だと思います。その理由はまず第一に、日本国民だけが被爆国民であるということです。だから、われわれ日本国民はその体験から世界のいかなる国にも先立って核兵器廃絶運動を推進しなければならない責任があると思います。そうでなければ、ヒロシマ、ナガサキは何のためにあったかということになるでしょう。

第二は、日本が米ソという世界の二大スーパー・パワーの対峙する戦略的に非常に重要な場所に位置している点です。そういう米ソの戦略的な谷間にある国の国民という立場から世界に核廃絶をアピールすることは、最も説得力があるのではないかと考えています。

そういう意味で、自分としても核問題に対して無関心でいることはできません。

——ご存じのように、このほどゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長が核兵器廃絶のための提案をしました。これは人類は核兵器を持たずに21世紀を迎えようという提案で、そのための具体的な道も示しています。作家としてゴルバチョフ提案についてどのような感想をお持ちですか？

数年前、アメリカがヨーロッパにパーシングⅡを配備して、ソ連が軍縮交渉のテーブルから去った当時の状況と比べると、飛躍的な接近だと思います。ゴルバチョフ氏の提案は、私はまず、とてもうれしかった。もちろん、提案はまだ非常に理想主義的なもので、実現するまでにかなりの障害があると思いますが。人類がこれだけ強大な兵器を擁していて、いろいろな利害が対立していると、平和の呼びかけ自体が理想主義的なものになっています。その中でゴルバチョフ提案は非常に勇気があり、人類全体にとって大きな福音であると思います。

アメリカ側は、なぜ正規の外交チャンネルを通さずに呼びかけをしたかとか、SDI（戦略防衛構想）への一種のけん制ではないかとか言って、ゴルバチョフ提案にすぐに歩み寄ろうとはしていませんが、レーガン大統領は一応歓迎すると言っています。また、昨年11月のジュネーブ首脳会談の成果を踏まえて、最近、米ソ関係がかなり明るくなった印象を受けます。米ソ関係はやはり地球の運命を左右しますから、それだけに、大国としてのエゴイズムが人類全体のサバイバル問題より優先されないようにと念願します。

そういう立場から言えば、東西双方のさまざまな相違のすべてを考慮しながら、というよりも留保しておいて、とにかくまず核兵器を無くそうというゴルバチョフ氏の呼びかけは、非常に勇気ある発言で、日本国民にとっても、世界の人類にとっても大変喜ばしいことだと私は考えています。

——ソ連の新聞で読んだのですが、今のアメリカのSDI、いわゆる〝スターウォーズ〟計画の研究は、かつての「七三一部隊」の生体実験、人間をいかに大量に殺すかという研究に、もちろんレベルや技術原理は違うとはいえ、どこか共通するものがある、と書いてありました。七三一部隊のことを書かれた作者として、SDIをどう思いますか？

レーガン大統領は声を大にしてSDIは防衛兵器だと言っていますが、最近はアメリカの学者でも、攻撃兵器にも使えると証言しています。それが純粋に防衛兵器だということはありうるだろうか？　私はSDIに本能的にうさんくささを感じます。SDIでは、ソ連から発射されたミサイルを宇宙で迎撃するということですから、迎撃のための戦力がそのままソ連に向けた攻撃兵器にもなりうるわけで、SDIは大変怖いという感じがします。

アメリカがこのままSDI計画を推し進めれば、ソ連にとって脅威になりますから、当然、ソ連も対抗措置をとるでしょう。そういう観点から見ると、SDIは米ソ両国の新兵器開発競争にいっそう拍車をかけるものでしかない、と言えますね。

——ゴルバチョフ提案は核兵器とともに化学兵器などの大量殺りく兵器を完全に廃絶することも呼びかけています。化学兵器、生物兵器は「七三一部隊」の研究の成果だという見方があります。これについてはどうお考えですか？

化学その他の科学はつねに両刃の剣で、人類に幸福をもたらす反面、最悪のことももたらしています。七三一部隊の研究成果が現代日本医学の原点と言われたり、あるいはアメリカの生物化学兵器の母体になっていると言われ、それゆえに無駄ではなかったという論理もあります。しかし、七三一部隊の研究は医学のためにやったわけではなく、最初から医学、化学、生物学を兵器として使おうという目的で研究、開発を始めています。

例を挙げますと、ノーベルのダイナマイトは最初は人類の福祉に役立てようとして開発されたのですが、たまたま兵器として利用される悪魔的側面も持っていた。エレクトロニクスもそうです。コンピューターがなくては、現代の兵器は成立しませんからね。こうしたものは、化学その他の科学が研究の過程で、あるいは発達の成果として悪魔的側面を現した例です。

しかし、七三一部隊の場合はそうではなく、最初からそういう悪魔的側面に目をつけて研究を行い、その結果がたまたま医学その他の学問に役立ったという本末転倒の例なのです。ここに七三一部隊の特徴があります。

だから、役に立ったからいいじゃないかという論理は非常に悪魔的であるし、そういう立場で化学や医学を研究すべきではないと考えます。確かに、真理の探求を目的とする学問は、悪魔的側面だけをオミットして研究を進めるわけにはいきません。核兵器も原子力科学を研究する過程で副産物として生まれてきたもので、原子力科学という学問の原点においては核兵器は念頭になかったと思います。戦争がぼっ発して、敵よりも強大な兵器を開発しようということで原子力科学が利用されたのですから。

学問というものは常にそういう悪魔的な裏面と背中合わせになっています。今回のゴルバチョフ提案は、とにかくその背中合わせの部分だけをオミットして、大量殺りく兵器を廃絶しようという呼びかけなので、私には非常に理想主義的に見えますが、これには人類の英知がこめられており、これが達成できるかできないかは、今後の人類の努力にかかっていると思います。

——最近の科学の発展はめざましいものがあります。その成果が軍事面に利用される可能性を考えると、われわれは果たして21世紀まで生きられるのだろうかという思いにとらわれます。この問題では、森村さんは楽観主義者でしょうか、悲観主義者でしょうか？

私は人間はそれほど馬鹿ではないと考えています。楽観主義というより楽観したいですね。

これだけ広大な宇宙の中で生命体が存在し、しかも高度な文明を持っている惑星というのは、今のところ地球しか考えられないわけです。そして、宇宙の歴史から見て、ある惑星に生命体が存続する期間というのは、フラッシュをたいて、あたりが一瞬明るくなった時間程度だそうです。しかも、この広大な宇宙に地球と同等あるいはそれ以上の文明を持つ生命体が存在する可能性は十分あっても、その惑星が地球と同じ時期に共存することはほとんどありえないだろう、地球のフラッシュがその惑星と同調することはほとんどないだろうと言われています。そうすると、今この宇宙で生命体が、しかも高度の文明を持っている生命体が存在するのは地球しか考えられません。これだけ広大な宇宙の中で唯一高度の文明を達成した地球を、その達成の結果として人類が自ら否定してしまうほど、人間は馬鹿ではないと考えたいですね。とくに今回のゴルバチョフ提案を見ると、まだ捨てたものではないという感じがします。

前に確かレーガン大統領だったと思いますが、「アメリカとソ連は文化も歴史も経済体制もいろいろな点で違っている。しかし、一緒に生きていくか、あるいはお互いに滅びるかの選択しかないという点では一致している」ということを言っています。確かにその通りで、くい違いや考え方の相違があっても、一緒に生きていこうと決意しない限り、両者とも破滅しなければなりません。米ソ二つのスーパー・パワーが仲良く生きていくことを拒否した場合は、人類の未来はないでしょう。その点でソ連とアメリカの責任は非常に大きいということです。

ノーボスチ通信特派員報告

ソ連海員の英雄的行動

S・ブラーノフ記者
（ウェリントン）

去る2月16日、ニュージーランド南島のケープ・ジャクソン沖でソ連の客船ミハイル・レールモントフ号（二万三五二トン）が暗礁に乗り上げ沈没したとき、乗組員が英雄的な行動をとったことが賞賛の的になった。

レールモントフ号が難破して、船底に大穴があいたとき、船上にはニュージーランドの水先案内人が一人乗りこんでいた。乗組員がなんとか船を救おうとして骨を折ったがその甲斐もなく、四〇八人の乗客を全員船から退去させることに決まった。乗客の多くは中高年者だった。

夜でもあり、風波が荒れ狂う悪条件の下でソ連の乗組員たちは何度も乗客を抱きかかえて、救命ボートへ移した。間もなく遭難現場へニュージーランドの船が何隻もやってきて、救命ボートに乗っている船客たちを収容した。

真っ先に遭難現場に到着したニュージーランドのフェリーボート、アラフラ号のジョン・ブルー船長は、船客を退去させた際のレールモントフ号の乗組員の行動をほめたたえて、彼らは全員すばらしい忍耐心とチームワークを発揮して救助作業にあたったと語った。

また救出された船客のオーストラリア女性アンナ・アールドさんは、あのような危急の際にソビエトの乗組員たちがとった行動はとても英雄的で、船から乗客を退去させるときの用意をきちんとしてくれたおかげで、恐慌状態も起こらず、船客に一人の犠牲者も出なかったと語った。

またやはり船客の一人だったシドニーの事務員ダグラス・マッグテーグさん（68歳）も「ロシア人の船員たちの態度は実に立派だった。あんなひどい状況のなかで精一杯のことをやってくれた。レールモントフ号の船底に穴があいてもう危なくなったとき、ソ連の乗組員は乗客とその安全のことをまず第一に考えてくれた」と、口をきわめて乗組員をほめたたえた。

レールモントフ号の船員と、サービス係の女性たちは乗客が全員船から退去したのちにはじめて、沈没してゆく船から降りたが、その際乗組員の一人が死んだ。

この事故のあとウェリントンのソ連大使館あてにソ連側の死者に弔意を表し、乗組員たちへの援助を申し出るニュージーランド国民からの手紙が続々届き、また同じ内容の電話のベルが終日鳴り響いた。

ひん発する自動車爆破テロ

E・ミキチェンコ記者
（ベイルート）

つい先ごろ東ベイルートのフルン・アン＝シュバク地区の、人通りの多い交差点で大惨事が起こった。正午ごろ銀白色のメルセデス・ベンツが1台路上に止まり、非常点滅灯をつけると、運転手が降りてきた。ボンネットを開くと、エンジン部分に首を突っ込んで、いじりはじめた。それから通りを横切って、そこに待機していた別の自動車に乗り込むと、走り去った。1分後、乗り捨てられた無人のベンツが物すごい爆発を起こして車体は木っ葉みじんになり、その場所に深さ2m、直径5mのすり鉢型の穴ができた。近所に止めてあった数十台の自動車が燃え上がり、炎と煙の中を興奮した人々が走り回った。近辺の家屋のバルコニーが崩れて鉄筋コンクリートの骨組みが垂れ下がり、家の中から子供の泣き声や、助けを求める叫び声が聞こえてきた。赤い制服姿の勇敢な救護隊員たちが忙しく飛びまわり、崩れた建物と炎の中から死傷者を運び出した。

隣のガソリン・スタンドに延焼しそうになって、消防隊員があわててホースを向け直した。

一九七五年以来、爆発物を仕掛けた自動車の爆破事件はこんどで86回目であり、一般市民の死者25人、重傷者一〇〇人以上を出した。

「自動車に爆発物を仕掛ける手口はますます巧妙になっているので、特殊な探知器を使っても爆発物を仕掛けた自動車を事前に発見するのは簡単ではない」と、レバノンの公安隊のある士官は語っている。

「以前は爆薬を仕掛けておく場所はトランクの中というのが普通だったが、このごろは座席の内部、車内の内張りの下、ドアやフェンダーの内が隠し場所だ。タイヤの中ということもある」

おまけに、爆薬を仕掛けた自動車はかならず「満タン」にしてあるし、トランクに釘とか鉄の削りくずをいっぱい詰めておくことが多い。爆発すると、それが数百m四方へ飛んで、一種の殺傷用ボール爆弾の効果を上げるのである。爆弾は時限装置か特殊なリモートコントロール装置で爆発させる。

昨年末レバノンの治安警察が地下テロ組織のメンバー4人を逮捕した。この4人は6回も自動車の爆破を企てたが、訊問の結果、イスラエルの特務機関モサドの将校とスパイから資金と指令を受けていたことが判明した。自動車を爆破する通りとその時刻まですべてモサド機関が指図していたという。

これについて地元のアス・サフィル紙は「自動車爆破テロはイスラエルの手先たちのお得意のやり口である。彼らはこのテロ行為によってレバノン情勢を一触即発の事態に追いやろうとしている。フルン・アシ＝シュバク地区で起こった爆弾テロはそのよい証拠である」と論じている。

ソ連の新聞記事から

（一九八六年2月後半）

心からの兄弟的交歓

2月27日、ソ連の多くの都市の通りや広場、工場の職場は、階級や信条、闘争において兄弟である人々の無数の交歓の場となった。ソ連国民とソ連共産党第27回大会に参加した外国からの来賓たちが、それぞれの民族の精神財の最良のものを分かち合い、相互の経験を学び合い、ふたたび社会正義と真の自由をめざす闘いに立ち上がるために交歓したのである。文明の福祉がすべての人々の手に届くものになるために、人類の生活から軍国主義と侵略、暴力と人種差別、不平等と抑圧を一掃するために交歓したのである。

モスクワの労働組合会館の円柱の間では、モスクワの党活動家と第27回党大会に出席した外国代表団の会合が催された。B・N・エリツィン・ソ連共産党中央委員会政治局員候補・同モスクワ市委員会第一書記が来賓を歓迎した。

レニングラードではスモーリヌイの講堂で外国来賓と同市の党活動家の会合が催された。市の勤労者を代表してI・I・ジェルノフ・バルト造船所旋盤工作業班長が来賓に歓迎の辞を述べた。外国の党代表団はそれぞれ、ネバ河畔の工業企業を視察したり、レニングラードの英雄的防衛者の霊が眠るピスカリョフ記念墓地に詣でたり、スモーリヌイのレーニン記念碑に献花したりした。

（イズベスチヤ紙2月28日号）

宇宙に新しい科学ステーション

宇宙開発計画に従って一九八六年2月20日、ソ連で軌道科学ステーション「ミール」が打ち上げられた。「ミール」は6個のドッキング・ユニットをもつ新しいドッキング・システムを備えており、科学目的と国民経済目的の専用軌道モジュールをもつ常設的な多目的有人コンプレクス建設用の基地ブロックである。ステーションでは、最新の電子技術を利用して運行、搭載システム、科学機器の制御プロセスが最大限に自動化されている。電源システムの出力が増大し、宇宙飛行士の作業と休息のための一層快適な環境がつくられ、新しい設備が備えられている。

ステーション「ミール」は飛行の初期の段階に無人飛行、次いで有人飛行でステーションの構造の諸要素、搭載システム、機器をテストすることが計画されている。同時に中継衛星を利用したステーションの飛行管制が仕上げられる。将来、科学機器を備えた専用モジュールを基地ブロックへ運ぶことが予定されている。

現在、ステーション「ミール」と「サリュート7号」が地球周回軌道を飛行しており、飛行管制と送られてくる情報の処理は、ソ連領内にある追跡ステーションとソ連科学アカデミーの学術調査船を使ってモスクワ近郊の管制センターで行われている。

ソ連共産党第27回大会を記念して実施された軌道科学ステーション「ミール」の打ち上げは、宇宙空間の開発における新たな一歩である。

（イズベスチヤ紙2月21日号）

ハレー彗星への途中で

金星とハレー彗星の観測を目的とする自動惑星間ステーション「ベガ1号」、「ベガ2号」の飛行は1年以上続いている。現時点で両ステーションは地球から一億五五〇〇万km以上の距離にある。

飛行中、ベガ1号およびベガ2号とは無線通信が定期的に行われ、ステーションの軌道パラメータが割り出され、補助システムと科学機器の作動が点検されている。一九八五年12月と一九八六年1月にオーストリア、ブルガリア、ハンガリー、ドイツ民主共和国、ポーランド、ソ連、フランス、ドイツ連邦共和国、チェコスロバキアの学者と専門家によって両ステーションの作動が完全にチェックされた。

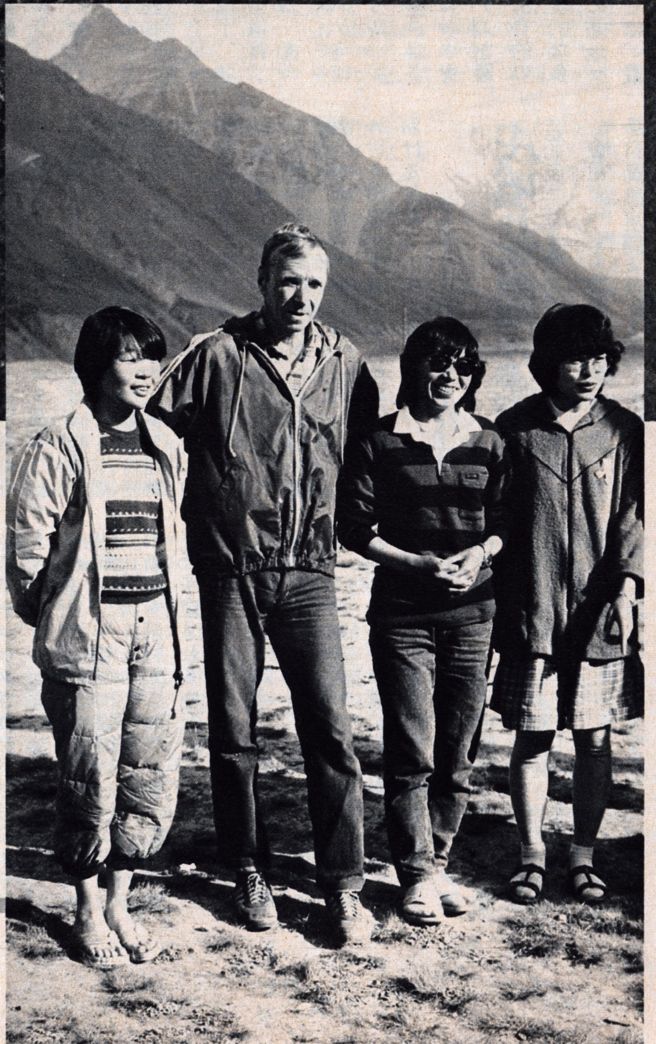
ハレー彗星との出会いを確実にするため、2月10日、ベガ1号の軌道が修正された。ベガ2号はほぼ計算どおりの軌道を飛行しており、従って軌道修正は予定されていない。

2月12日から、このユニークな実験の最終段階に向けてステーションの準備作業が始まった。地球からの指令によって自動追尾プラットホームが飛行状態から作業状態に切り替えられ、テレビ・システムが作業の準備を完了した。宇宙から入ってくる情報は、ソ連科学アカデミー宇宙研究所やハレー彗星の総合的研究に参加しているソ連と諸外国の科学センターで処理され、研究されている。

（イズベスチヤ紙2月18日号）



パミールの峰々



パミールの国際登山キャンプで（右から安原さん、田部井さん、一人おいて柳沢さん）

パミールの高峰に挑んだ日本の女性登山家

登山家
フェリクス・スベシニコフ

日本の登山愛好家の間では、ソ連の山に登る人が次第に増えている。この10年間に日本の数千人の登山家、旅行者、山岳スキー愛好家がカフカズ、パミール、アルタイの山々を訪れた。これらの山地には国際登山キャンプが開かれており、夏と冬のシーズンには世界各国から登山家たちがやって来る。

私が会った日本人の中には、たとえばエルブルース山（五六四二m）山頂からスキーで滑降した三浦雄一郎氏がいる。レーニン峰（七一三四m）のふもとで出会った84歳の東京の増田さんは、高齢にもかかわらずソ連旅行を思い立ったという。

一九八五年の夏には日本の女性登山家、田部井淳子さんがソ連国家スポーツ委員会の国際登山キャンプのお客になった。彼女はソ連でよく知られ、尊敬されている。ソ連登山界のリーダー格、ビタリー・アバラコフ、エドゥアルド・ムイスロフスキー、エベレストの無酸素登頂に成功したウラジーミル・バルイベルジンも、一九七五年にエベレスト登頂を果たしたこの世界一流の日本人女性登山家を高く評価している。

私はパミール登山から帰って来た田部井さんとモスクワの"スポーツ"ホテルのホールで出会った。日には焼けているが、しとやかで、いくらか遠慮がちでさえあるこの女性の中で、家庭の主婦と登山家がどう両立しているのか、不思議な感じがした。私たちは一緒にモスクワの市内をドライブし、レーニン丘のモスクワ大学、ルジニキの中央スタジアムを見物した。

「成功おめでとうございます。あなたは1シーズン中に七〇〇〇m級を3座——コルジェネフスコイ峰（七一〇五m）、コムニズム峰（七四九五m）、レーニン峰（七一三四m）を征服されました。このような快挙は男性でもそう多く成し遂げていません。ぜひもういちどおいで下さい。わが国の山はあなた方のために開放されています」と公式のレセプションでアナトリー・コレソフ・ソ連国家スポーツ委員会副議長があいさつした。

これに応えて田部井さんは——「ポベーダ峰とハン・テングリにも登りたいと思います。国際登山キャンプは大変気に入りました」と語った。

パミールからモスクビン氷河のキャンプまで下って来た田部井さんと仲間の安原真百合さん、柳沢伸子さんは感謝のしるしに「ステンカ・ラージン」と「ともしび」をロシア語で歌ってくれた。七〇〇〇m級3峰を征服したあと習ったのだという。

田部井さんは語る——「私の若い仲間たちにとっては最初のコルジェネフスコイ峰の斜面が特にきつかったようです。彼女たちはまだ高所に順応していなかったからです。彼女たちを助け、一歩一歩頂上まで、文字通り引っ張り上げてやらなければなりませんでした。

私は彼女たちを激励し、勇気を持つこと、自分に打ち勝つことを学ばせました。山ではこれがいちばん大事なことだと思います。コルジェネフスコイ峰を征服したあとは、自信をつけたようです。

荷物を全部自分で運び上げなければならなかったのも異例なことです。パミールにはシェルパはいません。ソ連の登山家はシェルパなしでやっています。もっとも、それはそれでいい面もありました。というのは早く運動のリズムがついたからです。負荷があった方が早く高所に順応できます。それでも私の仲間は頂上付近では息も絶えだえで、最後は気力だけで登りました。

これは成功だったと思います。登山家にとって大事なのは体力だけでなく、強固な意志の力だ、というのが私の持論だからです。

こうして最初の七〇〇〇m級の峰を征服、次のコムニズム峰に挑戦したわけですが、これはコルジェネフスコイ峰から2昼夜かかるところにあります。ところがコルジェネフスコイ峰を下るときは天気が悪く、エストニア人のコーチが私たちの荷物を持ったりして、助けてくれました。とても感謝しております。イリマル・プリイメッツさん、ヤン・クンナプさん、アリフレド・ロフムスさん、カレフ・ムルさんで、体力のあるベテラン登山家であるだけでなく、本物の紳士でした。レニングラードっ子のボリス・シリンさんも気に入りました。落ちついた頼もしい人で、やはり頑健でした。この人とはもう一度どこかへ登りたいと思います。

私たちはパミールにいる間、日本でコンピューターを使って作成した日程表にしたがって行動しました。コルジェネフスコイ峰登頂——7月28日、

コムニズム峰登頂——8月7日、レーニン峰登頂——8月15日といった具合です。ほとんど予定に狂いはありませんでした。プログラムの修正に参加して下さったソ連登山連盟のエドゥアルド・ムイスロフスキー会長にも感謝しています。私たちはパミールで貴重な体験をさせていただきました。パミールはまさに"ミニ・ヒマラヤ"で、訓練のためには最適の場所だという確信を深めました」

私自身も田部井さんたちが登った峰へ行くことになった。プレベスニク支脈の突出した険しい岩。コルジェネフスコイ峰の斜面の長い、つらい登り。まるでサワークリームの中であえぐようなレーニン峰の果てしない雪原。滑落しないのが不思議なほどのコムニズム峰頂上直下の氷の稜線……田部井さんたちのパーティーはこれらすべてを克服したのだ。

「登山という観点からパミールとヒマラヤのちがいは？」

「私たち日本人にとっては、ヒマラヤよりもパミールの方が手が出しやすいということです。ヒマラヤ遠征には2カ月以上かかります。この間に八〇〇〇m級の山は一つしか挑めません。時間もかかるし、費用もかかります。シェルパへの支払い、入山料も必要です。パミールはちがいます。ここでは3週間あればいくつかの高峰に登れます。これは日本の労働者の平均休暇日数に相当します。だからパミールの方が都合がいいし、安くすむわけです。

パミールでは交通の便がいいということも気に入りました。レーニン峰はふもとまで車で行かれますが、こんなことはヒマラヤでは考えられません。パミールは非常にコンパクトで、一つのベースキャンプから短期間にさまざまな山に登ることができます。さらに、ここでは安全について大いに配慮されています。たとえば私たちは、モスクビン氷河の救援隊長でコーチのビャチェスラフ・グルホフさんから貴重なアドバイスをたくさんいただきました」

女性の登山について、女性のヒマラヤ登頂についての田部井さんの話は非常に面白かった。ソ連には七〇〇〇m級の4座すべてを征服して"ユキヒョウ"の称号を与えられた女性が6人いることを知って田部井さんは驚き、自分もそうなりたいとうらやましがった。

＊　＊　＊

私が田部井さんと会ってから、すでに半年たった。私たちはいまも連絡を取り合い、ニュースを交換している。

ことしの2月4日午後3時52分、ソ連の最高地点——コムニズム峰にソ連の登山家たちが冬季初登頂を果たしたことが分かったとき、私はすぐに川越市の田部井さんに電話した。

「コムニズム峰の冬季登頂ですって!?」——田部井さんは信じられないといった風だった。「不可能ですよ！　夏でさえ大変なんですから。自分が登った経験からして、冬季登頂がどんなに困難なものだったか想像できます。氷、雪、寒さ——すべて極限を超える条件です。コムニズム峰の冬季登頂は、エベレスト登頂に匹敵します。

いずれにしても大変うれしいことです。私はパミールですでにソ連の登山家たちの実力を納得しています」

お知らせ

次の本をご希望の方に差し上げます。書名を明記の上、送料分の郵便切手を添えてソ連大使館広報部パンフ係へお申し込み下さい（本代は不要です）。

☆『世界平和をめざすソ連の立場』
V・クズネツォフ著、ソビエト内外政策研究会訳、アジア書房刊、B6判一五六ページ、一部の送料二〇〇円。

☆『ソ連の平和政策と日本』
D・ペトロフ著、ソビエト内外政策研究会訳、アジア書房刊、B6判一四三ページ、一部の送料二〇〇円。

＊なお、以上2冊一緒の場合の送料は二五〇円。

☆『核惨事とアジア』
A・ハバロフ、A・スネギン著、ノーボスチ通信社出版局、新書判88ページ

☆『アメリカの核脅威とアジア』
V・ルキン著、ノーボスチ通信社出版局、新書判一一〇ページ

＊この2点はセットでお申し込み下さい。送料は2冊で二〇〇円です。

ロシア語散歩 ⑦

知っておくと便利な六つの言葉

外国語を学ぶには大変な労力と時間がかかることは誰でも知っています。それでも私たちはどこか外国へ行くことになると、あわてて会話帳や辞書を買ったりして、とにかく最小限必要な言葉だけは知ろうとします。

実際、どの国の言語にも話し相手と交渉に入ったことを示すという機能だけを持つ言葉（単語）があるのです。この場合、その言葉にはそれ以上の意味はありません。

「私たちは言った——
〝こんにちは〟
ところで何を
言ったのか？
でも不思議、何だか
楽しくなってきた」

と、あるソ連の詩人は書いています。

順を追って最小限の六つの言葉を説明しましょう。

1　まず会った時と別れる時の言葉を覚えなくてはなりません。ロシア語ではあいさつの言葉はたくさんあります。ある言葉は友人間でしか使われませんし、またある言葉はどんな人にでも使います。一番よく使われるのは Здравствуйте（ズドラーストヴィチェ）です。このあいさつは昼夜を問わず、誰に対してでも使えます。この言葉には健康を願う気持ちがこめられています。別れる時は До свидания（ダスヴィダーニャ）と言い合って、ロシア人はまた会うことへの期待を伝えます。

2　次の三つの言葉も役立つでしょう。Спасибо（スパシーバ）と、Пожалуйста（パジャールスタ）と、Извините（イズヴィニーチェ）です。ではどんな場合に使うのでしょうか？

Спасибо（ありがとう）——あることに対してお礼を言う機会はたくさんあります。自分の泊まるホテルを探しているとします。通行人にホテルの名前を書いたカードを見せれば、どう行ったらいいかを身ぶり手ぶりで教えてくれるでしょう。そうしたら、ほほえみながらСпасибо と言いましょう。相手もきっとほほえんで、Пожалуйста（どういたしまして）と言うでしょう。

Извините（ごめんなさい）——もし思いがけず誰かを押してしまったり、何か迷惑をかけてしまった場合に言います。

ロシア人はこのほかにも、話を始める前に、つまり相手の注意を自分に向けたい時にИзвините を使います。Извините と言って次に質問や伝えたいこと、要望を言うわけです。

確かに何かを聞いたり伝えたりするには、たくさんの言葉を覚えなくてはなりません。ところで人に何かを頼むにはどうしたらいいでしょう……

3　ロシア語には、これさえ知っていればたくさんの願いを表現できるという魔法のような便利な言葉が一つあります。それは Можно？（モージナ？）で、質問のイントネーションで発音します。

あなたはタバコを吸いたくなりましたが、そこで吸っていいかどうか分からないという時があります。そんな時は、Можно？（いいですか？）と聞いて、タバコを見せるしぐさをして下さい。ロシア人はすぐに理解して、うなずいて、Да, пожалуйста（はい、どうぞ）と言うか、否定的に、Нет, извините（いいえ、申し訳ありませんが）と言うでしょう。

タクシーに乗る時は、あなたが行くべき所の住所のメモを運転手に見せ、Можно？と聞いて下さい。これはつまり、「私が行くべき所が分かりますか？　私をそこまで運んでくれますか？」と聞いていることになります。

レストランなどのテーブルで塩を取りたくても届かない時は、Можно？と頼んで塩を指し示して下さい。すぐに塩が手渡されてくるでしょう。

何かをたずねたり、許可をもらいたい時、何かを頼みたい時にこの魔法の言葉を上手に使えるシチュエーションはいくらでも挙げることができます。もちろんロシア人自身はさまざまな場合にさまざまな表現を使いますが、外国人は、しかもロシア語を学び始めたばかりの人ならなおのことこの言葉一つで十分で、あとはジェスチャーやほほえみ、目の表情でカバーできます。あといくつかの例を挙げてみましょう。

——ドアをノックして、Можно？と言えば、入る許可を求めていることです。返事は Да-да, входите（ダーダー、フハジーチェ＝どうぞ、お入りなさい）となるでしょう。

——Можно？と言って手でドアを開けるふりをします。ホテルのメードは鍵を要求されていることを理解します。

——Можно？劇場の客席でこう言えば、あたりの観客はその人が自分の席に着きたいのだと理解します。

さて、六つの言葉を覚えたら、あなたはもうホテルでこんなやりとりが始められます。

——Здравствуйте！
——Здравствуйте.
——Можно？（鍵を指し示す）
——Пожалуйста.（この場合は「どうぞ」の意）
——Спасибо.（鍵を落とす）О！Извините.（フロアマネジャーがもう一度鍵を渡す）
——Спасибо.
——Пожалуйста.（どういたしまして）
——До свидания.
——До свидания.

こんなに長い会話がたった六つの言葉でできるのです。

今日のソ連邦

一九八六年4月1日号

昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可　発行人　加藤宣幸
編集・ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3－9－13・電話03・447・3536）
定価　一五〇円
（購読料は会費に含まれる）